

埼玉県本庄市

御手長山古墳発掘調査報告書

本庄市教育委員会

序

埼玉県の県北地区、わけても本庄市を中心とした地域は、埋蔵文化財の宝庫といわれております。踏みしめる大地に、どのような埋蔵文化財が眠っているのであろうかと、思いを先人の歴史に馳せると、その生活やロマンが、そこはかとなく展開し、心身の躍動を覚えます。

最近、上越新幹線工事の進展、関越高速道路工事の進捗、それに、都市化の波の北進にともない、地域開発が急ピッチに進行した結果、古墳の発掘調査、遺跡の発掘調査が各地で続行されています。

御手長山古墳の発掘調査も、昭和52年6月16日に開始され、同年12月30日まで、6ヶ月半を費して、実施されました。

埼玉県教育局文化財保護課の係官のご指導のもとに、埼玉県立さきたま資料館学芸員小川良祐氏に、調査員として現地の発掘調査の指揮をお願いし、本庄市教育委員会社会教育課文化財係の長谷川勇主事を中心にして、多人数の関係者のご協力と、地権者をはじめ、地域住民の温いご支援をいただいて、作業は順調に進み、所期の目的を達することができました。

種々の貴重な埴輪、数々の先人の生活を秘めた遺物にふれて、いまさながら、郷土の悠久な歴史の息吹きに、いいしれぬ感懐が湧くのを覚えます。温故知新の言のごとく、文化遺産の尊重は、即現在未来の生活発展の基盤であると信じます。今後も、文化財保護に、格段の努力を傾注してまいりたいと存じますので、いっそうのご指導ご鞭撻をお願いいたします。

発掘調査、ならびに、本記録作成にあたり、ご懇切なるご指導をいただきました埼玉県教育局文化財保護課の係官各位、県立さきたま資料館の先生方、それに、心温るご協力ご支援をいただきました多くの関係者のみなさんに、深甚の感謝を捧げて、お礼のことばにかえさせていただきます。

昭和53年9月30日

本庄市教育委員会教育長

飯島 彰

例 言

- 1、本書は本庄市が御手長山古墳発掘調査会に委託した埋蔵文化財の記録保存のための、御手長山古墳発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は国庫補助金、および埼玉県費補助金を受けたが、整理・報告に要する費用は、本庄市教育委員会が負担した。

- 3、遺跡の概要は下記のとおりである。

名 称	御手長山古墳 (本庄市167号遺跡)
所 在 地	埼玉県本庄市大字小島字上前原1697-2 (墳丘)
	1679-1 1681-1 1697-1
	1697-3 1701 (以上周堀)

- 4、発掘調査、出土品の整理、写真、図版等の作成、および本書の編集は担当者の指示、指導により長谷川が行い、担当者である小川良祐氏の加除筆をうけた。
- 5、家型埴輪の復元は高橋一彦氏、図版の作成は柴崎起三雄氏の助力があった。
- 6、本報告書の断面図の土層名は統一し、第9図に示した。
- 7、第3図の御手長山古墳、墳丘実測図は、菅谷浩之氏と本庄高校考古学部が、測量した図を、了承を得て作図したもので『本庄市史、資料編』考古73頁の実測図と同じ図から作成した。
- 8、本書に掲載した地図は、(第1図)建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/5万地形図を複製したものである。(承認番号)昭53関複 第61号。
- 9、出土人骨については新潟大学医学部、第一解剖学教室 小片保教授、第一解剖学教室 加藤克知 平田泰治 三村一郎 菅川幸夫 松村博雄氏に鑑定をうけ、論文を掲載した。

石材については埼玉県教育局文化財保護課主事、本間岳史氏の鑑定をうけ、論文を掲載した。

- 10、調査にあたって次の方々からの指導、助言があった。

早川智明 菅谷浩之 高橋一彦 柴崎起三雄 駒宮史朗 福島典敏 横川好富

特に金子真土、水島治平両氏には細部にわたり、助言を得た。

調査にあたり次の方々から協力があった。

野村鶴一、大友務、久保雅雄、福島基雄、山崎武、栗田剛、山本厚生、諸岡英雄、塚越喜太郎
小野英彦 早稲田大学本庄校舎、伊勢崎市教育委員会、鴻巣市教育委員会、本庄高校考古学部
深谷赤十字病院検査部

目 次

序
例 言
目 次

本庄市教育長 飯 島 彰

御手長山古墳発掘調査

I	発掘調査の契機と経過	1
1	発掘調査にいたる経過	1
2	発掘調査の経過	2
II	御手長山古墳の立地と環境	6
1	地理的環境	6
2	歴史的環境	7
III	御手長山古墳	14
1	御手長山古墳と周辺	14
2	御手長山古墳の概要	15
3	内部主体	16
4	外部施設	21
5	出土遺物	23
IV	調査のまとめ	52
	御手長山古墳および封土に埋葬された人骨群について	小 片 保 加 藤 克 知 平 田 泰 治 三 村 一 郎 菅 川 幸 夫 松 村 博 雄 63
	御手長山古墳、石室使用の石材について	本 間 岳 史 72

挿 図 目 次

第 1 図	御手長山古墳の位置と周辺古墳群分布図	8
第 2 図	旭・小島古墳群分布図	折り込み
第 3 図	御手長山古墳周囲墳丘実測図	別図
第 4 図	御手長山古墳全測図	折り込み
第 5-1 図	御手長山古墳掘り方実測図、版築断面実測図	17
第 5-2 図	御手長山古墳石室根石実測図	17
第 6 図	御手長山古墳石室実測図	別図
第 7 図	御手長山古墳石室石組番号付定図	19
第 8 図	御手長山古墳石室使用石材実測図	20
第 9 図	御手長山古墳墳丘断面実測図(上部)	別図
第 10 図	御手長山古墳墳丘断面実測図(下部)	別図
第 11 図	御手長山古墳葬石実測図	22
第 12 図	御手長山古墳周堀トレンチ実測図	別図
第 13 図	御手長山古墳石室内遺物出土状況実測図	24
第 14 図	御手長山古墳石室出土耳環実測図	24
第 15 図	御手長山古墳石室出土玉類実測図(1)	25
第 16 図	御手長山古墳石室出土玉類実測図(2)	26
第 17 図	御手長山古墳石室出土玉類実測図(3)	27
第 18 図	御手長山古墳石室出土武器・武器実測図(1)	37
第 19 図	御手長山古墳石室出土武器・武器実測図(2)	38
第 20 図	御手長山古墳石室出土武器・武器実測図(3)	39
第 21 図	御手長山古墳石室出土武器・武器・馬具・留金具実測図	40
第 22 図	御手長山古墳石室出土馬具・他実測図	42
第 23 図	御手長山古墳石室出土須恵器実測図	43
第 24 図	御手長山古墳墳丘出土家型埴輪実測図	43
第 25 図	御手長山古墳墳丘出土家型埴輪実測図	折り込み
第 26 図	御手長山古墳墳丘出土埴輪実測図	45
第 27 図	御手長山古墳墳丘出土人物埴輪実測図	46
第 28 図	御手長山古墳墳丘出土人物埴輪実測図	48
第 29 図	御手長山古墳周堀出土埴輪実測図	49
第 30 図	御手長山古墳墳丘および封土に埋葬された人骨副葬品実測図	50

御手長山古墳発掘調査

I 御手長山古墳発掘調査の契機と経過

1. 発掘調査にいたる経過

本庄市は埼玉県北西端にあって、群馬県に接する人口52000余の小都市である。群馬県に接していることから古代より毛野国の影響を受け、利根川の沖積低地に面した本庄台地上や、神流川氾濫原の微高地上を中心として現在約168ヶ所の遺跡が確認されている。

これらの遺跡は集落址を中心として古墳や桑里遺構であるが、近年外的要因によって変貌を余儀なくされている。上越新幹線、関越高速道を始め大手宅造業者の住宅建設等は事前の調整と調査によって記録保存の措置が講ぜられるが零細業者や個人の宅造、住宅建設等は周知の遺跡であるにもかかわらず破壊される場合が多く保存措置の必要性が急務となっている。

かかる現状のなかにあつて昭和51年6月初旬、埼玉県遺跡パトロール員、菅谷浩之氏より御手長山古墳の立木が伐採されている旨の連絡が本庄市教育委員会にあり、ただちに地主に対して今後の処置の事情聴取と注意を促した。6月26日再び菅谷氏よりブルドーザーによって破壊されているとの連絡を受け、ただちに工事中止を申し入れ7月13日埼玉県文化財保護課職員に出張を請い現地を確認された。その後種々の紆余曲折を経て本庄市教育委員会と県文化財保護課、本庄市教育委員会と地主とのブリッジ協議により今後の処置を検討した結果、記録保存のための発掘調査を昭和52年度に実施することになった。

昭和52年4月30日、本教社発第125号をもって本庄市長は昭和52年度文化財保存事業費補助金交付申請書を文化庁長官に提出し、同年7月30日委保第71号付で文化庁長官より決定通知された。その間県文化財保護課の御尽力により調査は、県立さきたま資料館学芸員小川良祐氏が担当することになり、御手長山古墳発掘調査会を組織し現地での調査に入った。

なお発掘調査の組織は下記のとおりである。

発掘調査の組織

調査主体者	御手長山古墳発掘調査会	
	会 長	山田一男 (本庄市長)
	副会長	飯島 彰 (本庄市教育委員会教育長)
	委 員	小川良祐 (担当者)
		川瀬頼司 (本庄市文化財保護委員会委員長)
		柳田孝司 (本庄市文化財保護委員会副委員長)
		関口俊次 (本庄市社会教育委員会委員長)
		水島治平 (本庄市史編集室)
		竹内清四郎 (本庄市教育委員会社会教育課長)
		塩原 暁 (本庄市教育委員会社会教育主事)
	事務局長	笠原治夫 (本庄市教育委員会社会教育課長補佐)

		損斐龍一	(本庄市教育委員会社会教育課主事)
		桜場卓男	(本庄市教育委員会社会教育課主事補)
		長谷川勇	(本庄市教育委員会社会教育課嘱託)
調査担当者	小川良祐		(埼玉県立さきたま資料館学芸員)
調査補助員	長谷川勇		
	鈴木 純		(国学院大学学生)
	金子 章		(日本大学学生)
作業員			(延572名)
関係地主	久保忠一	久保肇二郎	久保行義 今井亮一 関口貞雄

2. 発掘調査の経過

発掘調査は昭和52年6月16日に開始、同年12月30日までの6ヶ月半のうち断続的に実働82日を費した。この間の調査は大きく3つの時期に分けられる。

1次調査 6月16日～ 7月27日 墳丘上部 周堀 主体部

2次調査 9月12日～ 9月26日 上段葺石

3次調査 11月10日～12月30日 墳丘下部 石室後込め 掘り方 下段葺石

以上のように3期に分けざるを得なかったのは、奈良国立文化財研究所の研修に参加したこと、予算措置に苦慮したこと、加えて当初予想しなかった調査まで記録に残そうと努めたことなどによる。

調査日誌は以下のとおりである。

- 6月14日 本庄市役所都市計画課職員により墳丘実測を行う。
- 6月16日 墳丘前にて打ち合せ後周辺下刈り及び、清掃。墳丘を東西南北の基準線によって区画、基準線を中心に幅60cmの土手を残して作業にかかる。墳頂より東北をA区、西北をB区、東南をC区、西南をD区とする。C区で1・4m下げ盗掘溝確認。
- 6月19日 雨模様にて危ぶまれたが作業、D区作業開始。
- 6月20日 各区に分れ作業、C区墳頂下1・8mに埴輪片多し D区盗掘溝内より頭骨検出。
- 6月21日 A区では粘土質にて作業困難。C区3・1mまで下げD区と馬蹄形の砂礫となり墳丘南断面の砂礫層に連なる。石室の位置判明す。
- 6月22日 A区北裾葺石らしき石列検出、D区頭骨付近より宋銭6枚検出。
- 6月23日 A区葺石B区に続く、石室南断面の残土排除、周堀Cトレンチを設定、作業開始。
- 6月24日 小雨のなか作業、Cトレンチ1、3mまで下げる。周堀外周に砂礫多し。
- 6月25日 作業員雨にて休み、Cトレンチ実測準備。
- 6月26日 C区セクションベルト実測開始、石室前残土排除、南北基準延長上Aトレンチ設定。
- 6月27日 Aトレンチ30～40cmにてローム、周堀無し、西へグリットA入れるが変化なし。C区、D区セクションベルト実測と撮影。
- 6月28日 周堀を追ってBトレンチ設定、C区、D区実測終了後セクションベルト切りくずす。

- 層位ごとに掘り下げんとするも不可能。埋葬人骨と盗掘溝の関係をみるためC、D区間の土手に小トレンチ設定、Bトレンチ北隅円形ピットより人骨検出、A区セクションベルト実測開始。
- 6月29日 石室南の残土排除終り石室東壁検出、Bトレンチ東へ拡張、Aトレンチ、Cトレンチ北へ延長、D区頭骨掘りあげ、更にC、D区間ベルト下より大腿骨検出、別個体と考えられる。Bトレンチ人骨掘りあげ、寛永通宝、カワラケ片出土。
- 6月30日 Bトレンチ拡張区掘り下げ、C・D区間ベルト取り外し終了。Dトレンチ作業開始
- 7月 2日 トレンチ作業昨日に続く。
- 7月 3日 昨夜の雷雨にてトレンチ泥に埋まる。Eトレンチ作業開始。
- 7月 4日 D、Eトレンチ掘り下げ、Fトレンチ設定、作業開始。C・D区北のセクションベルト実測終了、撮影後一部層位ごと切りくずしにかかる。東西基準線の3m南へ平行に石室を横断して幅1mのトレンチ設定、後込め礫層は幅3・5mある。
- 7月 5日 Bトレンチ拡張区更に南へ拡張、清掃。Fトレンチ作業開始、墳頂下4・4mで東壁検出。G・Hトレンチ作業開始、Fトレンチ完掘、石室横断トレンチ実測開始。
- 7月 6日 A、C、E、Fトレンチ清掃 G、Hトレンチ作業続行、石室内4・8mまで下げ床面まで40～50cmと迫る。
- 7月 7日 墳丘セクションベルト補足実測しながら時間をかけ取り外す。A、C、D、Eトレンチ実測、G、Hトレンチ完掘。
- 7月 8日 トレンチ実測、石室内の排土 長さ30～60cmの細長い石の混入多い。石と石の間に空隙があり土砂の流入がない。自然崩壊とも考えられる。実測、撮影と忙しい。
- 7月 9日 ブルドーザーにてB～Dトレンチ間掘り下げ。石室、奥壁、両側壁ほぼ検出。
- 7月10日 作業員休み、G、Hトレンチ撮影。
- 7月11日 ブルドーザーと、作業員の投入し周堀掘り下げ。石室内の細長い石、撮影と実測を行い取り除く。奥壁寄り耳環一対、小札、鉄鍬片出土、床面とは考えられない。
- 7月12日 周堀り下げ、石室内遺物出土レベルにて羨道方向へ精査、鉄鍬は散乱状態。
- 7月13日 遺物出土レベルを床面とみなすとの結論に達す。耳環周辺よりガラス小玉、東壁南端に大刀検出。大まかな清掃行方。周堀重機による掘り下げ完了、清掃、実測。
- 7月14日 担当者航空撮影に飛来、後E・F・G・Hトレンチ人力により、A・B・C・Dトレンチ重機により埋めもどしにかかる。周堀底礫層に達しているため標準土層模式図作成目的でグリットA～Bトレンチ間に無作意に小トレンチ入れる。
- 7月16日 各トレンチ埋め戻しに尽力、石室横断トレンチ墳頂下6m、旧表土(黒色土)に達する。石室へ斜めに立ちあがる。石室実測準備、割つけに1日かかる。細部打合せ。
- 7月17日 雨にて大半の作業員休み、石室実測に入る。
- 7月18日 石室壁、床面実測、墳丘東裾土層確認のため墳頂下8mまで掘り下げる。
- 7月19日 墳丘前方に標準土層観察用坑設定。墳丘西裾土層確認のため礫層まで下げる。西裾7・5m、東裾9mで礫層に達する。石室実測、石室横断トレンチ断面実測終了。

- 7月20日 石室平面図実測終了、細部を残すのみとなったので一応本日で打ち上げ。
- 7月21日 本日より数名の作業員で細部調査、石室内遺物の精査、床面排土に移る。全てフルイをかけ水洗する。耳環、鉄線、ガラス製小玉、丹、骨、歯等検出、床面の礫外し角閃石安山岩削り屑層まで下げる。
- 7月22日 床面礫取り除き作業、須恵器片、小札、耳環、弭金物、鉄線などこの段階でも出土相次ぐ。フルイより小玉類検出多し。
- 7月23日 角閃石安山岩削り屑層掘り下げ、まだ遺物出土。依頼により県文化財保護課本間岳史氏、石材調査に来る。出土遺物の整理、運搬、収納を行う。
- 7月24日 葺石らしき石列撮影、石室実測用基準杭2次調査に備え再測定と補強。
- 7月25日 東・西裾土層観察用坑埋め戻し、石列の下に明瞭な葺石検出、2次調査に備え埋め戻す。石室根石実測、石室封鎖用木材の伐採を大久保山にて行う。
- 7月26日 石室側壁補足実測、出土品整理、周辺整備、石室封鎖準備。
- 7月27日 石室内撮影、封鎖作業、バリケード作り、現場事務所整理、1次調査を終了する。
- 9月12日 2次調査開始、1次調査で埋め戻してあった葺石再検出、周辺古墳測量下準備。
- 9月13日 遣り方組、葺石実測準備として。
- 9月14日 遣り方組、平面図、側面図同時に作成しようと試み手問どる。
- 9月16日 遣り方組修正 実測開始。
- 9月17日 葺石実測。
- 9月18日 葺石実測。
- 9月20日 葺石実測。はかどらず。
- 9月21日 葺石実測。一部遣り方組み直す。
- 9月22日 葺石実測。
- 9月24日 葺石実測終了。周辺整備。
- 9月26日 石室封鎖補強。現場事務所整理。借物返却、2次調査終了。遺物整理等で終る。
- 11月10日 3次調査開始、東壁後込め外す。
- 11月11日 西壁後込め外す。石室主軸の基準線の西3・7mを平行に切断実測。墳丘下部は基準線より30cm西で切断。上部断面図より実質60cm西寄りとなる。
- 11月12日 墳丘下部北裾断面掘り下げ開始。
- 11月14日 石室主軸と平行に切断した断面更に東西に切断、実測、後込め礫層明瞭に検出。
- 11月15日 西壁後込め取り外し。
- 11月16日 前日に引き続き後込め取り外し墳丘下部断面検出に尽力。
- 11月18日 墳丘下部実測準備、西、東壁後込め排除。
- 11月19日 墳丘下部実測準備。
- 11月21日 墳丘下部、石室横断トレンチをそれぞれ実測。

- 11月22日 実測終了。
- 11月23日 撮影準備、正午撮影、西壁後込め排除。
- 11月24日 石室石組の補足実測。
- 11月25日 東壁後込め排除、奥壁後込めも排除に移る。
- 11月26日 東壁後込め排除、石室内へ版築確認のため四分法によるトレンチ入れる。
- 11月27日 撮影のため墳丘下部前の残土重機にて排除、正午撮影、東壁後込め排除。
- 11月28日 石室内のトレンチに合せ石室南にトレンチ2本入れる。
- 11月29日 トレンチ掘り下げ、奥壁後込め断面実測、撮影、層位毎に掘り下げる。砂礫層の先端に砂礫止めの握拳大礫を配置、それらを実測、撮影。
- 11月30日 石室内外のトレンチ実測、奥壁後込め層位ごとに排除、撮影のみにて作業進める。
- 12月 4日 奥壁後込め排除、掘り方検出、掘り方実測のため遣り方準備。
- 12月 5日 奥壁後込め排除終る。遣り方準備。
- 12月 6日 掘り方検出、遣り方準備。
- 12月 7日 掘り方は石室部分残して完掘、奥壁北は充分掘り下げられなかった。
- 12月 8日 下段葺石検出、石室外側写真実測用準備、遣り方を応用する。
- 12月 9日 石室外側写真実測の撮影、掘り方撮影。
- 12月10日 葺石検出、応用遣り方取り外し。
- 12月12日 葺石検出と実測用遣り方準備、担当者と今後の調査打合せ。
- 12月13日 石組外側版築断面実測。
- 12月14日 下段葺石実測開始。
- 12月15日 葺石実測。
- 12月16日 葺石実測、レベル記入。
- 12月17日 前日に引き続き同作業。
- 12月18日 石室断面図、外側補足し完成させる。石室の各石に番号付定。
- 12月19日 葺石側面図作成、石室各石に番号記入。
- 12月20日 葺石実測、石組に番号記入。
- 12月21日 前日に引き続き同作業。
- 12月22日 葺石実測、石組み取り外し開始。
- 12月23日 葺石実測、石組み取り外し。
- 12月24日 石組み取り外し。
- 12月25日 根石を残し取り外し終了。
- 12月27日 根石実測準備、午後実測。
- 12月28日 根石レベル記入と取り外した各石を市有地に運搬。
- 12月29日 根石取り外し、石室下の掘り方検出に入り完掘する。
- 12月30日 掘り方清掃、撮影、実測、遣り方取りこわし、整理、上段葺石の基盤である角閃石安山岩取り外し現場での調査を全て終了。

II 御手長山古墳の立地と環境

1 地理的環境

飯能—寄居—児玉—高崎を結ぶ八王子—高崎構造線を境として、西は山地で関東山地と呼ばれ、特に埼玉県の一部を秩父山地という。秩父山地は山梨、長野、埼玉の三県にまたがる甲武信岳（2465m）より始まり、東にむかって徐々に低くなり関東平野にのぞむ。秩父山地の東、および北は丘陵となっており、各丘陵の間には扇状地が発達し台地を形成している。（注1）

これら丘陵には狭山丘陵、高麗丘陵、比企丘陵、吉見丘陵、松久丘陵などがあり、その間には大小河川が秩父山地から東流、または北流し利根川、荒川に合流、太平洋、東京湾に流下する。この大小河川には扇状地が発達し台地を形成している。

児玉町の南東約2・5kmの位置を西北—南東に走る八王子—高崎構造線を境として北は第3紀層を基盤として成り立っており、南は先第3紀層と地形、地質とも全く異っている。構造線の南は急峻な山岳と片岩性の岩石（緑泥片岩・絹雲母片岩）が分布しているが、北側は第3紀層が神流川・荒川などの各河川の扇状地及び利根沖積層の基盤をなしている。この第3紀層や高位段丘堆積層からなる浅見山、生野山、山崎山、浅間山、観音山は扇状地の堆積被覆をまぬがれた残丘である。

この扇状地は群馬県鬼石町付近を扇頂部とし、扇端は烏川、利根川に至るが、この扇状地を「本庄段丘」と呼ぶ。身馴川による運搬堆積作用で形成された扇状地との境界は浅見山の山地より北東で不明瞭となる。神流川扇状地は東北から北方へ約10kmの半径で平均勾配1/200で発達し、この扇状地の扇端部以北は利根川の沖積低地となっており、現利根川にほぼ平行に1/800の勾配で利根川下流方向へ傾斜している。（注2）

神流川扇状地は上里町あたりは、なだらかな斜面で扇端部となるが本庄市域に入って比高7～8mの段丘崖の扇端となる。なだらかな斜面から段丘崖に移行する本庄市小島字清万寺から南わずか300mに御手長山古墳は位置する。この扇端部は神流川に水源をもつ御陣場川、旧女堀川（注3）や久城堀を始め幅のせまい小河川や堀（現在は埋没しているものが多い）が解析している。

この扇端部の段丘崖下には湧水が各所にみられ、段丘崖上にはそれらを中心とした集落が発達したもので上里町から本庄市、岡部町にかけてベルト状の分布をみている。

利根川の沖積低地は、利根川や碓氷川、神流川、鑷川を合流した烏川が落合い、かつてはこれらの河川の氾濫原でもあった。利根川の流路は天文8年（1539）又は12年（1543）以前は前橋市より現在の広瀬川流域を流下したもので、烏川が上野国、武蔵国の境界となっていた（注4）

深谷市横瀬、華藏寺の大日堂棟札（天正11年、1583）に「上野国新田庄勢多郡横瀬郷」と記録され（注5）、本庄市都島、正観寺収蔵文書に「慶長拾七年子ノ九月廿七日、上州国那波郡都島村御縄打水帳」と記され（注6）近世初頭以降の利根川や烏川の流路についての史料は少なくない（注7）がそれ以前の流路については史料を得ることができない。

本庄台地は先述したとおり第3紀層や扇状地の堆積層である洪積層が基盤となっているが、この礫

層の上層に1m前後の大里ローム層の堆積がみられ更に有機物を含んだ暗褐色の表土に覆われている。

神流川や身馴川、志戸川、利根川の流域にはロームの堆積はあまりみられず、礫混りの粘土層が堆積し表土を形成している。

注1 『埼玉郷土辞典、自然篇』埼玉新聞社出版部 昭44、427頁

注2 「神流川扇状地の地質と地下水」引田章臣『児玉の教育13号』 昭47、49頁

注3 昭和52年笠ヶ谷戸遺跡発掘調査により現女掘より東北方向へ幅15mほどの河川跡が検出された。旧本庄町、北泉村の境界であり下流では悪水堀となり利根川沖積低地へ流入す。

注4 「本庄市近傍に於ける利根川流路の変遷」栗田竹雄『埼玉研究6号』 昭37年 1頁

注5 『新編武蔵風土記稿』蘆田伊人 昭38 11巻 259頁

注6 『本庄市史 資料編』本庄市 昭51 文書222頁

注7 『同上』 文献9頁

2 歴史的環境

前述したような地理的環境のなかにあつて、関東ロームに被覆された台地上の遺構と神流川流域を始めとして大小河川の氾濫によって形成された微高地や沖積地の遺構には、さらに遺跡そのものと、それ以降の堆積とが微妙に交叉し立地環境を複雑化している。近年埼玉県北西部における発掘調査例が激増しているが周辺地域についての概略を述べたい。

先土器時代 埼玉県北西部におけるこの期の遺構の発見例はないが岡部町大字山河字塚ノ越に剥片1点が出土し(注1)、近年本庄市大字栗崎古川端遺跡の攪乱層より9点の細石刃、グレイパー、剥片の出土が報告された。(注2) 塚ノ越の石器は黄褐色ローム下層の暗褐色ローム層中より検出されたものであるが、周辺地域に暗褐色ローム層は認められず、また黄褐色ローム層からの遺物の発見例はないが今後の調査によっては遺構の検出される可能性を導くものとして重要であろう。

縄文時代にあつては地下2m前後から土器の出土も報告され(注3)地下深くに埋没し、発見例は少ないが遺跡が少ないことではないとする考えもあるが多くは神川村二ノ宮から児玉町南部、美里村猪俣から寄居町に至る児玉丘陵・松久丘陵や生野山・浅見山(大久保山)、山崎山、深谷市の浅間山などの丘陵や岡部町本郷地区(特に針ヶ谷郷、藤沼川沿い)の主として関東ローム(大里ローム)によって形成された台地上に分布する。この他本庄台地縁辺の土師遺跡や、大規模な発掘調査によって遺構、遺物の発見例も増え、研究意識をもった調査の必要性が叫ばれている(注4)

岡部町針ヶ谷を中心とした密度の高い遺跡群は古くより高橋一彦氏の注目するところであったが圃場整備により、山崎山の遺跡群もゴルフ場建設により破壊された。

西谷遺跡からは爪形文、椀状体圧痕文、有舌尖頭器を出土し(注5)、弘光寺北の沼端遺跡からは押形文、水久保遺跡からは主に椀状体圧痕文、有舌尖頭器を出土した。中原遺跡、北東原遺跡、東谷遺跡からは早~後期に及ぶ遺物の出土をみていた(注6)

第1図 御手長山古墳の位置と周辺古墳群分布図

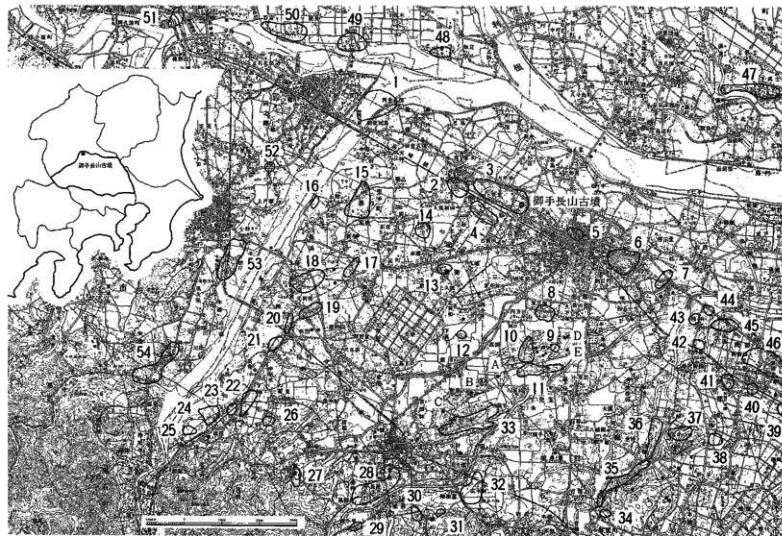


表1 御手長山古墳周辺古墳群と主要古墳一覧表

番号	名 称	備 考
1	毘沙土古墳群	東限西金久保、神流川敷に古墳址。
2	七本木古墳群	免塚古墳他。
3	旭・小島古墳群	浅間山古墳・八幡山古墳・御手長山古墳他 現在17基。
4	三田古墳群	前方後円墳(消滅)1基を含む6基。
5	北原古墳群	市街地にて大半が破壊される。6基。
6	塚合古墳群	昭和42年、4基調査。日の出2丁目に2 基現存。古墳址は市立東小学校3基の他3 基(内1基は前方後円墳)。
7	鶴森古墳群	3基現存
8	久下塚古墳群	4基現存、久野塚古墳は削平
9	大久保山古墳群	小規模古墳7基
10	浅見山古墳群	
11	塚本山古墳群	175基、内29基は昭和50年調査
12	七ツ塚古墳群	
13	本郷古墳群	4基
14	東堤古墳群	11基
15	帯刀古墳群	32基
16	長浜古墳群	6基
17	大師堂古墳群	12基、内一基昭和42年調査
18	四軒在家古墳群	12基
19	元阿保古墳群	20基
20	関口古墳群	9基
21	植竹古墳群	8基
22	南塚原古墳群	59基
23	二宮古墳群	27基
24	十二ヶ谷戸古墳群	53基
25	城戸野古墳群	25基
26	羽根倉古墳群	白岩鏡子塚(前方後円墳)含む25基
27	飯倉古墳群	13基
28	長沖古墳群	前方後円墳(十兵衛塚他)3基を含む1
29	(西小平)古墳群	25基。昭和50年から調査。
30	秋山古墳群	
31	塚間古墳群	
32	広木大町古墳群	両子塚(前方後円墳)を含む37基。
33	生野山古墳群	将軍塚、三角点古墳(共に前方後円墳)他
34	切通古墳群	
35	諏訪山古墳群	川輪聖天塚、長坂聖天塚を含む14基。
36	西山古墳群	前方後円墳(5号墳)を含む16基。
37	千光寺古墳群	ゴルフ場にて消滅、一部調査。
38	茶白山古墳群	上稲荷塚、下稲荷塚を含む5基の現在消滅 八木昇三郎氏調査。
39	六ツ塚古墳群	5~6基、消滅。
40		5~6基 消滅。
41	岡新田古墳群	平塚古墳他、宅地化にて消滅。
42		調査で古墳址確認、10基。
43		古墳址。
44	竜ヶ谷戸古墳群	3~4基、開発にて消滅。
45	四十坂古墳群	實稲荷塚(前方後円墳)現存。前方後円墳を 含めほとんど消滅。1930年85基。
46	白山古墳群	御手長山古墳(現存)、八幡塚(県史所収、 記念碑有、消滅)、白山遺跡より古墳址調査 さる。蒼済寺集落内にも痕跡多し。 5基
47		
48	川井古墳群	
49	角瀬古墳群	
50		約10基
51		8基
52		23基
53		85基
54		70基

A 鷺山古墳

B 金鑽神社古墳

C 鏡子塚古墳

D 前山1号墳、2号墳

E 東谷古墳

浅見山には爪形文や押形文をもつ有勝寺北裏遺跡、大久保山A遺跡の存在が知られている。(注7) 浅間山周辺の押切川流域にも押形文を出土する遺跡が2ヶ所認められていたが圃場整備で消滅した。弥生遺跡として重要な四十坂遺跡からは押形文や黒浜式の繊維土器、岡部町榛沢新田字落合からは石匙と共に関山式土器などが採集されている。美里村北貝戸遺跡から前期住居址(注8)、岡部町水窪遺跡から中期住居址(注9)が報告されているが密度の高いわりに調査例が少ない。

弥生時代の遺跡は非常に少なく本庄市域にあっても3ヶ所から遺物の出土をみるのみである。(注10) 有勝寺北裏遺跡からは中期前半の条痕文やへら描変形工字文、後期中葉の押し引きを加えた平行櫛目、波形櫛目を配した樽式類似土器を出土し、大久保山A遺跡からも縄文を主体とした中期土器が表面採集されている。身馴川対岸の四十坂遺跡(注11)、寄居町用土、平遺跡(注12)神川村大字新里の丘陵地域にへら描文を出土する遺跡(注13)などが報告され、美里村諏訪神社境内(注14) 生野山古墳群内(注15) 塚本山古墳群内(注16)などからの報告もある。

神川村に存在する式内社、金鎖神社を中心とした集落群を魏志倭人伝の女王国以北の服属21国のうち、華奴蘇奴国と比定する説もある(注17)

古墳時代 埼玉県北西部においては昭和30年、本庄市二本松遺跡の学術的調査以降、高度成長下の開発により相当数の調査が行なわれたが大半は古墳時代及び奈良時代の遺構が中心であった。

国営北部用水に関連して青柳古墳群(注18)、枇杷橋遺跡(注19)、中道・西北原遺跡(注20) 大御堂榎下・女堀遺跡(注21) 精神場遺跡(注22) 原・清水南遺跡(注23) 上越新幹線に伴い古川端・前山2号墳・東谷遺跡(注24) 下田遺跡(注25) 諏訪遺跡、関越高速道に伴い塚本山古墳群(注26) 雷電下遺跡(注27) 女堀桑里遺跡、後張遺跡(注28)、本郷東・愛宕遺跡(注29) 中堀・耕安地・久城前遺跡(注30)など、その他市町村の開発事業、民間の開発事業に伴う発掘調査が行なわれ、今後も多くの調査が予定されている。

集落遺跡は神流川流域、利根川沖積低地に沿った本庄台地、九郷用水(男堀川、女堀川)流域、身馴川流域、志戸川流域に沿って発達し、更に微低地で現在悪水堀となっている流域や、埋没しているが溝や河川の痕跡と考えられる流域にも分布している。

これらの遺跡を概観すると関東ロームによって被覆された比較的高燥な台地上と大小河川の氾濫を受けつつも粘土質や砂礫の堆積土上に営まれた遺跡とがあり、氾濫を受けた地域にロームに相当する層の存在する遺跡もあり氾濫による堆積、浸蝕、再堆積などの各時期と遺跡の営まれた時期とが微妙に交叉している。当地域の調査には地質、地層に比較検討を加えることが今後の重要な課題となるであろう。

古墳および古墳群については『埼玉県遺跡地図』(注31) 『群馬県遺跡地図』(注32) 『いぶき』(注33) 本庄市史編集室、高橋一彦氏、筆者の調査資料をもとに第1図および一覧表に示したとおりである。当地域では5世紀代に古墳が出現すると確認され、中葉に位置づけられる長坂聖天塚古墳(注34) 始め河輪聖天塚古墳、白石地内古墳、生野山の三角点古墳、將軍塚古墳、生野山9号墳、浅見鷲山古墳、入浅見金鎖神社古墳、前山2号墳、公卿塚古墳があげられ、山崎山丘陵、生野山丘陵、女堀川下流域、女堀川中流域の4つのグループになるとされている。6世紀代に入り古墳の分布は広がり群集墳の初源的兆候があらわれ7世紀後半まで古墳が築造されるのである。(注35)

古代・中世においては当地域の文献等の史料は皆無にひとしく、近年の発掘調査でこの期の遺構がようやく注目され始めた。条里遺構は比較的残存していたが圃場整備などによって姿を消しつつある。

現在知られている条里遺構は金鏡川、九郷用水流域と身馴川・志戸川流域の広い地域に広がるをみせている。特に本庄市今井字久城田の7坪は残存状態が良好で区画割りのみならず分水と給水の状況まで残存している。九郷流域と身馴・志戸川流域の条里が単一か複数かは明らかでない。(注36) 身馴川・志戸川流域の条里は美里村の平地部から本庄市栗崎、岡部町榛沢にかけて残存し、しかも那珂、兎玉、榛沢の旧三郡が隣接しているので郡境との関連も考慮せねばならない。

『和名類聚抄』によれば郡郷の所在について次のように記録している。(注37)

高山寺本				諸本			
榛沢郡	新居	榛沢	胆形 藤田	榛沢郡下	新居	榛沢	胆形 藤田 余戸
賀美郡	新居	小嶋	曾能 中村	賀美郡下	新田	小嶋	曾能 中村
兎玉郡	振太	岡太	草田 大井	兎玉郡下	振太	岡太	黄田 太井
那珂郡	那珂	中沢	水保 弘紀	那珂郡下	那珂	中沢	水保 弘紀

これらの所在については『埼玉県史』を始め、それぞれ比定され、更に天平勝宝5年、賀美郡に武川郷の存在したことは古くから注目されて(注38)いるが多少の問題もあるように考えられる。

条里、集落、郡衙、神社、寺院など遺構の考古学的、以前、以降の歴史の変遷、自然条件などを考慮すべきである。飛躍になるが武蔵七党のうち丹、兎玉、猪俣の三党の居住地域が当時の郡境の手がかりになると考えられる。御陣場川流域を中心とした地域に丹党、九郷用水流域を中心に兎玉党、志戸川流域を中心に猪俣党が分布している。これら三党の勢力範囲が旧兎玉三郡の境界であった可能性が充分ある。そこで問題となるのが御手長山古墳の所在する小島である。『和名類聚抄』によれば賀美郡小嶋郷(または小嶋郷)となっているが『新編武蔵風土記稿』では兎玉郡に編入されている。

小島は丹党、榛沢成房の弟重光が居住し小島四郎と称し(注39)現在も小島氏館が御手長山古墳東北約400mの本庄台地縁辺に存在し(注40)ている。兎玉郡への編入の時期は不明だが現小島地域の水田は御陣場川水系である。

旧本庄町と小島村の境界には微低地があり、高層気象台本庄出張所西にて利根川沖積低地へ解析し溝あるいは河川が存在をうかがうことができるのである。(注41) 本庄市西富田字二本松の北あたりでは上里町七本木と複雑な境界となっているが上里町久城(旧賀美郡)と本庄市今井(旧兎玉郡)の境界は東北方向へ直線的であり先述した微低地と一線を結ぶのである。この境界に沿って久城堀が流れ、本庄市街を度々悩ました「久城水」の源ともいえるのである(注42)

昭和50年、関越高速道、上越新幹線に伴う調査で7世紀代に比定される大溝が2本調査されたが郡境近くであり興味ある問題であろう。(注43)

降て文明18年6月初旬 関白房嗣三男 聖護院門跡道興准后は諸国歴訪の途「かみ長川などさまさまの名所を行々て。おしまの原といへる所にてやすみてよめる。けう爰におしま原をきてとへはわか松しまは程そ遠けき」と『廻国雜記』(注44)に書き残している。なお小島村は若泉庄、後に本庄領となった。

近世以降 江戸時代に入ると小島村は元和3年 旗本酒井下総守の知行となり田方200石3升、

畑方473石6斗4升 合せて673石6斗7升（武蔵田園簿）の中山道に沿った120戸（新編武蔵風土記稿）の村落となった。近世文書の調査はなされてないので詳細は不明であるが、五料、前橋、越後、佐渡方面への脇道も村内で分岐し（注45）佐渡奉行の往路は専らこの脇道を利用した。中山道一本の本庄宿を控え諸大名、諸家中、一般通行者でたいへんなにぎわいであった。（本庄宿田村本陣文書）幕末に至るまで酒井氏の知行で明治元年岩鼻殿、同4年群馬県、入間県、同6年埼玉県と近隣町村と同じように、めまぐるしく管轄替をうけ同22年山王堂、沼和田、都島、三友、新井、下野堂の6ヶ村と合併旭村となり、更に昭和29年本庄町と合併し本庄市となった。

- 注1 「岡部町のローム層中より出土せる剥片石器について」高橋一彦 『始終 創刊号』
- 注2 『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 東谷・前山2号墳・古川端』 昭53 埼玉県教育委員会
- 注3 『埼玉県遺跡調査会報告第28集 大御堂壇下・女堀遺跡発掘調査報告書』菅谷浩之他 昭51 埼玉県遺跡調査会
- 注4 注2と同じ
- 注5 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」栗原文蔵、小林達雄 『考古学雑誌47巻2号』 昭36 日本考古学会
- 注6 高橋一彦氏の調査による
- 注7 『本庄市史 資料編』 市史編集室 昭51 本庄市
- 注8 『北戸遺跡、県営美里は場整備事業地内遺跡』菅谷浩之、坂本和俊 昭52 美里村教育委員会
- 注9 『水窪・新井遺跡の調査』栗原文蔵、佐藤忠雄 昭51 岡部町教育委員会
- 注10 注7と同じ
- 注11 「四十坂遺跡の初期弥生式土器」栗原文蔵 『上代文化 第30輯』国学院大学考古学会
- 注12 「有角石斧を出した埼玉の弥生式遺跡」曾野寿彦 吉田章一郎 『東京大学教養学部人文科学科紀要第11』 昭32 共立出版株式会社
- 注13 注3と同じ
- 注14 「諏訪山神社境内遺跡」高橋一夫、鈴木敏昭 『埼玉県土器集成4』 埼玉考古学会
- 注15 注2と同じ
- 注16 「関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ 塚本山古墳群」昭52 埼玉県教育委員会
- 注17 「魏志倭人伝の諸国名の解説」青木慶一 『考古学ジャーナル8号』昭42 ニューサイエンス社
- 『魏志倭人伝、後漢書倭伝、宋書倭国伝、隋書倭国伝』和田清他 昭33 岩波書店
- 注18 『埼玉県遺跡調査会報告第19集 青柳古墳群発掘調査報告書』菅谷浩之他、昭48 埼玉県遺跡調査会
- 注19 『埼玉県遺跡調査会報告第20集 根柢橋遺跡発掘調査報告書』菅谷浩之他 昭48 埼玉

玉県遺跡調査会

- 注20 『埼玉県遺跡調査会報告第13集 中道・西北原遺跡発掘調査報告書』菅谷浩之他 昭49 埼玉県遺跡調査会
- 注21 注3に同じ
- 注22 『精神場遺跡』梅沢太久夫他 昭53 神川村教育委員会
- 注23 『原・清水南』梅沢太久夫他 昭53 上里町教育委員会
- 注24 注2に同じ
- 注25 『本庄市下田遺跡』小川良祐他 『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』昭50 埼玉考古学会他
- 注26 注16に同じ
- 注27 『児玉町雷電下遺跡』駒宮史朗他 『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』昭50 埼玉考古学会他
- 注28 『児玉町後張遺跡の調査』増田逸朗他 『第10回遺跡発掘調査報告会発表要旨』昭52 埼玉考古学会他
- 注29 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告V 本郷東・愛宕』昭51 埼玉県教育委員会
- 注30 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ 中郷・耕安地・久城前』昭53 埼玉県教育委員会
- 注31 『埼玉県遺跡地図』昭50 埼玉県教育委員会
- 注32 『群馬県遺跡地図』昭49 群馬県文化財保護協会
- 注33 『いぶき 8・9合併号』昭50 県立本庄高校考古学部
- 注34 『美里村長坂聖天塚古墳の調査』菅谷浩之他 『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』昭50 埼玉考古学会他
- 注35 注18に同じ
- 注36 注7に同じ
- 注37 『天理図書館 善本叢書 和書之部第2巻』昭46 八木書店
- 注38 『賀美郡武川郷に就きて』金鎖武城『埼玉史談第5巻第4号』昭9 埼玉郷土会
- 注39 『武蔵武士』渡辺世祐、八代国治 昭46 有峰書店
- 注40 『埼玉の館城跡』昭43 埼玉県教育委員会
- 注41 昭和53年7月11日未明の4時から10時まで180mm(本庄消防署観測)の降雨量にこの微低地を横断する市道23号線は約100mにわたって冠水した。
- 注42 現在の久城郷は本庄高校北から市街地を東北方向へ縦断しているが、大雨の際は、この郷筋周辺からあふれた野水を「久城水」と呼ぶ
- 注43 注30に同じ
- 注44 『群書類従 第18輯』昭47 続群書類従完成会
- 注45 『中山道宿村大概帳』児玉幸多 昭46 吉川弘文館

Ⅲ 御手長山古墳

1 御手長山古墳と周辺

御手長山古墳は本庄台地と利根川沖積低地との境界とも言うべき段丘上に位置し、旭・小島古墳群に含まれている。この古墳群は上里町神保原、本庄市下野堂、同小島にまたがる大群集墳で、この南部上里町七本木字三田に4基、本庄市小島字二子塚（小島の飛地、前方後円墳、昭和40年頃削平）に1基、下野堂字間拓に1基の計6基の三田古墳群があるが、一体をなす群集墳の可能性もある。

旭・小島古墳群は現在、上里町字神保原に5基、本庄市下野堂に1基、小島に10基の計16基が認められる。原形を保つものは少なく痕跡の残るもの、墳丘を切断されているものが多く昭和30年の調査（注1）では痕跡を含め37基、昭和34年2月の調査（注2）では小島地区だけで痕跡を含め44基が存在していた。第2図は前記2回の調査と昭和49年調査（注3）の結果を図示したものである。この他下野堂から神保原にかけて10数基の古墳が認められていた。

東限は前章で述べた旧賀美、児玉両郡境付近にあり、西限は浅間山古墳あたりで標高57～61mの北北斜面に分布する。小字名にも三壺山、蛭子塚、二子塚など古墳にちなんだものが多い。

昭和49年7月より翌年3月にかけ発掘調査の行なわれた下野堂遺跡では多くの古墳址や周溝墓が調査され（注4）たが、当初は集落跡と考えられ、全く削平され墳丘の痕跡さえなかった。

この旭・小島古墳群一帯は中山道に沿っているため開発も古く比較的大きな古墳のみ残ったと考えられ、調査を行えば膨大な数の古墳址が確認されるであろうと考えられる。

下野堂遺跡の東、畑一枚を隔てた本庄市小島字林95番地に、この古墳群中最も古いと考えられる八幡山古墳（本庄市指定文化財）が存在している。片岩を利用した箱式石棺をもち現在径約3.4m、高さ3mを測る。上里町の浅間山古墳（上里町指定文化財）は墳丘3/4ほど削平されて奥壁寄り西壁から開口しているが、石室南半が崩壊し、天井石に緑泥片岩、側壁、奥壁に角閃石安山岩を互目積にしている。奥壁近くの平面は、なだらかなカーブを示している。小島の三壺山（通称しんまち山）は墳丘径約60m、高さ3mという大円墳である。

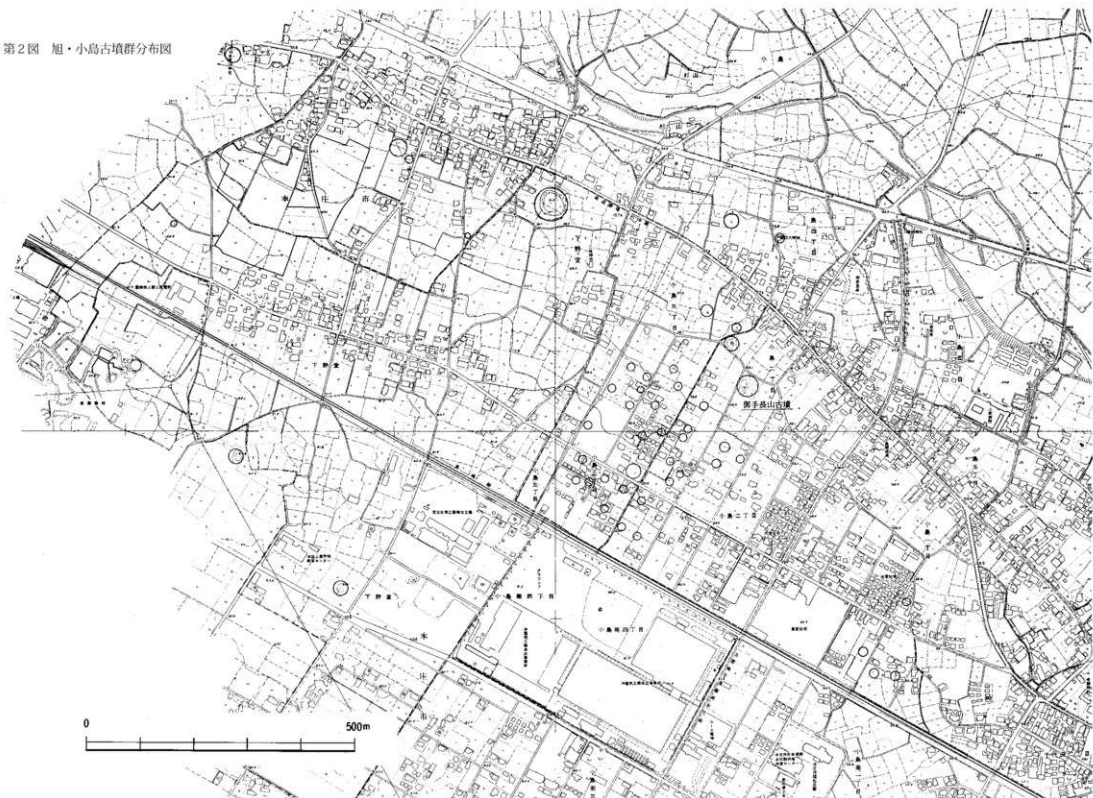
この古墳群は石室に角閃石安山岩を利用しているものが多く古墳址や周辺各所に転石が多い。

現存している古墳は諏訪神社、蛭影神社、山ノ神、御手長様が祀られ、あるいは墓地となったもののみ削平からまぬがれてきたが、それらも明治期「藤岡の人が来て掘った」との言い伝えが残り、加えて近年の宅地化の波により中山道沿から、南部から市街化して痕跡さえもわからなくなりつつある。「埼玉県史」（注5）に「旭村小島の円墳中から男子埴輪頭部、埴輪軀を2個出土して居り、現に金鑽神社に蔵せられている」と記録され、この当時に破損、破壊行為が行なわれていたようである。

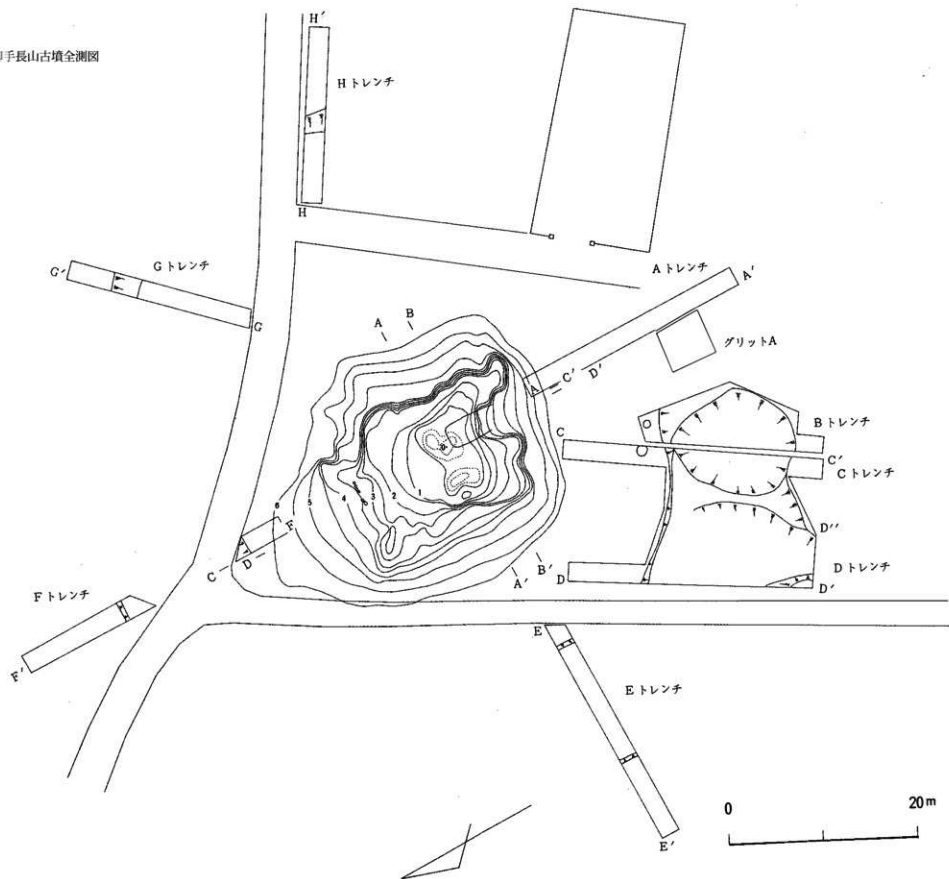
周囲の古墳については第3図に示したが、御手長山古墳は昭和50年の測量で、135～137号遺跡は昭和53年6月の測量で、等高線は合わないが、位置関係を示すため本庄市役所農政課の地籍図を基に修正して一枚にしたものである。

135号遺跡はすでに東・北裾を削平され主体部に迫るほどであるが、現状東西13m、南北17

第2図 旭・小島古墳群分布図



第4図 御手長山古墳全測図



m（推定径2.3m余）高さ3・5m、墳頂標高61・54mの円墳である。西裾に墓石を露出している部分がある。136号遺跡は近年北裾を除き裾を削平されたもので現状東西17m、南北15m、（推定径2.0m余）高さ3・5m 墳頂標高61・01mの円墳で釜影山の石祠と石段が構築されている。137号遺跡は三方を道路にかこまれ裾の一部が破損しているが、ほぼ原形を保っている。現状東西30m、南北31m（推定径3.5m）高さ5m、墳頂標高62・815mの円墳で墳頂部に山ノ神の石祠がある。この三基の古墳は墓石、埴輪ともっており偶然残存したとはいえ群集墳の一端でも知ることができる。

図版2は昭和14年栗田剛氏の撮影にかかると多く古墳が残存していたことを示し、中央右寄、杉木立の古墳が御手長山古墳である。

昭和51年 御手長山古墳を含む旭・小島古墳群は「群として価値の高い遺跡」「地域的に特色ある遺跡」として埼玉県選定重要遺跡として保護策が講ぜられ、昭和52年3月 135号、136号137号遺跡の古墳は八幡山古墳（131号遺跡）とともに市指定文化財に指定され、固定資産税免除、保存委託料交付などの保護策が講ぜられた。

注1 『本庄市及び児玉郡古墳調査』 昭31 埼玉県教育委員会

注2 筆者の調査による。

注3 『埼玉県遺跡地図』 昭50 埼玉県教育委員会

注4 『本庄市史 資料編』 昭51 本庄市

注5 『埼玉県史 第一巻』 昭26 埼玉県 402頁

2 御手長山古墳の概要

前項で述べたような環境のなかにあつて御手長山古墳は東西4.2m、南北4.2m、高さ6・5mの大型円墳で、昭和51年6月までは墳頂下2～3mまで雑木林となり、以下は桑園となっていた。西裾のみ削りとられ断面に墓石が認められていた。この西裾より昭和40年人物埴輪が出土し市指定文化財として市教委で保管している。（第27図） 墳頂部に御手長椀を祀り、南寄りに窪んだ部分があり、既に盗掘を受けたと考えられ、周堀は表面観察によって周囲の低地から外周径8.0m余と推定され周辺古墳群の主墳とみられていた。昭和50年1月の測量図（第3図）では、ほぼ原形を保っていたが今回の調査直前の墳丘は東裾、西裾はなく南裾も石室に達するほどであり、北裾のみ比較的良好に残存していた。高さはなお6mを測る（標高63・84m）が完全な把握はできなかった。

石室は奥壁をほぼ墳丘中央部におき（昭和50年測量図、53年測量図による）南へ開口した横穴式石室で、羨道部、石室の一部はすでになく、角閃石安山岩の互目積、一部切組積の弱い胴張りをもっている。掘り方、版築、石組構造と墳丘の関連など一連の作業過程を調査することができた。

墳丘は東西2.6m、南北3.2mほど残存していたが、断面観察によって石室構築と墳丘、墳丘と墓石との関連について多くの資料を提供した。墓石は北裾の一部に二段にわたり周囲をハチマキ状にめ

ぐることが判明、周堀は昭和50年測量図による6・75m等高線に南側周堀が、東北側では7・25m等高線に沿っている。外周径77m、周堀幅14m、平面は南に間隙のある狭状となり、その先端はローム下層の礫層に及ぶ皿状となる。

また墳丘より人骨2体分(内1体は六文銭を伴う)、周堀トレンチ内より2体の埋葬人骨が検出され、中、近世において墓地に利用されたと思われる。

3 内部主体

羨道や石室の一部は既掘によって失っていたが、掘り方、版築、石室などの形状は概要を知り得ることができた。

掘り方

掘り方は墳丘断面調査の段階で認められていたが、石室の主軸を中心として東側6m、西側5m、奥壁より北へ2m、現存根石最南端までの、東西11m、南北8mの88㎡の範囲を調査した。掘り方の幅や長さ、羨道部との関連などの全容は調査できなかった。5cm等高線で第5図-1の状況となる。平面プランは馬蹄形で石室の床となる部分は舌状に、断面は台形に掘り残している。墳丘断面(第10図)によって幅は石室主軸中心基準より東6・2m、西4・38mの10・6m、奥壁より北へ2・6m延びている。最深部は奥壁背後にあつて標高57・84m、根石の下は急斜面となり、東西へなだらかにたちあがる。南もなだらかにたちあがり、西隅の標高58・27m等高線にかかる角閃石安山岩は50cm×29cm×20cmで黒色土上に置かれた状態で、黒色土に接していない下側にはロームが入り込んでいた。

版築

掘り方が終ると東側は55cm、西側は50cmにわたって版築が行なわれている。黒褐色土、褐色土に砂礫をまぜ、つき固めながら、時には砂礫のみで6~7回繰り返えし凸レンズ状となる。その後砂礫を敷き込み根石を設置する。

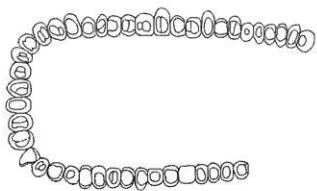
根石

残存根石は総数43個で、NO39を除いて(第7図参照)上面は2段目の石材に合わせて一面または二面削りとなる。両側面も、それぞれ隣り合せの石材に合わせて密着するように削られているが側壁より奥壁に移行するカーブ付近は密着部分が少なく、更に石室南半でもなだらかにカーブし密着部分が少ない箇所もある。玄門に近いと考えられる。下側は削り加工が一切施されず石室の内側も大半が削られてない。東壁でNO12、NO13の2個、西壁でNO37の1個、計3個に内側削りがあり、レベルは多少ずれるがこの位置に両壁とも各1個の間仕切石に相当する角閃石安山岩が配置されていた。

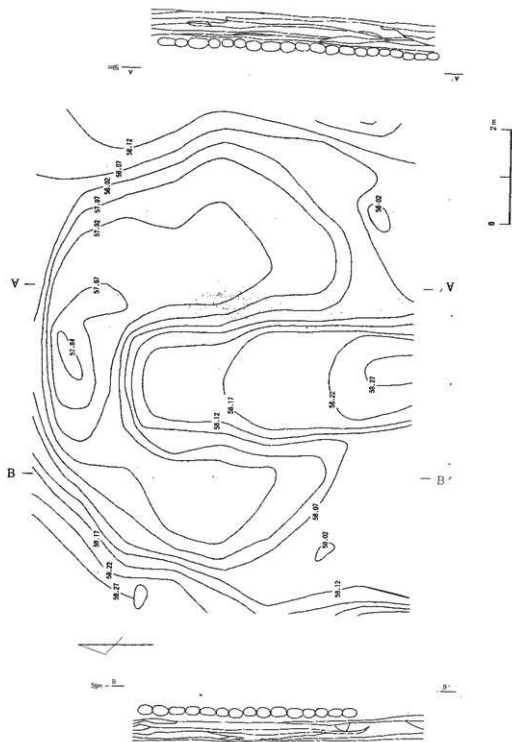
床面

握拳大以下の河原石を敷きつめているが、散見する遺物の出土面を床としておさえる以外明確に床面としての検出は不可能であった。奥壁や側壁寄りには台状となるが全て攪乱状態であった。

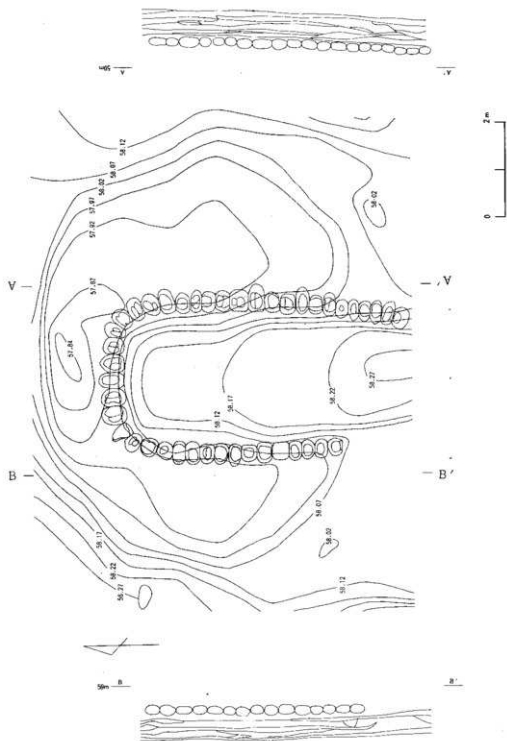
版築後石室内を平定し、ロームブロックを多量に含む黄褐色土を台状に積み、更に砂礫(青灰色、



第5図-1 御手長山古墳掘り方実測図、版築断面実測図



第5図-1 御手長山古墳掘り方実測図、版築断面実測図



河原砂利縁)、そして角閃石安山岩削り屑を敷きつめ、河原石をもって床面としたもので、角閃石安山岩の削り屑は石組みのものを利用し、その限りでは、石組みと填丘の盛り土に併行して床面の築成も行なわれたと考えられる。周辺古墳も層序は異っても大略は同じ状態の床面となっている。

石室

N-1・2°-E、根石内側で現存長6m、最大幅は2・85mで間仕切石の位置である。羨道寄り2・25m(推定)現存高は奥壁で根石下端から1・65m、床面より1・25m、最高部は西壁の奥壁寄りにあり1・92m、床面より1・65mを測る。奥壁はゆるいカーブでコーナーに移行し、両壁は弱い緊張りで羨道部方向へ長い。残存した石組みは大まかな分類では角閃石安山岩で根石を含め262個、東壁の奥壁寄りは根石を含め4段以上が、西壁は奥壁より羨道にむかって斜めに破損している。

奥壁は比較的大形の石材を使用しNO215は幅50cm、高さ40cm、奥行39cm、NO216は幅54cm、高さ36cmという大きなもので、NO179のように幅、高さとも12cmという細長い石材を使用したものもある。奥壁に利用された石材のうちNO216とNO188、NO244やNO215とNO234、NO147とNO106のように切組積がなされた部分もあるが側壁は主として互目積であり、一石あたり周囲5〜7個に接している。元来上下左右と内面を削り取ることから「5面取り」の語が使用されているが、厳密には「5面取り、6面削り」「5面取り、7面削り」が妥当と考える。第6図の壁石の細線は削られた部分を示すが、NO260は全く削らず、自然面を利用し、NO107は細線のなかが自然面となっている。

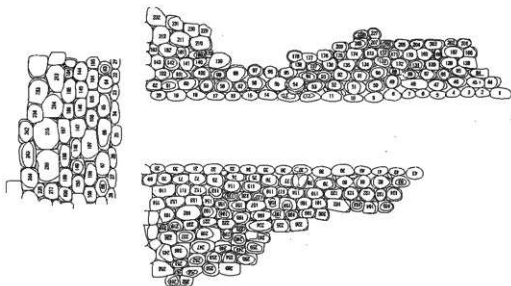
石室断面は奥壁、側壁とともに根石を含め3〜5段の間に持ち送りのカーブの微妙な変化があり、上部はより強いカーブの持ち送りとなる。特に西壁の奥壁寄りのNO261、NO262の持ち送りのカーブは強い。

石室内部の調査中標高61mから標高59mの床面直上にまで、径10〜20cm、長さ30〜60cmの細長い河原石の混入が多くみられ、東壁破損部分より石室内に半分程のめり出しているものもあった。これらの岩石を石室上部の強いもち送り部分に使用した可能性がある。石組みの間隙には片岩質の長さ10〜15cmほどの岩石を充填し、石組の各一石一石が接する4面の小空隙には角閃石安山岩の砂状削り屑が薄く認められ、意識的に充填したものか、石室構築の際流入したものかは不明である。全石組取り外し作業によってこれらの砂状角閃石安山岩削り屑を採集した結果100ℓほどであった。石室や、盛り土の重みによるものか、石室内観察で約1割、更に石組取り外しの折には約3割の石材に縦の割れが生じていた。

天井石の存在は認められず、当地域でよく利用される緑泥片岩の小片(長さ10〜20cm前後)が10数片みられたのみである。

次に石室の構築であるが、版築後根石の据え付けが終ると、石の背後へ上面と同レベルまで砂礫を積みあげ、次にまた一段積みあげ、背後へ砂礫を積む。前段組石終了=砂礫の盛りあげ=石材加工=組石=砂礫の盛りあげ、の順で次々と組まれてゆく。砂礫の上には角閃石安山岩の削り屑層が認められ必ず石と石の間から砂礫層をぬって填丘へ延びる。填丘下部北断面図(第10図)の根石より7、9、10の各段は赤褐色の角閃石安山岩を利用しているが、その下部の削り屑層は、赤褐色であり前

第7図 御手長山古墳石室石組み番号付定図



記した段どりによって構築されたものであろう。

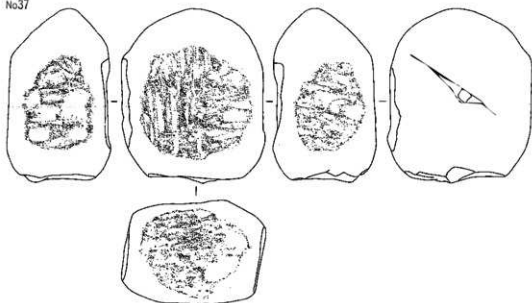
この段どりの作業が2～3回繰り返えされると墳丘の盛り土がなされ、更にその工程を根石据え付け後東壁で11回程、西壁で8回程、奥壁側では6回程くりかえし、墳丘が、石室が形成される。

墳丘の盛り土の際には必ず砂礫の墳丘寄りに握拳大の礫を配し砂礫止めとしている。角閃石安山岩の削り屑層は、根石下部より2・05m（標高60・64m）まで認められ、少なくとも11段の角閃石安山岩の石組みがなされた。断面的には以上のような状況であるが平面的な状況は石組の構築順序によって変化する。NO257～260、NO251～253、NO245～247のそれぞれ下部に羨道方向へ傾斜した角閃石安山岩削り屑がみられた。後込めの礫を排除する際、調査意識を持たなかったが、石組に付着した状態を排除後に確認したのである。尚これらの層は石組みの順序とも密接につながっていると考える。（層位的、平面的に調査を行うことができれば、あるいは一石一石の組み順まで調査できたかも知れない。第7図に付定した番号は、ある程度これらの順序を石室内部より観察して付したものである。）

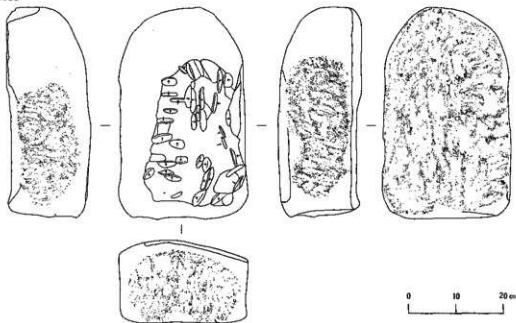
また後込め砂礫層の中に角閃石安山岩がいくつか含まれていたが、これらは組石として利用のため加工中誤って破損した石材を放置したもので、数m離れて検出された割れ石が復元できたものも多かった。これら石材は軟質なものが多く加工も余り進まず、初期の段階で破損したものであろう。

第8図 御手長山古墳石室使用石材実測図

No37



No88



石室利用の石材の削り方については第8図に示した。無作意に根石NO37、東側壁よりNO88の2個を抽出したが必ずしも明瞭な削り痕跡がみられるというものではないが大要は知れよう。

NO37は内面、上面、両側面の一部に削り加工したもので、内面は横方向、両側面は縦方向、上面は縦方向と横方向の両者の鑿痕が残る。4面取り4面削りである。

NO88は5面取り6面削りで、内面、両側面は縦方向の、上面と下面は縦横に残る。特に上面は

縦方向の鑿痕群と、横あるいは斜方向の鑿痕群の間に稜が生じ2面削りとなる。また上面の矢印は、鑿の打ち込まれた方向を示しているが、抽出した石材以外をも併せて観察すると、少なくとも2種以上の鑿を使用して加工したものである。

4 外部施設

墳丘の周囲や墳頂部はすでに失われていたが掘り方から墳丘築造、葺石構築の一連の作業の概要はつかむことができた。

墳丘

墳丘は高さ6mあり作業上の危険性を考慮して上部3m、下部3mに分けて調査し、また日程などの関係から基盤から墳頂部までの一貫した図面を作成し得なかった。

石室の構築と墳丘の盛り上げ作業が終了すると径17m（推定）高さ4・4mほどの小円墳ができあがる。この小円墳の北裾より墳丘中心部へ6mの位置に奥壁が存在する。羨道や前庭部の調査はできなかつたが小円墳のできあがりの時点で既に羨道部や天井石の内部主体は全て完成していたと考えられる。この小円墳のできあがるまでの盛土は層が薄く、丁寧なつきかためが行なわれ細心の注意をはらっていることがうかがえる。粘土そのものの使用は少ないが幾重にも粘質の強い土を用いて、特に東側に顕著であるのは、円堀D、E、Fの各トレンチがロームの基盤や上層の褐色土が高燥なものに対し、G、Hトレンチではローム、上層の褐色土また周堀内に流入した堆積土が非常な粘質を、おびていることと関連することであろう。

小円墳の築成後も東側においては同じようなつきかためが行なわれているが、西側においては厚く盛り土した後、水平の盛り土がみられ標高6.1mあたりからは逆に主体部へむかって斜面となるほどの盛り土がなされる。これは北側断面についても同じことがいえる。墳丘完成直前の墳頂部は、すり鉢状となり最終的段階で墳頂部を整形したものである。

小円墳を第1段階の墳丘、その後の築成を第2段階の墳丘とするならば、北裾に検出された上段の葺石は第2段階の途中から基礎づくりが始められ第2段階の盛り土に併行して築造されたものであり下段の葺石は第2段階の作業の後、細部の整備の段階で築造されたものである。但し第2段階の作業が全て完了してから細部の整備が行なわれたのか、第2段階に併行して行なわれたのかの点については判明しない。

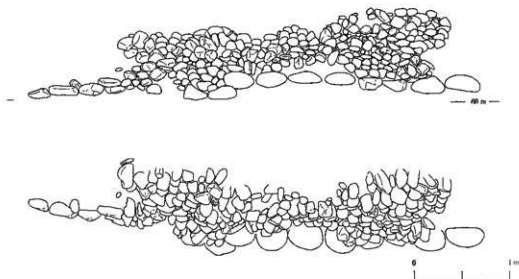
墳丘はなだらかなスロープで周堀の内周に移行しテラス状の構造はないようである。

前庭部と墳丘築造の関連については調査ができなかつたが今後の該種古墳の調査に期待したい。

葺石

葺石は上下2段に認められたが破損が著しく残存部は非常に少なかった。上段の葺石はむしろ石垣というべきもので、当初の上上に石列が認められ、これを葺石と考えていたが石列を取り除いて検出された。標高6.0～6.1mにわたり幅は4・8mに及び、斜角4.2°である。葺石下部は2.0～4.0cmほどの大きな石を基盤として配置し、そのうちの割合大きな6個は加工の施されていない角閃石安山岩を利用している。その他はほとんど河原石で若干の片岩礫を混積している。

第11図 御手長山古墳葬石実測図



下段の葬石は底部を標高58・3～58・4mにおき、上部は標高59m、幅は約2・2mほどあった。葬石の斜面下には上部からの転石が広がり、その間に火山灰の堆積（天明3年浅間山噴火の際の火山灰に似ている）がみられ、小さな埴輪片も検出された。下段の葬石は上段のものに比べて割合小さなものを利用している。

これらの葬石はもっと高く、そして周囲を一周していたようで調査前、河原石の散乱が目立った。

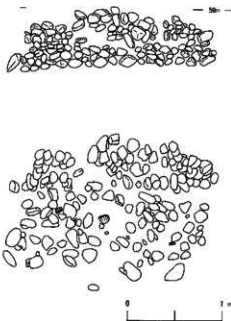
周堀

周堀は墳丘に続く南の同一地主による1697番-3を完掘したのみで、他に範囲確認のため、4本トレンチを設定した。（E～Hトレンチ）

作物の関係で直径を計測できる位置に設定できなかったが概略をつかむことができた。

周堀プランは塊状で周堀の切れている部分は石室主軸の南方にあり主軸延長線より8・5m離れて周堀となる。東側も同じプランと考えられるが、住宅が建ち調査できなかった。周堀の塊状先端は皿状に深くなり現地表より1・5m（標高56・49m）掘り下げられている。更に西側も同じような状況が認められるが（最深度標高56・68m）これは周堀の切り合いの可能性もある。ただしこの南に墳丘の痕跡はなく拡張もできなかった。

周堀先端の底は礫層に深く達しており（標高57・58mで礫層となる）西側の低部は達していな



い。墳丘東裾では標高56・06m、西裾で56・89mと、狭い範囲の4ヶ所での礎層上端のレベルは全く不順であり、当古墳基礎地層の堆積は複雑である。これらの礎は当然石室構築の際、後込めとして利用されたと考える。

Eトレンチでは幅14・8m 標高57・48mまで掘り下げられ、浅い、Fトレンチでは中心部分を道路が通り完掘はできなかったが幅14・6m、標高56・42mまで掘り下げられている。

Gトレンチでは南を道路にとられ周堀幅は計測できなかったが標高56・54mまで下げ、Hトレンチでも西側道路にて計測できないが標高56・42mまで掘り下げている。

各周堀底はEトレンチを除き標高56・42～56・54mとほぼ水平であり、周堀のたちあがりもトレンチによってまちまちであるが、周堀幅は平均14・6mと一定しているようである。

周堀内周径4.8m（推定）外周径7.7m（推定）であることがわかる。周堀外周や内周のローム層上に黒色土の堆積は認められず、墳丘下のみ旧表土たる黒色土の堆積がみられる。但し周堀に流入した黒色土や黒褐色土は認められている。調査の結果、昭和50年の測量図で南側は6・75m等高線に、東北側では7・25m等高線に周堀が、ほぼ一致していた。

5 出土遺物

石室出土遺物

遺物の出土状況については第13図に示したが、石室内部は擾乱が著しく東壁南端の大刀、奥壁寄りの耳環、小札、玉類、丹、骨片のまとまりをみせる付近のほか原位置を保っていると考えられるものは非常に少なかった。出土状況も床面の礎の間に落ち込んでいたり、しかも床面礎と、下層の砂礫層排除の折り出土したのも少なくない。弔金物は石室の間隙に入っていたもので、須臾器も奥壁に接していたものである。

▲装身具

○耳環 (第14図)

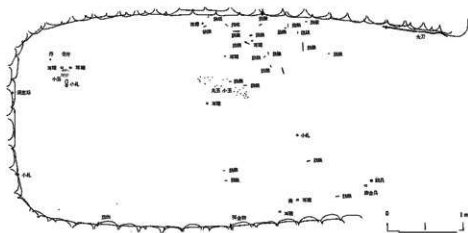
耳環は8個で、いずれも銅芯金張り、緑青に覆われていた。形態、断面ともわずかに楕円となり、両末端でわずかな間隙をなし玦状となる。また玦状の間隙部近くはカーブがきつくなる。

表2 耳環計測表

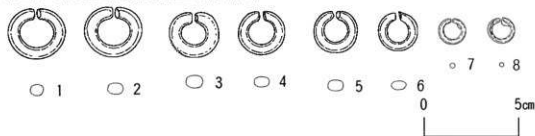
(単位 長さmm 重さg)

番号	長 径	短 径	袈部間隔	断面長径	断面短径	重 量
1	29・7	26・4	1・3	8・1	6・3	20・9
2	29・8	26・3	1・2	8・0	6・2	19・3
3	26・8	23・8	1・4	9・0	7・0	17・3
4	24・5	22・6	2・0	7・9	6・5	14・7
5	22・9	22・0	2・0	7・5	5・5	10・8
6	20・7	20・8	2・5	7・8	4・8	9・6
7	14・2	13・4	0・4	2・3	2・2	1・0
8	14・2	14・0	0・2	2・3	2・2	1・1

第13図 御手長山古墳石室内遺物出土状況実測図



第14図 御手長山古墳石室出土耳環実測図



計測値は以上のとおりであるが、1と2、3と4、5と6、7と8の4対になると考えられる。

総じて断面の楕円形の長い部分の縁に金張りの接合部があるのか、錆化が著しく、金張りの残存も少ない。珠部の間隙は1～6ともに斜に切られている。7と8の一对は耳環としては小型であるが、保存状態は非常に良好である。

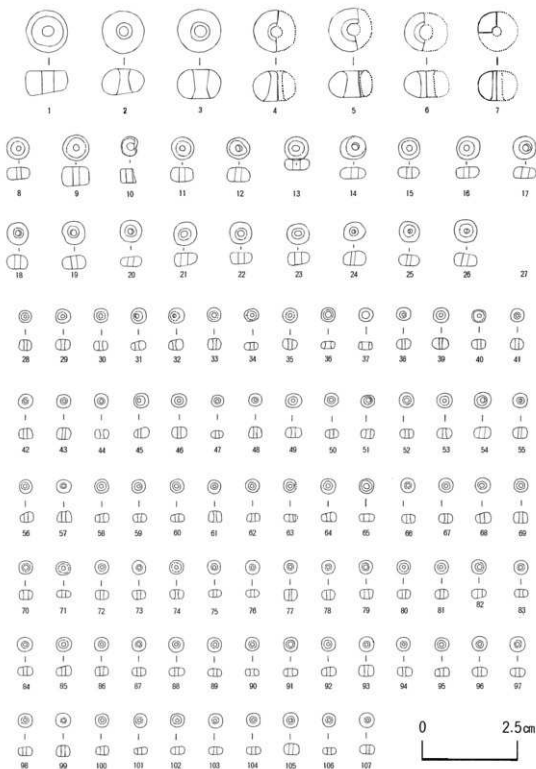
○丸玉 (第15図)

27個のうち1個が石質不明(1)で他は全てガラス製である。2～6はガラス製としては比較的大型で気泡が多く表面は銀化している。破損断面は淡緑色のきれいな色彩を示す6がある。完存なもの2個で、他は破損しその他に実測不可能な破片が5点ある。大半が石室南部の礎層(床面の下層)の中より、フルイにより検出したものである。8～26は平均最大径 6.23mm 、最小径 5.79mm 、最大長 3.34mm 、孔径 1.36mm 、重さ 191.74mg のガラス製で小さな気泡が入るが、全体に縦方向の細い筋状の気泡も見ることができる。半透明で保存状態も良好で、藍系統の色彩を示す。

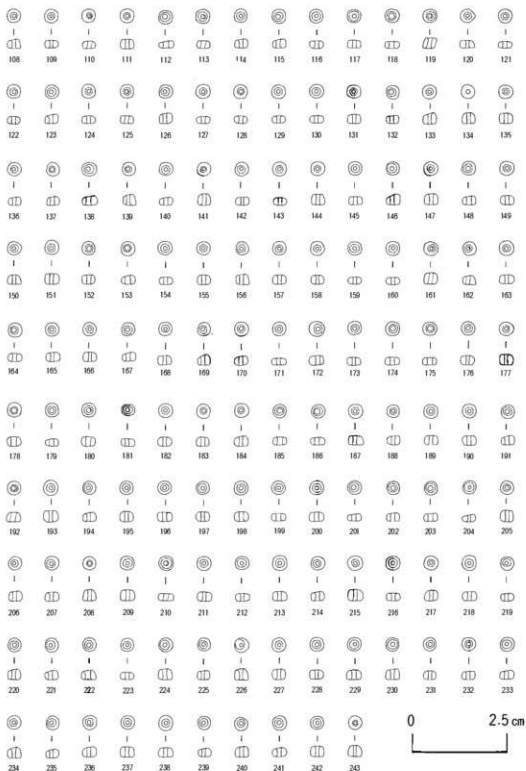
○小玉 (第15図・第16図・第17図)

総計243個で、他に調査中および整理中崩壊したり、破片で検出されたものが若干ある。平均最大径 3.81mm 、最小径 3.6mm 、最大長 2.47mm 、孔径 0.95mm 、重さ 45.79mg である。色彩は緑色系3個、他はほぼ藍系であるが藍系色の若干の色彩の違いは保存状態による。大半は亀裂が入り淡藍色に見えるが、本来は藍色をしていたものである。比較的保存状態の良好なも

第15図 御手長山古墳石室出土玉類実測図(1)



第16図 御手長山古墳石室出土玉類実測図(2)



第17図 御手長山古墳石室出土玉類実測図(3)

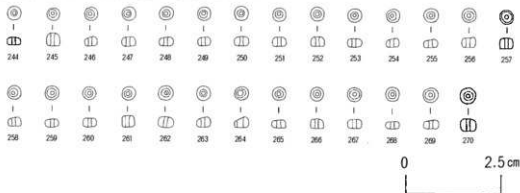


表3 玉類計測表

(単位 長さmm 重さmg)

番号	最大径	最小径	最大長	孔径	重さ	色調	備考
1	11・3	11	6・5	3・0	1148・7	灰藍色	石質不明
2	11・5	11・3	7・0	2・3	2084・5		
3	11・5	11・3	7・8	3・0	2023・2		
4	(11・0)	—	8・0	(3・0)	—		
5	(11・5)	—	7・0	(3・5)	—		
6	(11・5)	—	7・0	(3・2)	—		
7	(10・5)	—	8・0	(2・5)	—		
8	6・0	5・8	3・5	1・2	201・4	淡藍色	
9	7・0	6・8	5・2	1・7	377・2	+	
10	5・3	—	3・4	1・7	121・4	藍色	
11	6・0	5・7	4・0	1・5	207・7	淡藍色	
12	6・0	5・7	4・0	1・5	186・0	+	
13	6・3	6・3	3・0	2・0	217・4	+	
14	6・8	6・2	3・0	2・0	158・0	+	表面荒
15	6・0	5・7	3・0	1・5	170・6	+	+
16	6・2	6・0	3・0	1・5	208・7	+	+
17	6・5	6・0	3・0	2・0	188・0	+	
18	6・0	5・5	4・0	1・5	171・0	+	
19	6・5	6・0	3・7	1・5	220・5	+	
20	6・0	5・7	2・8	1・5	157・5	+	
21	6・5	6・0	3・5	1・8	208・0	+	
22	6・0	5・8	3・2	1・5	151・0	+	
23	6・0	5・5	3・5	1・4	167・9	+	
24	6・0	5・0	4・0	1・0	177・8	+	

番 号	最大径	最小径	最大長	孔 径	重 量	色 調	備 考
25	6・0	5・5	3・0	1・0	146・5	淡藍色	
26	6・5	6・0	3・5	1・5	206・5	◇	
27	5・5	5・3	3・0	1・6	115・6	◇	
28	3・5	3・2	2・8	0・8	44・0	◇	
29	4・0	3・7	2・8	0・8	55・5	◇	
30	4・0	3・8	2・6	0・9	50・1	◇	
31	4・3	4・0	2・5	1・0	55・0	◇	
32	4・8	4・0	3・0	0・6	35・7	◇	
33	3・8	3・4	3・0	0・7	47・8	◇	
34	4・0	3・2	2・0	1・0	37・2	◇	
35	4・0	3・9	3・0	1・0	51・8	◇	
36	4・0	3・7	2・0	1・3	36・9	◇	
37	4・0	3・5	2・2	1・7	27・3	◇	
38	4・0	3・5	2・8	0・8	52・0	◇	
39	4・3	4・0	3・0	0・6	71・6	◇	
40	3・8	3・5	2・6	1・0	38・5	◇	
41	3・8	3・5	3・0	0・9	48・7	◇	
42	4・0	3・6	2・8	0・1	60・5	◇	
43	3・8	3・5	3・0	0・7	62・9	◇	
44	4・0	3・5	2・5	0・8	53・7	淡綠色	
45	4・2	4・0	3・0	0・7	54・5	淡藍色	
46	4・0	3・7	3・0	0・8	57・1	◇	
47	3・5	3・0	2・0	1・0	31・4	◇	
48	3・5	3・2	3・0	0・8	53・7	◇	
49	4・6	3・7	2・8	0・1	65・4	◇	
50	4・0	3・5	2・3	1・0	44・5	◇	
51	3・7	3・5	2・6	1・0	41・7	◇	
52	4・0	4・0	2・5	1・0	47・7	◇	
53	4・0	4・0	2・8	0・8	55・1	◇	
54	4・5	4・2	3・0	1・3	91・2	緑 色	
55	4・0	3・8	3・0	0・8	71・4	淡綠色	
56	3・7	3・5	2・8	1・0	42・4	淡藍色	
57	4・0	3・5	3・0	1・0	47・3	◇	
58	4・0	3・7	2・5	1・0	40・6	◇	
59	4・0	3・5	2・3	0・9	39・0	◇	

番 号	最大径	最小径	最大長	孔 径	重 き	色 調	備 考
60	3・8	3・5	2・2	1・0	40・2	淡藍色	
61	3・8	3・5	3・0	0・6	46・6	◆	
62	3・7	3・5	2・2	0・8	41・1	◆	
63	3・7	—	2・0	0・8	31・8	◆	
65	4・2	4・0	2・5	0・9	53・7	◆	
64	4・0	3・8	2・0	1・5	51・1	藍 色	
66	4・0	3・7	2・5	1・0	58・6	淡藍色	
67	3・8	3・7	2・5	0・8	53・5	◆	
68	4・0	4・0	3・0	1・0	57・5	◆	
69	3・8	3・5	3・0	0・9	56・3	◆	
70	4・0	3・7	2・5	1・0	42・1	◆	
71	3・8	3・6	2・6	0・9	45・1	◆	
72	3・8	3・7	2・5	0・8	50・6	◆	
73	3・8	3・7	2・5	1・0	38・7	◆	崩 壊
74	3・7	3・5	2・7	0・8	53・5	◆	
75	3・7	3・5	3・0	0・7	53・3	◆	
76	4・0	3・7	2・0	0・9	46・2	◆	
77	3・8	3・5	2・0	1・0	39・2	◆	
78	3・8	3・7	2・5	0・8	46・2	◆	
79	4・0	3・5	2・5	0・8	51・3	◆	
80	4・0	3・7	2・5	1・0	41・3	◆	
81	3・8	3・5	2・0	1・0	44・0	◆	
82	3・8	3・5	2・5	1・3	40・1	◆	
83	3・8	3・6	2・0	0・8	39・0	◆	
84	4・0	3・8	2・5	1・0	50・7	◆	
85	4・0	4・0	2・6	1・0	48・0	◆	
86	4・0	3・8	2・4	1・0	49・4	◆	
87	4・0	3・6	2・3	1・0	47・4	◆	
88	4・0	4・0	2・2	0・8	47・8	◆	
89	4・0	3・8	2・0	0・8	48・3	◆	
90	3・8	3・5	1・9	1・0	41・3	◆	
91	4・0	3・7	2・0	1・2	39・1	◆	
92	4・0	3・7	2・5	0・9	46・5	◆	
93	4・0	4・0	3・0	1・0	58・3	◆	
94	3・7	3・5	2・5	0・8	50・5	◆	

番 号	最大径	最小径	最大長	孔 径	重 量	色 調	備 考
95	4・0	3・5	2・4	1・0	36・4	淡藍色	
96	4・0	3・8	2・4	0・8	52・9	◆	
97	4・3	4・0	2・4	0・9	41・2	◆	
98	4・0	3・7	2・5	1・0	47・6	◆	
99	4・0	3・7	3・0	0・8	58・7	◆	
100	3・8	3・6	2・5	0・9	48・3	◆	
101	3・8	3・5	2・0	1・0	32・4	◆	
102	3・8	3・5	2・2	0・9	41・6	◆	
103	4・0	3・8	2・0	0・9	47・3	◆	
104	3・9	3・5	2・0	1・0	37・3	◆	
105	4・2	4・0	3・0	1・0	72・5	◆	
106	3・6	3・5	1・8	0・9	39・5	◆	
107	4・0	4・0	2・5	0・9	56・3	◆	
108	3・5	3・5	2・5	0・9	41・9	◆	
109	3・6	3・5	2・0	0・7	42・7	◆	
110	3・7	3・5	1・9	1・0	37・8	◆	
111	3・8	3・6	2・5	1・0	51・2	◆	
112	3・8	3・5	1・9	1・3	35・1	◆	
113	3・8	3・6	2・0	1・2	43・4	◆	
114	3・5	3・3	2・4	1・0	36・5	◆	
115	3・8	3・5	2・5	1・0	42・1	◆	
116	3・6	3・5	2・0	1・0	40・1	◆	
117	3・8	3・5	2・0	1・0	40・5	◆	
118	3・8	3・5	1・8	1・2	41・0	◆	
119	3・7	3・5	2・7	1・0	43・1	◆	
120	4・0	3・5	2・0	0・8	41・8	◆	
121	3・7	3・5	1・8	1・2	40・6	◆	
122	3・8	3・6	2・0	1・0	40・7	◆	
123	3・8	3・5	2・5	1・0	38・5	◆	
124	4・0	3・5	2・0	1・0	39・4	◆	
125	3・7	3・5	2・0	0・9	44・9	◆	
126	3・9	3・5	2・8	1・0	50・8	◆	
127	4・0	3・5	1・9	1・0	45・4	◆	
128	3・8	3・2	2・0	1・0	40・5	◆	
129	3・8	3・6	1・9	0・8	40・4	◆	

番 号	最大径	最小径	最大長	孔 径	重 量	色 調	備 考
130	3.9	3.7	2.0	1.0	39.0	淡藍色	
131	4.0	3.5	2.5	0.8	44.1	◇	
132	3.5	3.4	2.2	1.1	41.2	◇	
133	3.7	3.6	3.0	0.8	44.5	◇	
134	3.8	3.5	3.0	1.9	48.4	◇	
135	3.9	3.5	2.8	1.0	49.0	◇	
136	3.7	3.5	2.2	0.9	44.3	◇	
137	3.5	3.5	2.3	1.0	41.0	◇	
138	4.0	3.6	2.5	1.2	43.8	◇	
139	3.5	3.5	3.0	0.8	47.2	◇	
140	3.8	3.5	2.2	1.0	37.9	◇	
141	3.6	3.5	3.0	1.0	54.6	◇	
142	3.7	3.5	2.3	0.7	42.8	◇	
143	3.8	3.7	2.0	0.9	42.0	◇	
144	3.9	3.6	2.8	0.9	49.1	◇	
145	3.7	3.5	2.2	0.9	45.8	◇	
146	3.7	3.5	3.0	1.0	40.4	◇	
147	3.8	3.6	3.0	1.0	54.5	◇	
148	3.8	3.6	2.4	1.3	41.6	◇	
149	4.0	3.7	2.5	2.0	46.6	◇	
150	4.0	3.5	2.5	0.9	41.2	◇	
151	4.0	3.7	2.8	0.9	55.6	◇	
152	3.7	3.5	2.5	1.0	43.9	◇	
153	3.7	3.5	2.5	1.3	41.5	◇	
154	3.8	3.6	2.0	1.0	43.1	◇	
155	3.7	3.5	2.6	1.0	50.2	◇	
156	3.5	3.4	2.8	1.0	47.1	◇	
157	3.6	3.5	2.5	0.9	45.8	◇	
158	3.8	3.8	2.5	0.6	45.3	◇	
159	3.7	3.5	2.0	0.9	37.9	◇	
160	3.8	3.6	2.0	0.9	36.9	◇	
161	3.8	3.5	3.0	1.0	49.9	◇	
162	3.7	3.5	2.5	1.0	41.2	◇	
163	4.0	3.8	2.4	1.0	49.0	◇	
164	4.0	3.6	2.1	1.0	43.3	◇	

番 号	最大径	最小径	最大長	孔 径	重 量	色 調	備 考
165	3・7	3・5	2・4	0・8	43・9	淡藍色	
166	3・7	3・5	2・5	0・7	50・5	＊	
167	3・7	3・5	2・4	1・0	38・8	＊	
168	3・7	3・5	2・5	0・8	43・8	＊	
169	3・7	3・5	2・9	1・0	40・1	＊	
170	3・8	3・6	2・5	1・0	45・0	＊	
171	3・8	3・7	1・8	0・8	36・2	＊	
172	4・2	4・0	2・5	1・0	47・7	＊	
173	3・7	3・5	2・2	0・8	44・0	＊	
174	3・8	3・5	2・0	1・0	39・4	＊	
175	3・8	3・8	2・0	1・4	35・0	＊	
176	3・7	3・7	2・5	0・8	45・9	＊	
177	3・8	3・5	2・8	0・8	50・1	＊	
178	3・9	3・9	2・5	1・4	45・2	＊	
179	3・7	3・5	2・0	1・2	34・1	＊	
180	3・8	3・7	2・5	1・2	40・8	＊	
181	3・5	3・0	2・0	0・9	32・7	＊	
182	3・8	3・6	2・5	0・8	48・2	＊	
183	3・8	3・8	2・5	1・0	42・7	＊	
184	3・6	3・6	2・8	0・8	46・7	＊	
185	3・6	3・5	2・0	1・4	40・2	＊	
186	3・8	3・6	2・0	1・2	40・2	＊	
187	3・8	3・7	2・4	0・9	47・8	＊	
188	3・5	3・5	2・5	0・9	34・9	＊	
189	3・9	3・6	2・5	1・0	42・7	＊	
190	3・8	3・6	2・5	1・0	43・5	＊	
191	3・7	3・5	2・5	1・0	40・0	＊	
192	3・5	3・5	2・5	1・4	38・2	＊	
193	4・0	4・0	3・0	0・8	56・6	＊	
194	3・5	3・5	2・4	0・8	39・2	＊	
195	3・5	3・5	2・7	0・8	54・0	＊	
196	3・5	3・5	2・5	0・8	48・6	＊	
197	3・6	3・5	2・5	0・9	45・3	＊	
198	3・9	3・7	2・5	1・0	45・7	＊	
199	3・7	3・5	2・0	1・2	42・2	＊	

番 号	最大径	最小径	最大長	孔 径	重 量	色 調	備 考
200	3.9	3.7	2.5	1.1	46.5	淡藍色	
201	3.8	3.6	2.0	1.0	39.7	◇	
202	3.5	3.4	2.3	1.0	40.3	◇	
203	3.7	3.5	2.0	1.2	36.6	◇	
204	3.7	3.5	2.1	0.6	31.1	◇	
205	3.6	3.5	3.0	0.9	49.7	◇	
206	3.5	3.3	2.8	0.9	49.9	◇	
207	3.8	3.5	2.5	0.9	45.1	◇	
208	3.5	3.5	3.0	0.9	50.3	◇	
209	3.8	3.5	2.9	1.0	50.0	◇	
210	4.0	3.8	1.9	1.2	39.3	◇	
211	4.0	3.7	2.5	1.0	47.3	淡青色	
212	3.7	3.5	2.0	0.8	41.2	淡藍色	
213	4.0	3.8	2.5	0.9	49.8	◇	
214	3.7	3.5	2.5	1.0	45.2	◇	
215	4.0	3.9	3.0	0.9	62.1	◇	
216	4.0	3.5	2.0	1.0	38.9	◇	
217	3.8	3.6	2.8	0.8	48.3	◇	
218	4.0	3.7	2.5	0.9	53.0	◇	
219	3.5	3.5	2.0	0.9	39.8	◇	
220	3.7	3.5	2.8	0.9	46.3	◇	
221	3.6	3.5	2.5	1.0	40.1	◇	
222	3.6	3.5	2.5	1.2	40.5	◇	
223	3.5	3.4	1.9	1.0	41.9	◇	
224	3.7	3.7	2.8	1.0	46.0	◇	
225	3.5	3.5	2.5	0.8	40.1	◇	
226	3.9	3.8	3.0	0.8	53.2	◇	
227	3.7	3.5	2.8	0.8	46.4	◇	
228	3.7	3.6	2.5	0.7	39.6	◇	
229	3.9	3.5	2.5	1.0	42.6	◇	
230	3.7	3.5	2.8	0.9	42.9	◇	
231	3.5	3.5	2.3	0.8	42.5	◇	
232	3.6	3.5	2.2	1.0	36.9	◇	
233	3.7	3.7	2.5	1.0	41.0	◇	
234	3.6	3.5	3.0	0.8	52.6	◇	

番号	最大径	最小径	最大長	孔 径	重 量	色 調	備 考
235	3・6	3・5	2・4	0・9	39・1	淡藍色	
236	3・8	3・8	2・7	1・0	47・8	◇	
237	3・6	3・5	2・6	1・0	51・5	◇	
238	4・0	3・7	2・5	1・0	53・6	◇	
239	3・5	3・4	2・2	0・9	37・8	◇	
240	3・5	3・5	2・8	1・0	45・1	◇	
241	3・8	3・6	2・5	1・0	44・6	◇	
242	3・7	3・5	2・7	0・9	48・1	◇	
243	3・6	3・5	3・0	0・6	51・3	◇	
244	3・6	3・5	2・0	0・9	39・6	◇	
245	3・5	3・4	3・4	0・9	57・8	◇	
246	3・5	3・5	2・5	0・9	41・9	◇	
247	3・6	3・5	2・5	1・0	42・7	◇	
248	3・8	3・5	2・4	1・0	39・8	◇	
249	3・7	3・5	2・3	1・0	39・8	◇	
250	3・8	3・6	2・5	0・8	47・5	◇	
251	3・5	3・5	2・5	1・0	42・3	◇	
252	3・6	3・6	2・5	0・9	45・6	◇	
253	4・0	3・9	2・3	1・0	42・5	◇	
254	3・6	3・5	2・4	1・0	39・3	◇	
255	3・8	3・5	2・2	1・0	41・6	◇	
256	3・8	3・6	2・8	1・0	48・6	◇	
257	4・0	3・5	2・8	0・9	51・2	◇	
258	3・6	3・6	2・4	0・9	39・5	◇	
259	3・9	3・5	2・0	0・9	43・8	◇	
260	3・6	3・5	2・5	0・9	44・1	◇	
261	3・7	3・5	3・0	0・9	51・6	◇	
262	4・0	3・9	2・8	0・9	63・6	◇	
263	3・8	3・7	2・7	1・0	46・7	◇	
264	3・7	3・5	2・9	1・5	41・6	◇	
265	3・6	3・5	2・2	1・0	46・1	◇	
266	3・5	3・5	2・5	0・8	47・4	◇	
267	3・8	3・7	2・5	1・0	43・7	◇	
268	3・7	3・7	2・0	0・9	35・2	◇	
269	3・8	3・7	2・4	0・8	41・0	◇	

番 号	最大径	最小径	最大長	孔 径	重 量	色 調	備 考
270	4・2	4・0	3・2	1・0	94・8	淡青色	
平均							
8～27	6・23	5・79	3・34	1・36	191・74		
28～							
270	3・81	3・60	2・47	0・95	45・79		

(重さの測定 ドイツSartorius 直示天秤使用)

のには、丸玉にみられた縦方向の更に細かい筋状の気泡がみうけられる。全体として加工は良好といえない。

b 武器・武具

○大刀 (第18図)

平造平棟の直刀で大きく5つに曲って実測図長86・9cm、復元長、87・9cm、棟幅は0・6cmにほぼ一定しているが、切先より10cmあたりから狭ばまる。身幅は銚の部分で3・6cm、切先で2・8cm、茎は短く4・9cm、目釘穴は錆化膨脹で不明。銚には切羽がついているが錆化して付着したのではなく当初より銚と切羽を一体のものとして製作されたものである。銚部の長径4・8cm、短径2・1cm、長さ1・7cm、切羽部は長径6・2cm・短径1・65cmの倒卵形、茎穴も倒卵形の長径2・8cm、短径1・65cmである。身の破損した部分の観察では、その断面は三角形の中空となっている。

○鏢 (第18図)

長径8・5cm 短径5・85cmの倒卵形、一部を欠失しているが茎穴も倒卵形の長径3・3cm、推定短径2・15cmである。錆ぶくれが著しく透穴は径0・2cmの円形で4穴だけ認められる。断面は丸耳で厚さ約0・4cm、茎穴断面は鋭角である。

○柄頭 (第18図)

4片からなり、図上復元したものである。鉄製で残存長4・3cm、幅3・55cm、横断面は卵形となる。厚さ0・15～0・1cm、頭が厚くなっている。内部に木質の付着はないが緑青が少量付着している。

○弭金物 (第18図)

弭は1個で、本弭か末弭かは判明しない。先端の一部と基部を欠失し、現存長5・7cm、銀製である。フルイによって検出された銀片が2点あるが弭の部分と考えられる。現存基部の直径1・7cm、断面円形で先端部の幅は薄く断面は楕円形となる。その境界に斜面をつくり、肩としている。厚さ0・4mm、内部に木質が一部残存していたが、種類については判明しない。

○鉄鏃 (第19図・第20図・第21図)

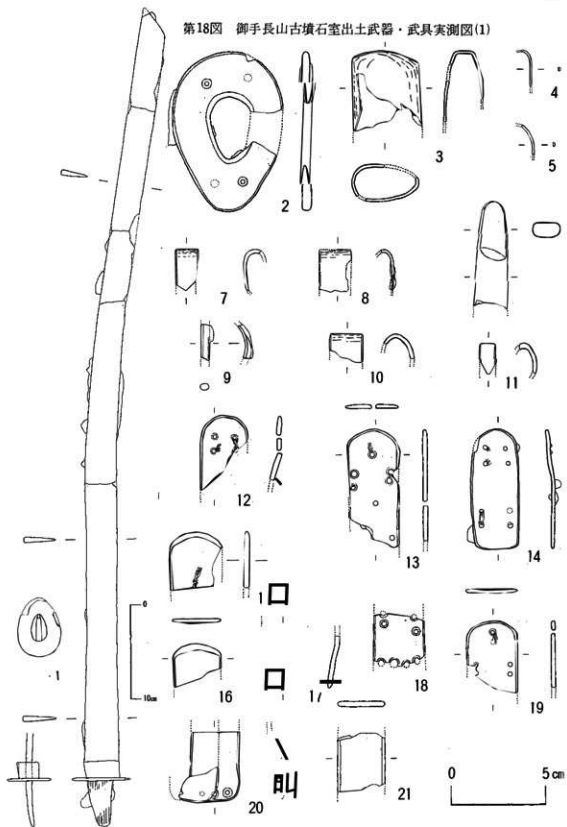
86点あるが完存するものは無い。大半は断片である。身をもつ24点は下記のとおりである。

	造	匏被	形式	備考
1	片丸造	棘匏被	壺箭式	両関
2	片丸造	棘匏被	三角形式	脇袂
3	両丸造	匏被	三角形式	脇袂
4	両丸造	匏被	三角形式	脇袂
5	両丸造	匏被	三角形式	脇袂
6	両丸造	匏被	三角形式	脇袂
7	両丸造	匏被	三角形式	脇袂
8	両丸造	匏被	柳葉式	脇袂
9	両丸造	匏被	柳葉式	脇袂
10			片刀箭式	木質付着、付着面へ陥状に反る。
11		棘匏被	壺箭式	関無
12	片丸造	匏被	壺箭式	関無
13	片丸造	匏被	壺箭式	関無
14	片丸造	匏被	壺箭式	関無
15	片丸造	匏被	壺箭式	関無
16			片刀箭式	両関、木質付着
17	両丸造		壺箭式	関無
18	片丸造		壺箭式	関無
19	片丸造		壺箭式	関無
20	片丸造		壺箭式	関無
21	片丸造		壺箭式	関無
22	片丸造		壺箭式	関無 小木片付着
23	片丸造		壺箭式	
24	両丸造		三角形式	

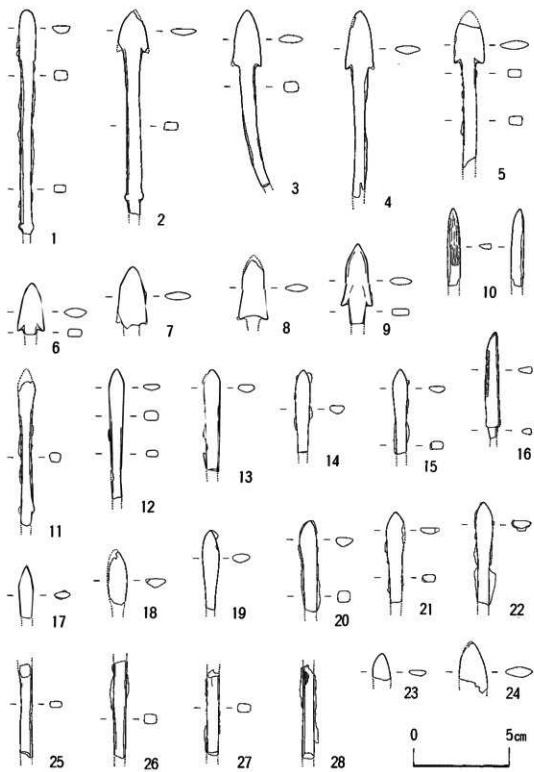
棘匏被は1・2の2点 匏被の明瞭なものは3~6・9、11~16、19~22の15点、身のみで匏被の不明なもの7・8・10・17・18・23・24の7点で、これらも匏被をもつものであろう。三角形式、柳葉式の身は脇袂をもつ。身は両丸造、片丸造半々で匏被断面は長方形となる。片刀匏式の10・16は身に、身と同方向の木質が付着している。

匏被の破片は19点ある。断面はいずれも長方形であるが歪んだ34や楕円に近い40もある。28には糸質は不明であるが平織の布片が付着している。糸の太さは経糸が0・2mm、緯糸は0・3~0・4mmで糸に撚りはない。密度は小片のため不明。36、37、39、40、43は身に近いと考えられる。29は木質が付着しているが、棘またはその痕跡は認められず、断面も長方形で、茎とはならない。棘匏被は16点ある。茎には縦方向の木質が付着して棘と茎の間に横方向の繊維の付着が認められる。(44~48、50、52、53、55、56) この繊維は糸のような細いものではなく樹皮状である。(あるいは桜材か)

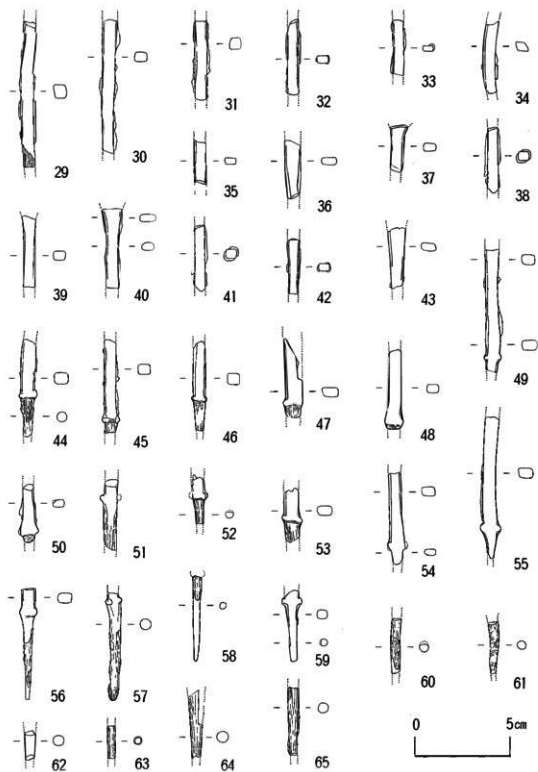
第18図 御手長山古墳石室出土武器・武具実測図(1)



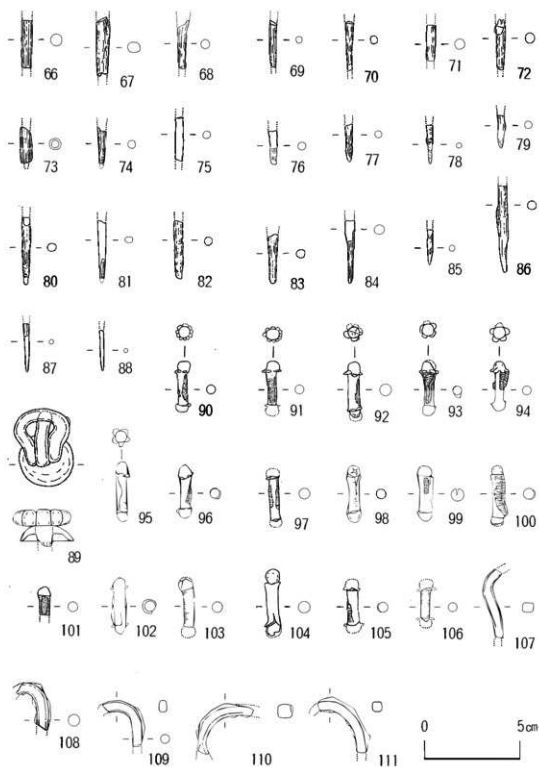
第19図 御手長山古墳石室出土武器・武具実測図(2)



第20図 御手長山古墳石室出土武器・武具実測図(3)



第21図 御手長山古墳石室出土武器・武具・馬具・留金具実測図



茎は29点あり断面は円形、木質が縦方向に付着し、木質と茎の間には棘と茎の間にみられた樹皮状の繊維が、横あるいは斜に認められる。(61、74、76~78、80、82、85、86)

○刀装具 (第18図4・5)

半円形断面の銅製、径0・2cm、弦0・2cm、腐蝕が著しく実測不可能な小破片が1点ある。厚さ0・01cmの銀製品に銹化付着しており、銀製品にも緑青が付着している。銀製品といってもクシャクシャにまるめられたような状態で共に装飾用の刀装具であったと考えられる。

○鑑 (第18図)

刀子または大刀の拵えの鑑と考えられる。鉄製、刀子の出土はなかったが7、11は刀子、8、9、10は大刀の鑑であろうか。断片なので詳細は不明である。

○小札 (第18図)

破片を含めて10点である。形態はそれぞれ異り、完存するものは14の1点のみで、長さ6・4cm最大幅2・6cm、厚さ0・2cmわずかに湾曲しており、0・2cm前後の径の8つの穿孔があり、繊維の付着が認められる。組紐であるかは判然としない。上部の4穴は棒状となるようで裏側は縦の繊維が付着している。裏側裾の一部に獣皮と考えられるものが付着している。12は湾曲し、厚さ0・2cmの小札で繊維痕は組紐であることが辛うじて判別できる。13は7つの穿孔が認められ幅は裾が少々せばまる。繊維痕は不明瞭である。15の穿孔は繊維に塞がれ、その痕跡は組紐のようでもあり、縄状のようでもある。16は形態断面とも15に似ているが穿孔は認められない。17は裾が括れており穿孔は4穴、断面は僅かに湾曲し、厚さ0・3cm、繊維痕は認められない。18は8つの穿孔が認められ裾の横一列に4穴、上部は縦に2穴づつ両脇に4穴、厚さ0・25cm、繊維痕なし。19は上部中央に縦2穴、その下に縦2穴づつ2ヶ所の6穴が、繊維痕は認められるが詳細不明、厚さ0・2cm。20は小札2枚が銹付着したものであるが、銹が著しく穿孔数は不明、裏面の一部に獣皮らしきものの付着がみられる。厚さ0・2cm。小札は横断面が多少湾曲するようであるが21は平均した厚さで湾曲もない。小札ではないとも考えられる。

○馬具

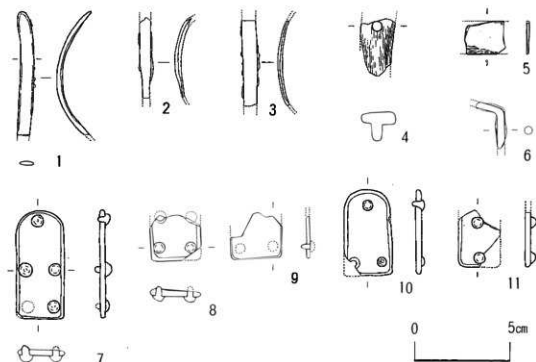
○鉸具 (第21図)

1点のみで銹ぶくれが著しい。直径0・6cmほどの金棒をフラスコ状に曲げ、中央に刺金をおいたものであるが、刺金の留め方、金棒の番目の有無は判明しない。直径2・8cm、高さ0・8cmの半球状の台座にとり付けているが、鉸具を差し込んでいるようで、さし込まれた先端には縦方向の木質が付着している。

○飾金具 (第22図)

馬具の飾として使用されたもので5点ある。完存するものは7の1点のみであるが一部破損程度の10がある。7は長さ5・7cm・幅2・5cm、厚さ0・3cm、一端はまるく0・7cm前後の径の鉄を5つもち、その先端は0・3cm程裏側につき出している。鉄の長さ0・9cm前後である。10は長さ4・6cm、幅2・5cm、厚さ0・3cm、一端はまるく7と同じような鉄を3つもち。8、9、11は破片であるが、8は4つ以上の鉄をもって7と同じ形状となるのか、正方形の金具となるのか不明。この金具の鉄のつき出た裏側は多少肥厚する。9は他のものに較べ0・2cmと薄く鉄の頭も欠失している。

第22図 御手長山古墳石室出土馬具・他実測図



幅は2・7cmと少々広い。11は幅2・2cmと狭く遺物でみる限り縦に2つの銚をもつ。形状は7にみられるように長く5つの銚をもつもの、それより短く3つの銚をもつ10、11のように縦列する銚をもつ三種に大別できよう。

d その他

○留金具 (第21図)

破片を含めて17点である。両端は半球状をなしており、それぞれ基部に花卉状の突起がつくられている。突起は小さく薄いため欠失が多いが、大きく5枚、または小さく10枚となるようである。花卉状の突起と突起との間は1・5cm～2・3cmとまちまちで断面は円形の棒状であって直交する木目の木質が付着している。中央部断面は幾分細くなるようであるが、用途については不明である。

○不明鉄製品 (第21図・第22図)

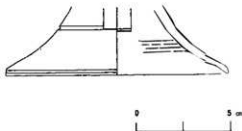
破片で形状と用途のわからないものが11点ある。107～111の5点は馬具の部品であろうか。

1～3は両丸の断面をもち大きく湾曲する。4は目釘が茎に付着したような形状を示すが一体に製作されたもので木質が付着している。5は鉄板の破片のようであり片側一部に木質が付着している。6は断面円形で曲っている。

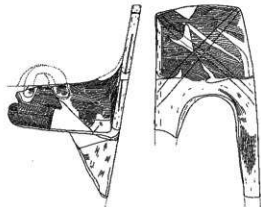
e 土器

○須恵器 (第23図)

3点の破片を図上復元したものである。円周の1/5ほど残った高杯の裾である。裾は大きく開きその先端は、幾分内湾がみで径11・8cm(推定)ある。透穴は横1・5cmの4穴と考えられ、透穴



第23図 御手長山古墳
石室出土須恵器実測図



第24図 御手長山古墳墳丘出土
家型埴輪実測図

第24図の家型埴輪は、破風と棟の一部のみであるが破片数11片で保存状態は割合い良い、全体が第25図の家型埴輪より、ひとまわり小型となる。破風の刻線は2本を単位としてX状に入り、ハケ目文様は横に走る。棟には割竹形の鯨木が剝離した痕跡があり、その下の棟に径1cmほどの小穴が穿孔されている。色調赤褐色で胎土に少量の砂礫を含む。

第25図の家型埴輪は破片数40片余で、全体のほぼ1/10ほど残っていたにすぎなかったが復元に成功した。但し棟高、破風高、棟幅は破片の状況から推定したものである。復元原状によると左破風高6.8cm、右破風高6.7cm、棟高4.8・5~4.6cm、軒の接地部奥行6.3・6cm、間口3.7・2cmの切妻造である。棟に3ヶ所割竹形の鯨木がみられ、更に2本の柱が立つ。柱の上端には四方へ垂れ下った座蒲団状のものが付けられ、その頂部に3mmほどの盛りあがりて円形をつくっている。

割竹形の鯨木の上部は穿孔され、ほぼ同位置の棟にも穿孔がなされる。

側まわりの立ちあがりがなく、軒先が直接接地した竪穴式住居を表現していると考えられる。棟より屋根を下ると、二本の刻線が横に入り、それを右傾、左傾する刻線で交叉させ、更にその下には2本を単位とした波状刻線が9単位認められる。製作工程におけるこれらの刻線は、波状-2本の横刻線-左傾、右傾刻線の順となる。(実測図では交叉する刻線の新しい方を結んだ。)

軒先は帯状に凸帯が付けられ、奥行両側にボタン状のものが付けられている。色調は黒褐色-赤褐色と部分によって異なる。砂礫を含む。棟部分は特に風化が著しい。

の下端に溝が走る。ロクロにより内外面とも整形されるが、内面は粗く指頭痕状である。器内はあざき色、器表は暗灰色で軸の流れはないが、にじみ出しているようで黒光りしている。胎土に非常に細かい石英を含み、焼きしまりは非常に良く、たとく金属音を発する。器壁もうすく、出来も精巧であり地場産の須恵器ではなく移入品であろう。

墳丘出土遺物

墳丘は大半を破損し埴輪などの遺物は失なわれていると考えられていたが、石室上の盗掘溝内より家型埴輪が擾乱の状態出土した。その他上段葎石付近より若干の埴輪片が出土した。

○家型埴輪 (第24図・第25図)

家型埴輪は石室直上の擾乱層のなかに混在していたもので、墳頂下1.8m~2.5m(標高62.1~61.4m)より出土した。石室崩壊の際、墳頂部より落ち込んだものであろう。

最終的には二戸分の家型埴輪が出土した。

○朝顔型円筒埴輪 (第26図-3)

口縁もない破片であるが、凸帯の下に横ナデがあり括れ部と考えられる。家型埴輪と混在していた。外面は縦方向、内面は斜め方向のハケによる整形、褐色を呈し、胎土に大きめの砂を含む。

○円筒埴輪 (第26図)

1は口縁部で先端が強く外反する。凸帯は幅も広く高さもある。家型埴輪と混在し風化が著しい。暗褐色を呈し、胎土に砂を含む。2は上段葎石付近より出土したもので口唇部のみ外反し、ヘラで切りとったようである。凸帯は三角に近く、黄褐色、砂を多量に含む。4は薄手で凸帯はしっかりしている。赤褐色、砂を多量に含む。5、6、7は底部で家型埴輪と混在していた。6は推定径2.4cmである。7は底部径1.2・5cm、底部近くの厚手の部分は5mmほど化粧土を加えて、その間に横方向のハケ整形痕が認められる。外面は当初横方向でハケ整形し(化粧土の下にみられたハケ目と同じでハケ幅間隔約2mm)、後に細かいハケで縦方向の整形が行なわれ、横方向のハケ目が消えず格子状となる。更に底部近くは板で叩きしめた痕が残る。ハケ目は消える。色調は赤褐色、焼成は非常に良い。1・2は内面ハケ整形痕が明瞭である。

○形象埴輪 (第26図)

8は家型埴輪の串で家型埴輪と混在していたが、別個体である。長さ19・4cmで下部は穴に差し込んで離脱した痕跡がある。色調褐色、砂礫を多く含む。

9~15は上部葎石付近の石列の間より出土したものである。9は第25図家型埴輪の柱上部に付いた四方へ垂れ下った座蒲団状の先端と同様のものである。10は不明。11は幅の広い凸帯上に、かがり籠目状の沈線文様が入り、更に八文字文の矢羽状の沈線も加えられる。赤褐色、胎土に砂を多く含む。13は人物埴輪の耳と考えられる。14、15は馬鈴で凸帯上に付されていた。

○人物埴輪 (第27図、第28図)

調査前に出土した人物埴輪が2点ある。第27図は昭和40年に西裾より出土したものであるが、出土状況については不明である。当時から第3図でみるような墳丘と大差はないので墳丘下部から出土したものである。総高6.6・5cm、両手を前に出し、指は親指以外を沈線で表現し、頸に丸玉を11個、耳環を両耳に付ける。凸帯下の両脇に不整形の円窓がみられ、左側は一刀で、右側は円窓左右一刀づつの二刀で切り取る。腕は差し込みで内面は整形もよく、ほとんど粘土紐痕は消している。背後には一部欠失するが、鎌をもっている。色調褐色、多量の砂礫を含む。

第28図は前者人物埴輪と同時期に出土したもので、水島治平氏が所蔵する。胸部以下と両腕を欠失するが、前者と非常によく似たつくりである。両耳に耳環と10個の丸玉を付け、腕は差し込み、色調は褐色、砂礫を多量に含む。

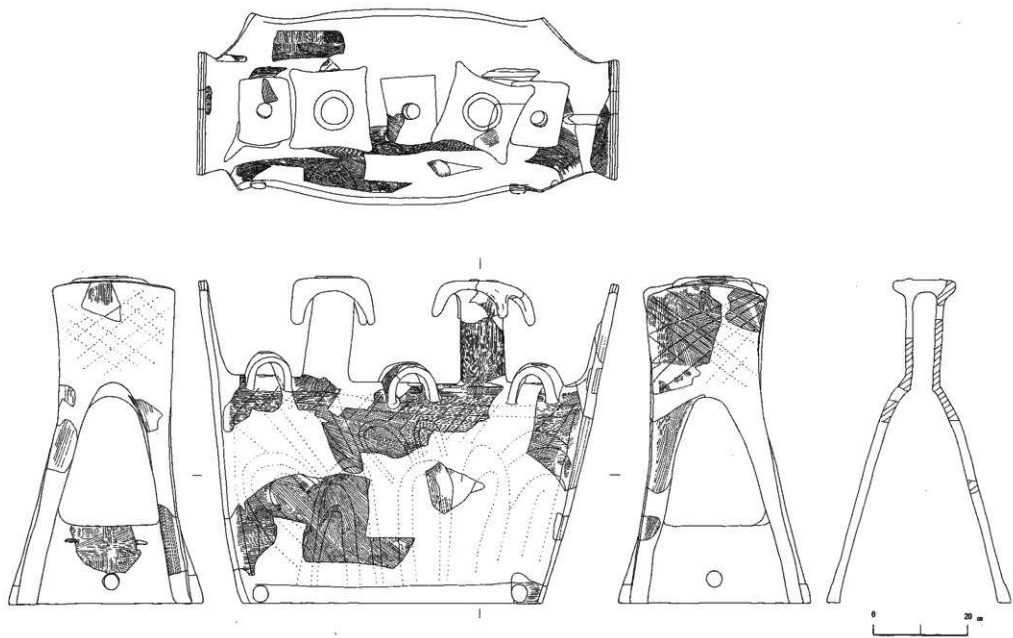
周堀出土遺物

周堀出土の遺物はダンボールのみかん箱に2箱ほどあったが、塵耗したものが多く、口縁部や底部、凸帯の明瞭な代表的なもののみを図示した。

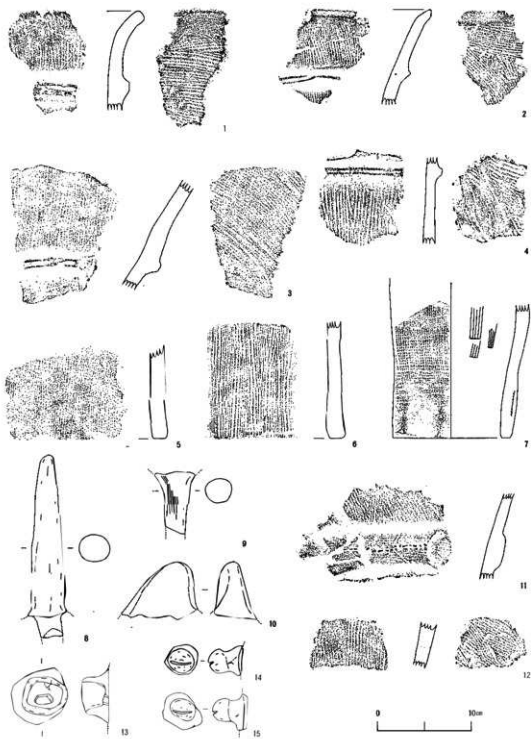
○円筒埴輪 (第29図-1~11)

1は外行したまま切ったような口縁部で、ハケ整形痕は1cmに3本と太く粗い。赤褐色で焼きしま

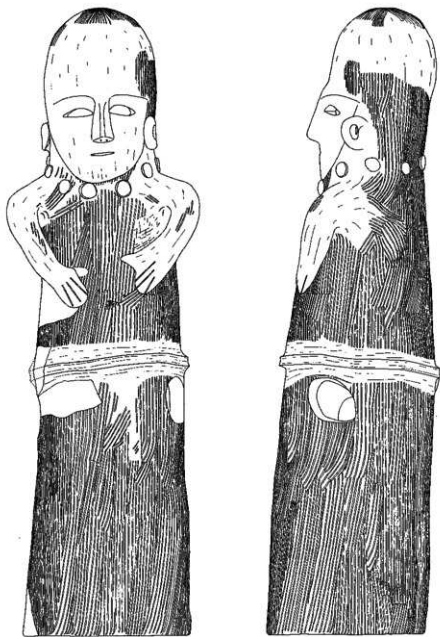
第25図 御手長山古墳墳丘出土家型埴輪実測図

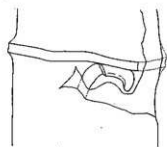
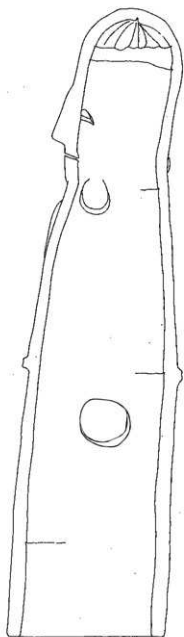


第26図 御手長山古墳墳丘出土埴輪実測図

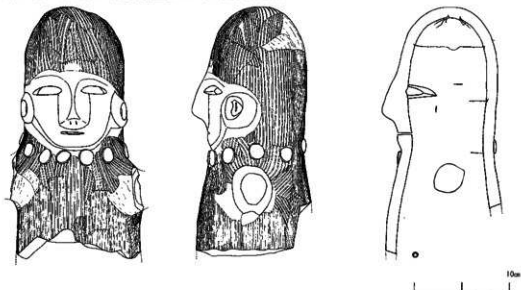


第27図 御手長山古墳墳丘出土人物埴輪実測図





第28図 御手長山古墳墳丘出土人物埴輪実測図



りは良好、少量の砂礫を含む。Dトレンチ出土。2は口唇部が反りかえり外面に稜ができる。色調は褐色、砂礫を多量に含む。Gトレンチ出土。4は弱く外反する。口唇より5cm下で低い凸帯がつく。赤褐色で多量の砂礫を含む。厚手で頑丈な造りである。Dトレンチ出土。6は両手の口縁で先端で強く外反する。口唇先端に溝が走る。色調褐色、多量の砂礫を含む。Hトレンチ出土。8は先端が強く外反する口縁で、幅、高さともがっしりした凸帯を有する。口唇先端に溝が走り、内面は内反きみである。色調褐色。Dトレンチ出土。3は垂れ下りぎみの凸帯（Bトレンチ）5は申し訳程度の凸帯で（C・Dトレンチの間出土）7は幅、高さともあり、がっしりした凸帯（Bトレンチ出土）10は乱れた凸帯をもつ。（Dトレンチ出土）11は申し訳程度の低い凸帯で凸帯の欠失部分に葉脈痕が付着している。円窓もみられる。Bトレンチ出土。4、5、10、11は出土地点こそまちまちであるが同一個体と考えられる。

○人物埴輪（第29図-12）

1点のみで人物の腕である。手先が細くなる。Bトレンチ出土

御手長山古墳以前・以降の遺物

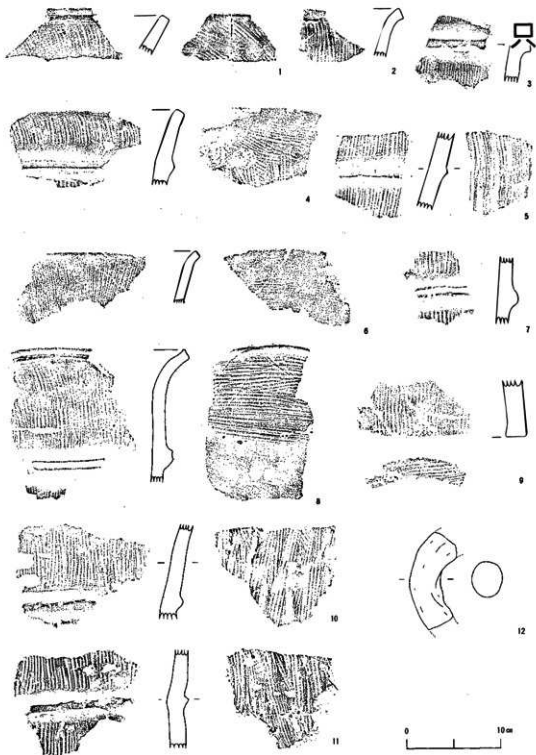
○縄文式土器（第30図-1~2）

1は3×2・5cmの小片で下部墳丘断面より出土した。小円墳築成後の再盛り土のブロック状に褐色土の交る黒色土中より検出したものである。縄文原体は不明、暗褐色で多量の繊維を含み、厚さ8mm。2は沈線と竹管文をもつ破片で、調査最終段階で墳丘排土中より検出したものである。厚さ1・1cm、縄文原体は不明で、細砂を含み、赤褐色。

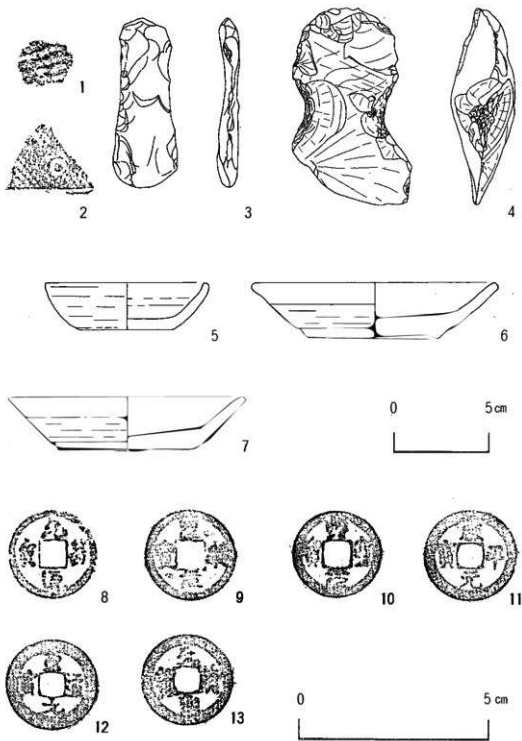
○打製石斧（第30図-3~4）

墳丘より出土したもので土器と共に混入したものであろう。3は長さ8・9cm、最大幅が3・4cmの短冊形である。調整剥離は両面に加えられているが表面風化で明瞭ではない。表面は灰褐色である

第29図 御手長山古墳周堀出土埴輪実測図



第30図 御手長山古墳墳丘および封土に埋葬された人骨副葬品実測図



が頁岩を使用している。刃部に使用痕が認められる。4は長さ10・3cm、括部4・3cmの分銅形である。片面に自然面を残し、括部には、こまかな調整刻痕が加えられている。粘板岩製。

○かわらけ (第30図-5)

Bトレンチの埋葬人骨の副葬品として出土したもので、(他に寛永通宝断片1個が出土している。拓影不可能)1/5ほどであるが推定口径8・6cm、高さ2・5cm、底部から内湾ぎみに立ちあがる。ロクロ整形痕が残り、外面に、水びきの痕跡がみられ、高台はない。色調は明るい褐色、胎土は精選され細かい砂を含む。

○灰釉陶器 (第30図-6-7)

Cトレンチ墳丘裾の埋葬人骨の副葬品として出土したものである。6は口径13cm、高さ2・85cm 灰釉が、「つけがけ」され高台は低くロクロ整形によって削り出されている。高台のまわりの軸だまりを焼成後磨いたものか、底部の稜も一部を残して磨かれている。口縁先端1cm以下にロクロ整形痕があり底部に間玉(かんだま)痕はなく、内底部に4つみられる。焼成の際は最下段に置かれたものである。7は口径12・5cm、高さ2・8cm、6とほぼ同じ造りである。内底、底部とも3つの間玉痕がみられる。底の最底部は高台よりはみ出して不安定である。胎土は共にぬずみ色っぽく緻密である。

○宋銭 (第30図8-13)

墳丘D区の頭骨の副葬品として出土したもので6枚ある。銕附着していた。8は元符通宝、9は至和元宝(?) 10は熙寧元宝、11は咸平元宝、12は明道元宝、13は元符通宝、すべて北宋銭である。

IV 調査のまとめ

角閃石安山岩を使用した石室を有する古墳について

御手長山古墳の石室に使用された石材は角閃石安山岩と総称され、尾崎喜左雄氏は、これらの石材を浮石貫紡錘状角閃石安山岩として『横穴式古墳の研究』（注1）に詳述している。

「榛名山の一峯、二ツ岳噴出により成生されたもので噴出した火山弾は回転しつつ落下し、紡錘状となり、利根川の流れによって運搬された。」そしてまた「その爆裂は西暦600年頃」に推定された。（注2）日本書紀（注3）推古天皇「七年夏四月乙未朔辛酉、地動舎屋悉破 則令四方俾祭震神」との記録により、地震と火山爆発との連関性から推定されたのである。

群馬県内においては西暦600年頃の二ツ岳の爆裂時の浮石層が、メルクマールとされ遺構の調査研究が進められている。

尾崎氏は群馬県内の角閃石安山岩使用石室を有する古墳を32例あげ（注4）、また埼玉県下において柳田敏司氏は石材の諸様相について、角閃石安山岩使用石室を述べられた。（注5）北限を本市市周辺、南限を春日部市、内牧古墳群とされた。

その後の調査例を加えて角閃石安山岩使用石室、または使用されたと考えられる古墳は次のようになる。

前橋市田口町	塩原塚古墳	両袖、一部切組互目積、他石一部使用	文献1、2
前橋市総社町	二子山古墳	両袖、互目、通目横混用	文献1
前橋市総社町	愛宕山古墳	両袖 一部に使用	文献1
前橋市文京町	不二山古墳	両袖 互目積	文献1
前橋市東片貝町	桂釜大塚古墳	両袖	文献1
前橋市朝倉町	長山古墳	両袖（推定）	文献1
前橋市朝倉町	朝倉Ⅲ号墳	一部に使用	文献4
前橋市後閑町	上川淵104号墳		文献1
前橋市女屋町	木瀬4号墳		文献1
前橋市笄井町	木瀬10号墳		文献1
前橋市今井町	荒砥311号墳	横穴式石室	文献1
前橋市二之宮町	荒砥285号墳	横穴式石室	文献1
前橋市山王町	山王大塚古墳	両袖	文献1、2
前橋市山王町	山王二子山古墳	横穴式石室	文献1
前橋市山王町	上陽10号墳	袖無	文献1、2
前橋市山王町	狐塚古墳	横穴式石室	文献1
富士見村原之郷	ボンボン塚古墳	両袖、一部使用	文献1
玉村町桶越	八王子塚古墳	横穴式石室、鋪石にも使用	文献1
玉村町角淵	玉村3号墳	両袖、網張り、一部他石使用	文献7

玉村町角淵	玉村37号墳	袖無、互目積、一石のみ他石	文献7
玉村町角淵	玉村15号墳	袖無 通目積 他石併用	文献7
玉村町後箇	萩塚古墳	両袖 通目積	文献7
高崎市大類	大類1号墳	一部使用	文献3
高崎市根小屋町	上石堂古墳	両袖 一部に使用か?	文献5、8
高崎市上並榎町	稲荷塚古墳		文献8
高崎市総貫町	観音塚古墳	両袖 互目 切組積	文献10
吉岡村南下	南下A号墳	両袖、奥壁切組積	文献9
伊勢崎市今村町	今村古墳	両袖	文献1
伊勢崎市安堀町	西太田下古墳	両袖、互目積	文献1
伊勢崎市安堀町	安堀古墳		文献1
伊勢崎市下諏訪町	蛇塚古墳	袖無 一部使用	文献4
伊勢崎市上ノ宮町	上ノ宮古墳	両袖 互目積	文献6
伊勢崎市稲荷町	宮郷3号墳		文献11
伊勢崎市稲荷町	宮郷4号墳		文献11
伊勢崎市稲荷町	宮郷8号墳	互目積	文献11
境町伊与久	雷電神社古墳	両袖 互目積	文献1
境町上淵名	上淵名古墳	袖無 一部使用	文献1
境町上淵名	国大1号墳	袖無?	文献1
境町上淵名	国大4号墳	袖無?	文献1
東村東小保方	下谷B号古墳	両袖、互目積	文献1、2
東村東小保方	下谷D号古墳		文献1
新田町下田島	竜塚古墳	両袖、一部切組、互目積	文献1
千代田村赤岩	米山薬師古墳	両袖(推定)、互目、積合せ緑泥片岩	文献1
明和村斗合田	稲荷塚古墳	両袖	文献1、2
板倉町岩田	筑波山古墳	両袖	文献1
上里町石神	浅間山古墳	一部切組、互目積 駒張り	文献1、12
本庄市小島	御手長山古墳	一部切組 互目積 駒張り	文献、本書
本庄市小島	坊主山古墳		文献12
本庄市中央	三夜社古墳		文献12
本庄市中央	開善寺境内古墳		
本庄市東台	本庄41号墳	駒張り	文献12
本庄市東台	本庄42号墳		文献12
本庄市東台	本庄43号墳		文献12
本庄市東台	本庄44号墳		文献12
本庄市栗崎	東谷古墳	互目積、奥壁片岩	文献1、12

本庄市翰森	本庄145号		
美里村下児玉	塚本山106号墳		文献13
岡部町岡新田	平塚古墳	駒張り、奥壁片岩か	文献14
岡部町岡	寅稲荷神社古墳		文献15
岡部町岡	千手堂御手長山		文献15
岡部町岡	八幡山古墳	奥壁片岩	文献16
熊谷市肥塚	肥塚古墳	通目、互目積まじる	文献1
行田市藤原町	八幡山古墳	複室三室、緑泥片岩と組み合わせ	文献17
行田市長野	白山姫塚古墳		
行田市齊条	齊条5号墳		
鴻巣市宮前	宮登古墳		文献18
杉戸町目沼	目沼3号古墳	互目積、駒張り	文献19
春日部市内牧	塚内古墳群		文献20

これら石室に角閃石安山岩を使用した古墳をみると、いくつかのタイプに分けることができる。

群馬県内においては、比較的調査例も多く、利用された石材の割合によって、総社二子山古墳のように全て角閃石安山岩を使用したもの、ボンボン塚のように一部に角閃石安山岩を使用したもの、塩原塚のような一部に他石を使用し、大半を角閃石安山岩を使用した例で、また石室の形からは上陽10号墳を含む4例にみられる袖無型、それ以外の両袖型とである。更に主体部の平面プランから、正方形と、正方形を基準とした隅丸方形、長方形を基準とした駒張り型などである。(注6)

埼玉県内においての調査例は、塚合古墳群(注7)平塚古墳(注8)宮登古墳(注9)行田八幡山古墳(注10)目沼第3号墳(注11)などの5例にすぎない。

塚合古墳群は破損が著しく41号墳で小判形の駒張り(注12)をもった石室下部が検出されたのみであった。平塚古墳は、ゆるい駒張りをもった玄室と、羨道の間に玄門をもち、玄門が存在しなければ袖無式に見まがるようなプランである。奥壁根石上端に、石室主軸に直交した、ほぞ穴がみられ奥壁は片岩を利用したものである(注13)。宮登古墳は奥壁の一部に片岩を利用し、正方形隅丸形(調査者は三味線胴の変形としている)である。行田市八幡山古墳は、角閃石安山岩、緑泥片岩を側壁に使用し、床石に凝灰岩質砂岩を使用した、前室、中室、奥室の三室から成る複雑な構造である。目沼第3号古墳の石室は、正方形に近い長方形で、奥壁は二段目の石組みに、石室主軸に直交してU字形の溝を彫り、板状の石を立てて奥壁としている。(注14)

この他に、石室が露出して形状の判明する古墳がある。

上里町浅間山古墳は、石室南半が崩壊しており、奥部のみ露出している。奥壁には最大縦40cm、横60cmの大形の石材を使用し、切組積が認められる。奥壁から東壁に移行するコーナーあたりからは、互目積、石材も小さくなる。天井部に近い壁上部は、内面削りのカーブが急となり、その上へ加工のない角閃石安山岩が横に1～2列組みあげられ、更にその上や、間に、御手長山古墳石室内に混入していた細長い河原石と同じような石材を積み、天井石が設けられている。天井石には片岩を利用し、石室背後の後込めは不明瞭である。

東谷古墳は、奥壁と側壁の一部のみ露出しているが、奥壁に数枚の片岩を利用した互目積で、奥壁の片岩に、側壁の角閃石安山岩を加工し、かませている。片岩の奥壁から両側壁に移る部分の石材は横断面が凹レンズ状に加工され、数個の石材で隅丸を形成している。天井石に接する奥壁最上段の片岩は木口に組まれ、側壁とともに直接天井石が設けられている。石室背後には後込め礫が認められる。

岡部町八幡塚古墳は、墳丘の一部が残存し、古墳址の記念碑が建立されているが『埼玉県史 第一巻』（注15）に概要と、写真が収録されている。これによれば側壁は角閃石安山岩の互目積で、奥壁の一部に片岩(?)を利用している。現在も周辺に角閃石安山岩が散乱している。

その他の例は、墳丘周辺に角閃石安山岩削り石が存在することから、角閃石安山岩使用石室と推定されるものであるが、中世に板石塔婆の基台や五輪塔に使用されることもあり、即断は危険である。(注16)

以上角閃石安山岩を使用した石室について見てきたが、利根川流域にのみ分布しているとはいえず。武蔵国と上野国では、いろいろな相違点があることもわかった。(当時の国境については不明であるが。) まず用材については、角閃石安山岩と他石を混積したものは武蔵国にはみあたらない。次に入手が容易であることもあるが、奥壁、あるいは奥壁の一部を片岩で構成する例は武蔵国に限ぎられているようである。平面プランの上からは、上野国に馴染りをもつものは少なく、武蔵国では逆に、長方形プランの石室は全く無く、ほとんどが狭長なゆるい馴染りをもっている。上野国で馴染りをもつ古墳は、埴野町雷電神社古墳(注17)、上毛古墳総覧宮野村第8号墳(注18)が判明しているのみである。

石室と墳丘の築造について

すでに本論のなかで述べたつもりであるが、築造の過程をまとめてみたい。

選地や設計基準については及ぶべきもないが、すでに設計の段階で、一連の工程は、綿密な計画がたてられていたものと考えられる。

掘り方の段階で、石室構造を意識した作業が行なわれている。掘り方の東、西、南、北のちあがりは無造作であるが、石室の壁となる部分は、実にきれいに、平面的には舌状、断面的には台形に掘り残している。掘り方は東西10・6m、南北8・7mの範囲に及び石室の残存部以南については、破損と、当初の掘り方調査意識の欠除から把握することはできなかった。

掘り方の次の版築は、砂礫をませ合せ固くつきかためられている。その互層は側壁下で50～60cmにおよび、あるものは砂礫のみで層をなしている。特に根石は礫層の上に設置されており、掘り方の範囲内に版築が行なわれその断面は凸レンズ状となる。

このように掘り方と版築を重ねて石室の基盤とした調査例は皆無にひとしい。大型古墳の調査例が少ないこともあるが、墳丘築造方法のよく似ている塚本山古墳群 12号墳(注19)でも掘り方はあっても版築の工程は無いようである。

青柳古墳群(注20) 黒田古墳群(注21) 鹿島古墳群(注22)の近からずとも、御手長山古墳とそう離れていないと思われる時期の古墳は、小規模、しかも破損が著しく、掘り方、版築の検出がむずかしいことは無理からぬことであるが、塚本山古墳群は比較的、掘り方が残存していた。

7世紀前半に位置づけられている1号墳、6世紀代の可能性をもつ同15号墳に掘り方は認められ

ず、7世紀中葉に位置づけられる同12号墳は掘り方のみ認められ、塚本山古墳群でみる限り、7世紀中葉以降に比定される古墳にのみ、掘り方があり、掘り方底部に直接石室の築造が、なされているようである。

7世紀中葉以前にさかのぼり得ない(注23)とされる塚本山古墳群41号墳では、同じ角四石安山岩の石室をもつが、基盤上(黒色土)にロームを厚さ8~10cm張り、石室を築造し、掘り方や版築は認められないようである。大型古墳に属する行田市の八幡山古墳は、既に石室を残すのみで墳丘はないが、復原工事に伴う石室実測調査によって、複雑な石室構造と版築が認められた。この八幡山古墳の版築は、基盤としての版築のみならず、床面下にも石室と同様な石組みがなされ、その石組みに併行した版築が行なわれている。(注24)

御手長山古墳のように掘り方と版築による基盤づくりを、時期決定のメルクマールとするのではなく、むしろ被葬者の身分、階層による墳丘の構築方法の差と考えたい。いずれにしてもこの種の古墳の復元的築造方法の究明という研究意識をもった調査例によって論ずるより他はないと考える。

石室の構築は墳丘と密接な関係がある。石室の石組みに併行して墳丘が築造され、天井が設けられ、石室が完成した段階で直径17m、高さ4・4mほどの小円墳となる。

断面観察によると、根石が版築上面の礫層に設置されると、その石材の上端まで後込めの砂礫を盛りあげる。その砂礫の上で次に組みあげる石材の加工がなされ組みあげられる。更に後込めの砂礫を盛りあげるといふ工程のくりかえしである。その工程が2~3度くりかえされると墳丘の盛り土が行なわれ、2~3層の礫層のまとまりと、盛り土とは互層となる。その礫層は石室背後より1・5m程裾にむかって延び2mに及ぶものもある。その砂礫層の先端には握拳大から幼児頭大の礫を配列し、くずれ止めとしている。砂礫層と互層になる盛り土は比較的層が薄く、丁寧な築造が行なわれていたものと考えられる。

平面的にみると、石室の石組みの組み順によって盛り土の状況も変化すると考えられる。石室の断面をみると根石より上3~5段目に、もち送りのカーブの微妙に変化する部分があるが、ここに重要な手がかりがあると考えられる。この部分以下の石組みは、根石より1段づつ側壁、奥壁とも組みあげられた、通し目に近い互目積で両脇の石材と横の目地が、ほぼ平らであり、この微妙に変化する部分以上の石組みは、切組積を併用した互目積となり、羨道方向へ傾斜した目地である。特に西壁の奥壁寄りに顕著で、石室後込めの角四石安山岩削り屑層によっても確認された。

石室内面からの観察によって第7図に示した番号は、石組みの順序を考慮して付定したものであるが、これによっても奥壁から左右両壁へ積み分けられていることが判り得よう。

下部の石組みの背後の角四石安山岩削り屑層が横の目地に沿って存在するのの平面的確認は、できなかったが、側壁を一周して組みあげられたものと考えられ、石室の石組みを構築する上での作業上の区切りであった可能性がある。

このように、もち送りの微妙に変化する部分までは、1段づつ組みあげられ、後込めの砂礫も同じように、そして墳丘も一層づつ築造され、その後は奥壁から羨道方向への石組みと、後込めの砂礫の盛りあげ、墳丘の盛り土がなされ、第1段階の小円墳状となる。この段階で、石室天井、羨道天井も設けられ、主体部は全て完成していたものと考えられる。

小型古墳であれば、この第1段階の墳丘のみで充分であるが、更に大型古墳とするために盛り土が行なわれる。墳丘東側においては、同じような丁寧なつきかためによって墳丘が築造され、その層は概して薄く、厚さ4～5cmのものもある。墳丘西側においては第1段階の墳丘の上に厚く盛り土を行なった後、水平の盛り土が行なわれ、標高61mあたりからは逆に主体部へむかって傾斜する層となる。

東、西側では裾を失い、十分な把握はできなかったが、北側については、明らかに葺石を意識した盛り土がなされる。第1段階の墳丘完成後、葺石を構築する位置と、第1段階の墳丘斜面を最高位とした凹レンズ状の層位となり、上段葺石のある標高60mあたりからは、主体部へ傾斜した層となる。葺石を構築する位置は、第2段階の盛り土を開始する以前に、すでに計画されていたものと考えられる。

葺石の構築に際しては、後込め礫が施された可能性もあるが、十分な調査はできなかった。更に、上段葺石と盛り土との前後関係についても、調査ができなかった。

上段葺石より北の墳丘の盛り土（第3段階の墳丘）については第2段階墳丘が全て完成してから築造されたものか、併行して築造されたかは判明しなかった。

以上の過程を整理してみると次のようになる。

	第1段階	第2段階	第3段階
石室構築			
掘り方	////		
版築	////		
石組	////		
天井	////		
墳丘築造	////	////	////
上段葺石		////	
下段葺石		////

御手長山古墳では、墳丘は第1段階から第3段階までの築造がみられたが、塚本山12号墳では、2段階の築造がみられ、富岡5号墳（注25）でも、同じような築造方法をとったものであろう。

出土遺物について

石室内の遺物は、撓乱を受けて原位置に存在したものは少なく、散乱状態で出土した。

まず装身具であるが、玉類は1個が石製丸玉の他、ガラス製丸玉、小玉であった。銅芯金張りの耳環が4対の他装身具はなく、この組み合わせは御手長山古墳西の坊主山古墳でも同様であり、周辺古墳の削平の際にも、勾玉や切子玉、管玉などの報を聞いていない。武器、武具については、大刀、鉄鏃など儀器的性格はなく、実戦用の遺物のみである。特筆するべきは銀製弭金物の出土である。弭金物は出土例が非常に少なく、岡部町八幡塚古墳（注26） 八幡観音塚古墳（注27） 行田八幡山古墳（注28）などに例があり、八幡観音塚古墳出土のものに極似している。さらに木更津金鈴塚古墳

からも出土しており、その地方を代表するような大型古墳から出土することは、その関連を求める意味で興味ある問題であろう。

馬具は、釵具、飾金具、そして轡などの断片と考えられる破片が出土しているが、埼玉県内において馬具出土の主要古墳は21例が知られている。(注29) 5世紀後半から6世紀初頭に位置づけられる行田稲荷山古墳出土例を初現とし、7世紀初頭から副葬が減少してゆく(注30)過程上に御手長山古墳は位置すると考えられる。

埴輪は調査前に出土したものを含め、家型埴輪、人物埴輪、馬などの形象埴輪や、円筒埴輪、朝顔型円筒埴輪が認められ、豊富な種類をもっていたと考えられる。墳丘は、埴輪の調査にとって、打撃的とも言える破損であったが、家型埴輪が、石室直上の攪乱層中より出土したことは、原位置が墳頂部にあったと考えられる。墳頂部に家型埴輪を配置する例は、すでに5世紀代に位置する白石稲荷山古墳にあり(注31)東柳、西柳上より8戸の家型埴輪が調査されている。赤堀茶臼山古墳でも、同様な調査例がある。(注32)

御手長山古墳出土の家型埴輪にみられる2本の柱と、その上端に設けられた、四方へ垂れ下った座蒲団状のものは、奇異な感じをさするが、接合に無理はなく、その例は、他に見ることができない。

塚本山15号墳(注33)出土家型埴輪の柱先端は、煙突状に切れているが、家屋の構造からみても古墳出土のものは、煙突とは考えられない。むしろ「うだつ」が棟につき出し、その周囲にも、屋根と同じように葺きあげ、四方へ垂れ下った座蒲団状のものを雨水よけとして設けたものであろうと考えられる。

竪穴住居を、どの程度まで写実化しているのか、また柱、うだつなどの構造の復原が、どこまで可能かという点に問題が残る。接地面の平面は正方形に近い長方形であり、竪穴住居の平面に似ており、妻の部分に出入口、もう一方に竈を設けるとすれば、まずは無理のない構造であろう。

円筒埴輪は、家型埴輪を出土した攪乱層内や、葺石付近、周堀内より出土しているが、凸帯が退化し、断面は三角状となるものが目立ち、造りも粗雑なものが多い。各埴輪のハケ目や凸帯、色調等齊一性は少なく、バラエティに富んでいる。外面基部に叩を施し、ハケ目を消しているものもあり、全般的に埴輪の末期的様相を示している。(注34)

編年の位置

以上特に角閃石安山岩を使用した石室を中心として述べてきたが、利根川流域にのみ分布し、用材を削るという技術の上からは、自然石乱石積から載石切組積へ発展する過渡期にあたるものであろうと考えられる。

石材が容易に入手でき、しかも加工が容易な角閃石安山岩によって削りの技法をみせ、互目積から切組積へと、そして更に巨石を使用した載石切組積へと技術発展したものであろうが、同じ角閃石安山岩を利用した分布圏にも多少の相違点があることに気付く。

入手し得る石材の地域性からも、ただ単に平面プランを追うことのみでは危険性をともなうことにもなろう。また角閃石安山岩を使用している古墳、あるいは使用していない古墳をも含めて、掘り方から墳丘の完成にいたる一連の築造過程の復元的究明が、ほとんどなされていない現状にあって、そ

の変遷過程を論ずることは、非常にむずかしいといわねばならない。

奥壁に片岩などの鏡石を利用する宮登古墳や東谷古墳と今回調査した、御手長山古墳や浅間山古墳のように鏡石をもたない古墳では、築造上に大きな差異があるといわねばならない。

現在の石工にも、それぞれ用材、用途による専門化があり、それらの専門集団の技術についても考慮しなければならないが、あえて武蔵国の古墳に限り、時期的変遷を考えるならば、浅間山古墳、御手長山古墳は、ほぼ同時期に併存し、一部にみられた切組積の技法は片岩を奥壁に利用する宮登古墳、平塚古墳などに生かされ、東谷古墳の精巧さを加え、7世紀後半に位置づけられる(注35)行田市八幡山古墳で、その構造と築造技術は極地にいたるものであろう。

上野国の古墳では、御手長山古墳の技法と、平面プランは宮郷8号墳で極似しており、更に綿貫観音塚古墳、堀原塚古墳とは廓張り、壁コーナーの相異点を除けば非常に近似した技法である。

ここで御手長山古墳の編年的位置を考えると、遺物の上からは、家型埴輪をもち、円筒埴輪は、末期的様相を示し、馬具は減少する傾向にあり、石室築造の技法を考えあわせて、その築造は7世紀初頭に位置づけたい。石室内部より出土の耳環から4体の追葬が考えられ、性別不明の青年期の人骨を含め、7世紀中葉頃まで墳墓としての機能をもっていたと考えたい。

御手長山古墳でみられた築造技術は、同じ角閃石安山岩使用の分布圏のなかでも、用材や技術による限定された、狭い地域のなかの地域性に左右されて築造されたと考えられ、それらが宝塚山古墳、蛇穴山古墳のような、巨石で載石切組積へ、そしてまたあるものは行田八幡山古墳のように片岩を両側壁に併用するという複雑、かつ精巧な築造技術へと発展したものであろう。

これらはまた、今後復元的調査意識をもった発掘調査によって究明されなければならない。

- 文献1 『横穴式古墳の研究』尾崎喜左衛 昭41 吉川弘文館
 文献2 『日本考古学年報 7』日本考古学協会 昭33 誠文堂新光社
 文献3 『日本考古学年報 10』日本考古学協会 昭38 誠文堂新光社
 文献4 『日本考古学年報 16』日本考古学協会 昭43 誠文堂新光社
 文献5 『日本考古学年報 17』日本考古学協会 昭44 誠文堂新光社
 文献6 『日本考古学年報 18』日本考古学協会 昭45 誠文堂新光社
 文献7 『日本考古学年報 19』日本考古学協会 昭46 誠文堂新光社
 文献8 『高崎市史 第1巻』昭44 高崎市役所
 文献9 『北群馬・渋川の歴史』昭46 同編さん委員会
 文献10 『高崎市総貫町観音塚古墳調査概報』昭43 群馬県教育委員会
 文献11 『伊勢崎市稲荷町の古墳』昭46 伊勢崎市教育委員会
 文献12 『本庄市塚合古墳調査報告書』昭44 本庄市教育委員会

- 文献13 『いぶき 10号』昭53 本庄高校考古学部
 文献14 『あゆみ 12号』昭38 深谷商業高校地歴研究部
 文献15 『いぶき 8・9合併号』昭50 本庄高校考古学部
 文献16 『埼玉県史 第1巻』昭26 埼玉県
 文献17 『資料館報 NO9』昭53 埼玉県立さきたま資料館
 文献18 『宮登古墳の発掘』昭34 鴻巣市教育委員会
 文献19 『杉戸町目沼遺跡』昭39 杉戸町教育委員会
 文献20 『第11回遺跡発掘調査報告会発表要旨』昭53 埼玉考古学会

- 注 1 『横穴式古墳の研究』尾崎喜左雄 昭41 吉川弘文館
 注 2 注1に同じ 387頁 657頁
 注 3 『国史大系 日本書紀 後篇』昭37 吉川弘文館 138頁
 注 4 注1に同じ 388頁
 注 5 「埼玉における古墳の諸様相」柳田敏司 『埼玉考古 4』昭42 埼玉考古学会
 注 6 注1に同じ
 注 7 『本庄市塚合古墳調査報告書』菅谷浩之 昭44 本庄市教育委員会
 注 8 「岡部村平塚古墳遺構調査報告」黒沢教夫『あゆみ12号』昭38 深谷商業高校地歴部
 注 9 『宮登古墳の発掘』柳田敏司他 昭34 鴻巣市教育委員会
 注10 「八幡山古墳石室実測調査概報」小川良祐他『資料館報NO9』昭53 さきたま資料館
 注11 『杉戸町目沼遺跡』早川智明 塩野博 昭39 杉戸町教育委員会
 注12 注7に同じ 11頁
 注13 注8に同じ 16頁
 注14 注11に同じ 35頁
 注15 『埼玉県史 第1巻』昭26 埼玉県
 注16 昭和52年笠ヶ谷戸遺跡、河川跡の河床から削り石が検出された。
 注17 注1に同じ 411頁
 注18 『伊勢崎市稲荷町の古墳』松村一昭他 昭46 伊勢崎市教育委員会
 注19 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 塚本山古墳群』昭52 埼玉県教育委員会
 注20 『青柳古墳群発掘調査報告書』菅谷浩之他 昭48 埼玉県遺跡調査会
 注21 『埼玉県花園村黒田古墳群』塩野博他 昭50 黒田古墳群発掘調査会
 注22 『鹿島古墳群』三友国五郎他 昭47 埼玉県教育委員会
 注23 注7に同じ 28頁
 注24 小川良祐氏御教示
 注25 『富岡5号古墳』外山和夫他 昭47 群馬県立博物館
 注26 注15に同じ 382頁

- 注27 『上野国八幡観音塚古墳調査報告』尾崎喜左雄他 昭38 群馬県教育委員会
- 注28 小川良祐氏御教示
- 注29 注21に同じ 93頁
- 注30 注21に同じ 92頁
- 注31 『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告 第三輯 多野郡平井村白石稲荷山古墳』後藤守一
他 昭11 群馬県
- 注32 『上野国佐波郡赤堀村今井茶白山古墳』後藤守一 昭8 帝室博物館
- 注33 注19に同じ 78頁
- 注34 注19に同じ 169頁
- 注35 小川良祐氏御教示



御手長山古墳（矢印）付近空中写真（約 1/10000）

（この空中写真は建設省国土地理院撮影KT-70-2X C10-21を複製した）



御手長山古墳遠景（昭和14年 栗田剛氏撮影）



御手長山古墳調査前墳丘（南西方より）



御手長山古墳 掘り方全景（西方より）



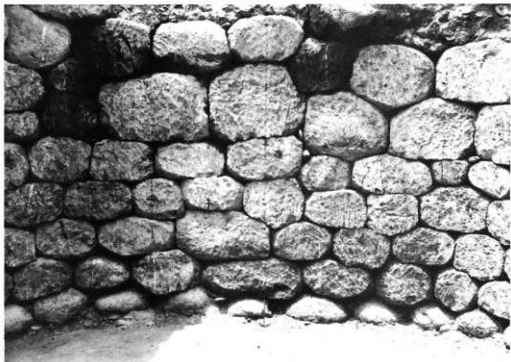
御手長山古墳 東壁下版築の状況（東方より）



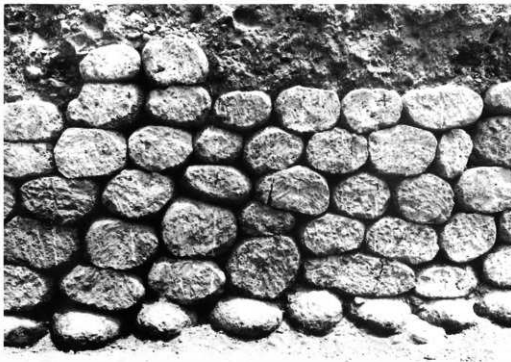
御手長山古墳 根石、掘り方状況（南方より）



御手長山古墳 石室、掘り方状況（南方より）



御手長山古墳 石室奥壁状況



御手長山古墳 石室東壁状況



御手長山古墳 石室状況



御手長山古墳 石室、墳丘断面状況（南方より）



御手長山古墳 奥壁後込め砂礫止め礫状況



御手長山古墳 奥壁後込め断面状況（西方より）



御手長山古墳 墳丘断面状況1 (北裾)



御手長山古墳 墳丘断面状況2 (北裾)



御手長山古墳 墳丘断面 状況 3 (北裾)



御手長山古墳 墳丘断面状況 4 (北裾)



御手長山古墳 葺石状況



御手長山古墳 上段葺石



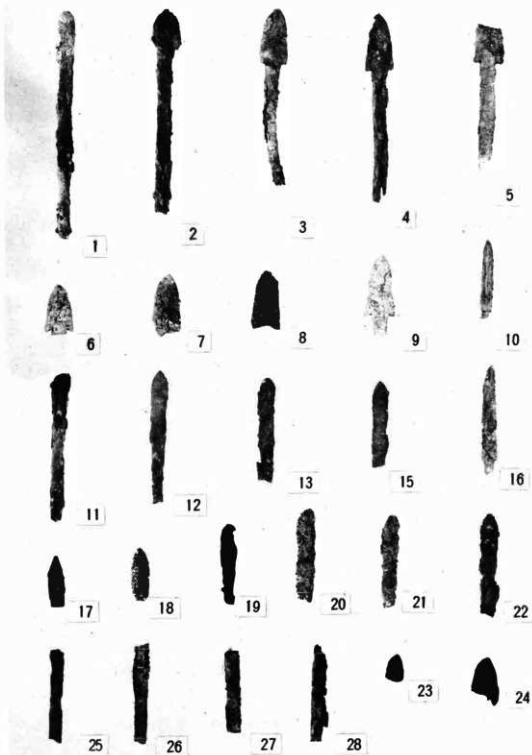
御手長山古墳 周堀状況（玦状先端部 北方より）



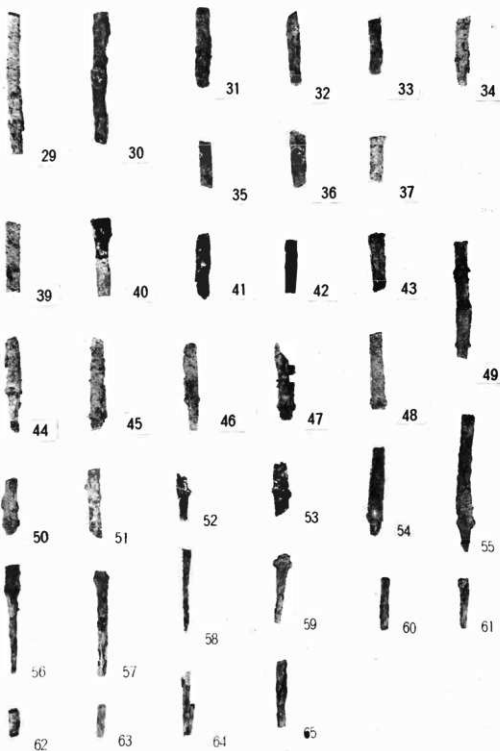
御手長山古墳 石室内遺物出土状況



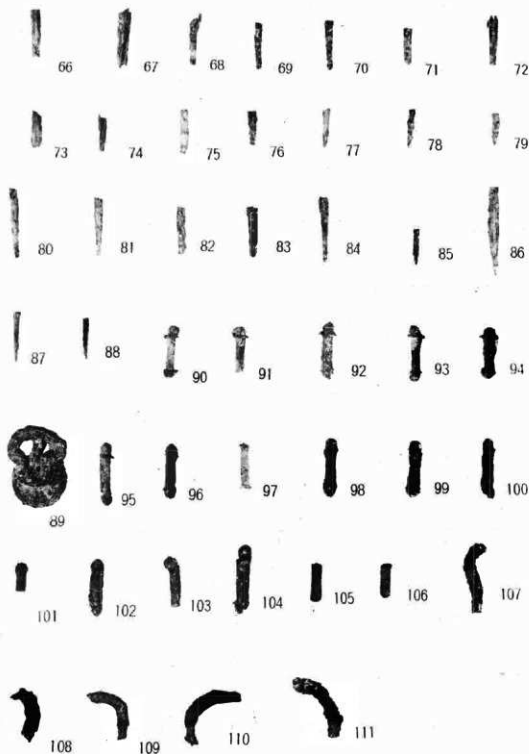
御手長山古墳 出土遺物



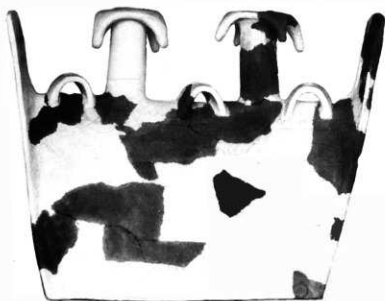
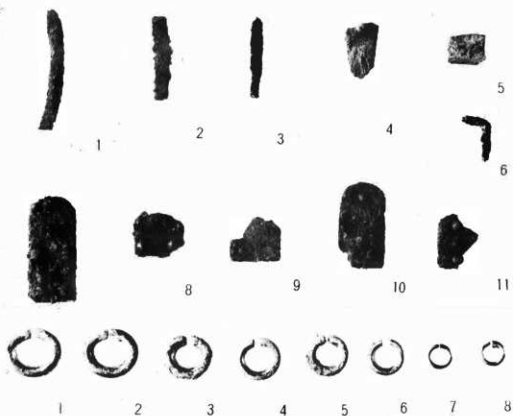
御手長山古墳 出土遺物



御手長山古墳 出土遺物



御手長山古墳 出土遺物



御手長山古墳 出土遺物

御手長山古墳および封土に
埋葬された人骨群について

新潟大学医学部第一解剖学教室

小片 保

加藤克知

平田泰治

三村一郎

皆川幸夫

松村博雄

御手長山古墳および封土に 埋葬された人骨群について

1. はじめに

本人骨群は埼玉県本庄市大字小島字上前原1697-2に所在する御手長山古墳を発掘調査した際に出土したものである。個体数はおおむね5個体を数え、これらの出土地点による内訳は、墳丘頂付近より出土の保存不良のほぼ2個体、石室のほぼ南西にあたる墳丘の裾より出土の比較的保存良好のおおむね2個体、さらに本来の石室内出土の少量の骨粉と歯を残す1個体である。便宜上、人骨には上述の出土地点順に1～5号の通し番号を付けた。なお、同一地点出土のものでは保存の良い方から番号をふった。従って、墳丘頂出土のものは第1、第2号人骨、墳丘の裾にあたる地点出土のものは第3、第4号人骨、石室内のものは第5号人骨となる。

第1、第2号人骨には平安時代末期から鎌倉時代にかけて流通したとされる北宋銭が、さらに第3号人骨には江戸時代に鋳造された寛永通宝とカワラケが伴出している。従ってここでは、第1、第2号人骨は平安ないしは鎌倉時代に、第3号人骨は江戸時代に属するものと考えた。また、第4号人骨には埋葬時期を推定させる伴出物はなく、時代は不明であるが、一応、第3号人骨の近くに出土しており、保存状態も同程度であることから江戸時代の人骨に準じて扱うことにした。

計測および観察の方法はMartin-Sallerの人類学教科書(1957, 1959)に従った。第2号人骨頭蓋の特徴については鈴木ら(1956)による中世人骨の成績と比較した。また、計測の可能な第3、第4号人骨の計測値の大小を論じる際には、原則として河越ら(1962)、加藤(1960)の鴻島無縁坂出土の江戸時代人骨と寺沢ら(1966)の台東区下車坂町出土の江戸時代人骨についての成績を比較資料とした。

本人骨群の調査研究を許可された埼玉県本庄市教育委員会をはじめ、発掘関係の諸氏に深く感謝する。

2. 人骨の出土状況

ここでは出土地点ごとに人骨の出土状況を述べることにする。

I. 墳丘頂より出土した人骨(第1号, 第2号人骨)

墳丘頂の表土下約2m 50cmの深さより出土した2個体分の人骨で、保存状態は極めて悪く、骨格の大部分が消失しているために埋葬様式の詳細についてはよくわからない。

第1号人骨では、頭蓋は右側頭部を床面におき、顔面部は右側下方を向いている。一方、下肢骨は破損が強く不明確ではあるが、両側ともほぼ平行に重なり合っており、大腿骨は体軸と想定される線よりほぼ60度右側に傾斜し、さらに、脛骨はこの大腿骨の間に約30度の角度をつくり屈曲している。

他の部分が残っていないので詳しい点は不明であるが、ここでは下肢左右屈曲位とだけ述べておこう。

第2号人骨は下肢骨のみしか残存せず、かつ腐食がかなりつよいので左右の判定も困難なほどである。両側とも膝関節を強く屈曲させていることのほかは詳しいことはわからない。

II. 墳丘の裾より出土した人骨（第3号、第4号人骨）

両人骨は墳丘の裾にあたる地点より互いに接近して出土しており、保存状態は他の地点出土の人骨に比べて良好といえよう。

第3号人骨では墓坑は円形に掘っており、埋葬様式は典型的な屈葬である。頭蓋は顔面部を胸郭に強く押しあてているが、その正中軸は本来の体軸から約60度前後左側にずれている。上肢は右側は肩関節で多少外転と回内がともない、さらに肘関節は屈曲しており、手の先端は胸郭と頭蓋の間にはさまれている。体幹は床面に平行にある。一方、下肢骨は両側とも左右対称的な姿勢をとり、股関節は多少外転をともない、大腿骨を強く屈してひき上げ、さらに膝関節を屈曲させている。この結果、両膝関節を結ぶ線上に頭蓋が位置することになり、特に、左の膝関節と頭蓋の頭頂部は接触している。このような姿勢をとるには改葬とも考えられないし、意識的に遺体を固定すること以外には考えられない。すなわち、棺内に埋葬した疑いもあり、縄のようなもので遺体をしっかりと緊縛して、形を整えたのちに墓坑内に埋納した可能性もある。

第4号人骨の出土状況については不明である。

III. 石室内より出土した人骨（第5号人骨）

本来の石室内より出土した人骨で、少量の骨粉と歯のみしか残存しない。従って、埋葬様式やその他については不明である。

3. 人骨の特徴

第1号人骨

この人骨は表面が強く腐食、剝離し、内部には深く植物の根毛が侵入している。そのため、消失している部分が多く、人骨の特徴について知り得るところは多くない。

頭蓋は顔面頭蓋の大部分が欠損し、さらに外板の広範な剝離がみられる。側面からみた前頭区廓線の膨隆と傾斜は強く、また乳様突起は破損してはっきりしないところもあるが、大きくはない。以上の所見から女性骨と考える。脱落歯が2本確認でき、咬耗度はMarínの0～1度と軽度であるが、主要頭蓋縫合の癒着がかなり進んでいることから熟年期に属するものと考えたい。

頭蓋の上面観はおそらく類円形で、後面観は砲弾状であったろう。また、頭蓋長幅示数は推定では短頭型を示す。外耳孔は左右ともだ円形で、外耳道骨種はみられない。下顎骨は下顎体の一部を残すが、観察がまったくできないほど腐食が強く、他に、寛骨、大腿骨および脛骨のいずれも一部が確認できるが、それらの特徴については不明である。

第2号人骨

人骨の多くの部分が消失しており、寛骨、大腿骨および胫骨が確認されるのみである。いずれも、骨表面が強く剝離し、骨内には多量の植物の根毛が侵入している。従って、それらの特徴については皆目不明である。ただ断定はしかねるが、寛骨の大坐骨切痕は広いようでもあり、成人期の女性骨である可能性が大きい。

第3号人骨

本遺跡出土人骨中、保存状態はもっとも良好である。頭蓋は右の側頭部と底部および下顎骨の下顎枝の一部に破損をみるが骨質は厚く、しっかりしている。体幹骨、体肢骨は破損するものが多い。

眉間隆起および眉上弓の発達が良い。また、外後頭隆起は比較的強く突出し、乳様突起も大きい。一方、前頭区廓線の膨隆は弱く、前頭結節および頭頂結節も弱い。寛骨の大坐骨切痕はせまい。以上の特徴から男性骨である。次に、頭蓋の主要縫合の癒着度はBrocaの1度で、歯の咬耗度はMartinの1～3度である。このことから熟年期に属する人骨と考えたい。

まず、頭蓋についてみると、上面観は卵円形で、後面観は砲弾形を呈している。頭蓋長幅示数は短頭型に近い中頭型を示す。側頭線は弱いようであるが、乳突上接の発達は比較的強い。側頭窩は広く、ブテリオン部の陥凹は浅い。頬骨弓は直線的で厚い。外耳孔は左がだ円形、右が円形で外耳道骨腫はみられない。ラムダ縫合には大小3個の縫合骨がみられる。

顔面頭蓋は脳頭蓋に比べて大きいのが特徴的である。推定値であるが、Kollmannの上顔面示数は上顔面高型を示し、同じくVikhowの上顔面示数は上顔面低型を示す。このことからこの人骨の中顔幅がかなり大きいことがわかる。眼窩示数は眼窩高型を示す。また眼窩口水平傾斜角は大きく、眼窩の「目じり」が下がっている。鼻示数は鼻中型を示し、梨状孔の下縁型は前鼻窩を呈する。全側面角は顎中型を示す。歯槽側面角は歯槽過前反型で、強度の「反っ歯」であることを示す。上顎歯槽示数は上顎歯槽中型を、口蓋示数は口蓋狹型を示す。

下顎骨は全体的に大きく、高さに対し幅が広いために安定感がある。下顎体は厚く、下顎隆起が左第1小臼歯下に軽度ながら認められる。筋の附着部は全体的に粗雑である。オトガイ隆起、オトガイ結節ともに弱い。オトガイ孔は第2小臼歯と第1大臼歯下に位置する。オトガイ高は江戸時代男性としては小さい方に属し、下顎体高は中等度である。下顎角幅はかなり大きいようであるが、筋突起幅は小さく、このことから下顎角は外側方へ強く張り出しているのがわかる。下顎体長は小さい。下顎枝高、筋突起高はともに小さく、逆に下顎枝幅は大きい。従って、下顎枝示数は極端に大きな値を示すことになる。筋突起は鈍く、厚い。下顎突起は太く、下顎頭も大型で、その長軸に沿って軽い一稜を形成する。下顎切痕は大きく、浅い。下顎枝角はかなり小さい。

なお、咬合様式は「ハサミ」状を呈する。上顎右と下顎左のいずれも第3大臼歯には齧歯が認められる。

頭蓋右側に前頭骨から頭頂骨にかけて大欠損部がある。その周縁は凸凹が強く、隆起および陥凹がある。これは雨水による破損とも考えられるが、何か骨病変を思わせる欠損のようでもある。その詳

細についてはここではふれないことにする。

体幹骨は破損が強い。仙骨片には第1仙椎と思われる椎体が下位の椎骨椎体と不完全に遊離しているのがみられ、腰仙移行椎を示すものであろう。さらに、破片と変形で明確ではないが、恐らく鎖骨と思われる部位に高度の骨増殖があり、キセログラフイーによる所見から典型的な変形治癒骨折のあったことが明らかとなった（第1図、第2図）。

次いで、体肢骨では、上腕骨は大きい方ではない。骨幹横断面数からみて骨幹の扁平度は小さいといえよう。橈骨、尺骨ともに「きゃしゃ」で、破損してははっきりしないが、たぶん短い方であろう。これらの骨間縁は弱い。寛骨は寛骨臼を含む腸骨と坐骨の一部が残っており、大きく、頑丈である。寛骨臼も大きく、前述したように大坐骨切痕はせまい。大腿骨は短く、細い。粗線の発達は比較的良いが、骨幹の彎曲は弱く、柱状大腿骨ではない。また、中央横断面数は江戸時代人男性としては中等度で、骨幹は前後に扁平である（第3図）。上骨幹横断面数は超広型を示す。脛骨では、その最大長は大きい方であるが、中央骨幹周は小さい。前後彎曲は弱く、捻転も弱いようである。前縁は鈍く、直線的である。骨間縁、ヒラメ筋線は比較的強い。後面の上部には縦走る弱い一稜をみるが、ほぼ骨幹中央部で自然に消失する。中央横断面数はやや大きく、横断面は鈍円三角形を呈する（第3図）。また、脛示数（Manouverier と Verneon）は厚脛を示す。腓骨は細いようであるが、詳しい特徴は破損のためによくわからない。

大腿骨と脛骨の最大長は推定値であるが、これをピアソンの式にあてはめて身長を推定してみると157.3cmとなる。

なお、この人骨の後頭部には蓄歯類による「かじりあと」が認められる。また、大腿骨の骨幹にも類似の余溝がみられるが、体肢骨の場合、骨表面が腐食しており、はっきりと「かじりあと」と判定することは困難である。

第4号人骨

保存状態はそれほど良好とはいえない。すなわち、骨の表面が全体的に腐食しており、脳頭蓋には土圧のためと思われる軽度の変形がみとめられる。頭蓋は頭蓋底と左側頭部の大部分が、さらに下顎骨の左下顎枝の全部が破損している。また、体幹骨、体肢骨も種々の程度で破損しており、詳細な特徴の知り得ないものが多い。

頭蓋は全体的に小さく、「きゃしゃ」で、前頭骨の彎曲が強い。眉間およびこれに続く眉上弓は弱く、さらに外後頭隆起の突出も弱い。乳様突起はその根部が外側方へ多少膨隆しているが、大きい方ではない。寛骨の大坐骨切痕は広い。これらの特徴から女性骨である。頭蓋の主要縫合はそれほど進んでいるとは思われないが、歯の咬耗度はMartinの1〜3度を示す。これらのことから熟年期のものと考えたい。

頭蓋をみると、その上面観は卵円形で、後面観は砲弾形である。頭蓋長幅示数は中頭型を示す。側頭縁、乳突上縁は弱い。外耳孔はだ円形で、外耳道骨種はみられない。下顎窩は深い。顔は一見すると面長にみえるが、Virchowの上顔面示数は推定値で上顔面低型を示し、多少「すづまり」の傾向を有する。鼻示数は鼻低型を示すが、眼窩示数は眼窩高型で横分眼窩が大きくみえる。梨状孔の下縁型

は小児型を呈する。眼窩口水平傾斜角の推定値は大きく、眼窩の「目じり」が下がって見える。歯槽側面角も実測できないが、歯槽突起の前突が強いようであり、「反つ歯」の傾向を有している。また、上顎歯槽示数は上顎歯槽広型を、口蓋示数は口蓋長型を示す。

下顎骨は低くかつ狭いが、筋の付着部は比較的粗造である。オトガイ高と下顎体高は同じ値をとるが、いわゆる「ゆりいす」型ではない。下顎体高厚示数は大きく、「きゃしゃ」な下顎骨のわりには下顎体がかなり厚い。下顎隆起はみられない。下顎枝示数は大きく、このことから下顎枝は相対的に広く、低いことがわかる。下顎枝角は江戸時代人女性としては中等度であろう。オトガイ孔は第2小臼歯下に位置する。

上顎切歯は磨耗してははっきりしないが、「シャベル」型のものである。咬合様式は「ハサミ」状を呈する。また、上顎左第2大臼歯には齶歯が認められる。

体幹骨、体肢骨は一般に「きゃしゃ」である。上腕骨は破損しているが、細く短いようである。肘頭窩はかなり深い。骨幹中央部はかなり扁平に傾く。筋付着部の様子は腐食のためよくわからない。桡骨、尺骨ともに短小であるが桡骨の桡骨粗面の膨隆は比較的強い。また、尺骨上骨幹の前後の扁平度はかなり弱い。

次いで、下肢骨をみると、寛骨は左の寛骨臼とその周辺部が残っており、上述したごとくその特徴は女性的である。自由下肢骨はいずれも細く、短い。大腿骨の骨幹の前彎は多少強いようであるが、骨幹中央部は前後に扁平で（第3図）、粗線の発達も悪い。すなわち、柱状大腿骨ではない。また、上骨幹横断示数は超広型を示し、上骨幹もかなり前後に扁平である。脛骨では、ヒラメ筋線が鞍状に発達する。前縁は直線的で鈍く、後面に第4稜はみられず、中央横断面は鈍円三角形を呈する（第3図）。また、脛示数（Manourerir と Vernean）は厚脛を示す。腓骨は前縁、骨間線および内側稜ともに鈍いが、詳しい特徴は破損のためよくわからない。

なお、推定値ではあるが、左の桡骨最大長からピアソンの式に従って身長を算出してみると、147.7cmとなる。

第5号人骨

保存状態は極めて悪く、少量の骨粉と歯のみを残す。残存歯はいずれも永久歯で、上顎左の第2大臼歯、右の大歯および第2大臼歯、下顎左の第2小臼歯と第1大臼歯および右の第2大臼歯と思われる合計6本で、重複歯もなくおそらく同一個体のものであろう。咬耗度は Martin の 0~2 度と軽度で、青年期に属するものと考えられる。性別は不明である。

4. 考察

御手長山古墳および封土より出土した人骨はおおむね 5 個体分で、そのうち本来の石室内より出土したのは性別不明の青年期のものと思われる 1 個体分である。残りは墳丘頂の表土下より成人期女性人骨と思われる 2 個体、さらに墳丘の裾にあたる地点より成人期の男性と女性人骨各 1 個体計 2 個体が出土した。墳丘頂出土の人骨には平安時代末期から鎌倉時代にかけて流通したとされる北宋銭が、

墳丘の裾出土の人骨には江戸時代に鑄造された寛永通宝とカワラケが伴出されており、このことから、これら2地点出土の人骨はそれぞれ平安ないし鎌倉時代および江戸時代に埋葬されたと考えられることができる。つまり、本古墳築造以後この周辺は古くから墓地として利用されていたことがわかる。

石室内より出土した人骨はその大半が消失し、少量の骨片と6本の歯のみが残っていない。歯を観察した限りでは、これらは同一個体に属する可能性が高い。このように人骨の大部分が消失してしまったことは、長い間の風化によると考えられる。

人骨の出土状況から埋葬様式について考えてみると、平安ないし鎌倉時代に属すると考えられる人骨では、少なくとも下肢は左右屈曲位をとるが、人骨の大部分が消失しているためこれ以上のことはわからない。一方、比較的保存が良く、出土状況がよくわかる江戸時代男性人骨では、典型的な屈葬であり、これは人為的に埋葬時の姿勢を整えた可能性が大きい。

次に、人骨の特徴について概観してみる。鎌倉時代に入ると、頭蓋は長頭型に傾くものが多くなることはよく知られた事実であるが、平安末期から鎌倉時代に属する女性骨で、頭蓋の残存している1例では、逆に短頭型に傾いている。江戸時代の2個体はともに中頭型を示す。ちなみに、この時代では中頭型を示すものが多い。また、この2個体の人骨は歯槽突起の前突が強く、いわゆる「反つ歯」である。さらに、Virchowの上顔面示数は上顔面低型を示し、顔は「すづまり」の傾向がある。多分、江戸時代人としては一般的な顔であつたらう。下肢骨をみても、大腿骨の中央骨幹が前後に扁平で、胫骨の中央横断面が三角形を呈しているなど、これらは近代的な形質である。また、身長についてみると、男性骨で157.3cm、女性骨で147.7cmと推定される。平本(1972)は身長の時代的変化について検討し、身長は古墳時代以後徐々に低下し、江戸時代から近代初期で最低になると述べているが、本例での推定身長は江戸時代人としてほぼ平均的な値を示すといつてよい。

病的な所見として、江戸時代に属する男性(第3号人骨)の頭蓋には右側の前頭骨から頭頂骨にかけての大欠損部があり、その周縁は凸凹が強く、隆起および陥没が認められる。何らかの病変を疑わせるが、雨水などによる破損とも考えられる。古病理学的にみて興味あるところであるが、ここでは詳しい論及はひかえておく。さらに、同一個体で、恐らく鎖骨と思われる部位に顕著な骨増殖を伴う変形治療骨折が認められ、これはキセログラフィーの所見によっても確認された。

5. 要約

1. 御手長山古墳および封土から出土した人骨はおおむね5個体分である。
2. うち、本来の古墳石室内より出土した人骨は性別不明の青年期に属すると思われる1個体分である。他はいずれも成人期の人骨で、墳丘頂地点の2個体分と墳丘の裾にあたる地点より出土の2個体分である。
3. 墳丘頂地点出土の人骨は平安ないし鎌倉時代に、墳丘の裾地点出土の人骨は江戸時代に属する。
4. 保存状態は江戸時代に属する人骨を除いて極めて悪い。
5. 出土状況の明確な江戸時代男性の埋葬様式は典型的な屈葬である。
6. 頭蓋長幅示数は平安ないし鎌倉時代の1個体で短頭型、江戸時代の2個体で中頭型を示す。

7. 江戸時代人に属する人骨の顔は「反っ歯」で、「寸づまり」の傾向があった。これは江戸時代の一般的な特徴といえる。咬合型は「ハサミ」状である。体肢骨も近代的な特徴を有し、「きゃしゃ」で、大腿骨上骨幹の横断示数は超広型を、脛骨の脛示数は厚脛を示す。

8. 江戸時代に属する男性および、女性人骨の推定身長は、それぞれ157.3cm、147.7cmで江戸時代人としては、ともに平均的である。

9. 江戸時代の男性人骨の下顎骨には下顎隆起がみられる。頭蓋の右側部には病変を疑わせる欠損部が認められるが、これは物理、化学的要因によるとも考えられる。また、鎖骨と思われる部位に典型的な変形治癒骨折が認められ、キセログラフィーによる所見からも確認された。

参考文献

- 1) 森田茂、河越逸行 「湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究補遺」 東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集、第23輯、1962。
- 2) 河越逸行、佐藤亨、村木毅 「湯島無縁坂出土の江戸時代人下顎骨の人類学的研究」 東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集、第23輯、1962。
- 3) 加藤守男 「江戸時代人大腿骨の人類学的研究」 解剖学雑誌 第35巻、4号、1960。
- 4) 寺沢俊男、河越逸行、森田茂 「東京都台東区下車坂町から出土した江戸時代人脛骨の人類学的研究」 解剖学雑誌、第41巻、3号、1966。
- 5) 日本人類学会編 「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」 岩波書店、1956。
- 6) 平本嘉助 「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化」 人類学雑誌、第80巻、3号、1972。

第1表 頭蓋の主要な計測値

	第3号人骨 (男性)	第4号人骨 (女性)		第3号人骨 (男性)	第4号人骨 (女性)
1 脳頭蓋最大長	175	174 (推)	69 ¹⁾ 下顎体高	29	29
8 脳頭蓋最大幅	139	130 (推)	69 ³⁾ 下顎体厚	16	13
9 最小前頭幅	90	85	70 下顎枝高	60	53 (R)
11 両耳幅	130	—	70 ¹⁾ 筋突起高	63	—
20 耳ブレグマ高	116	108(推)(R)	71 下顎枝幅	40	29 (R)
32 ¹⁾ 前頭傾斜角	52	—	72 全側面角	81	—
41 側頭長	73	73(推)(R)	73 鼻側面角	87	—
43 上顔幅	101 (推)	97	74 歯槽側面角	67	—
43 ¹⁾ 内眼窩幅	93	90	75 鼻骨側面角	64 (推)	—
44 両眼窩幅	97	94	78 ²⁾ 眼窩口水平傾斜角	18	14 (推)
45 頬骨弓幅	137 (推)	—	79 下顎枝角	113	128 (R)
46 中顔幅	113 (推)	92 (推)	79 ^{1a)} 下顎側面角	81	71
48 上顔高	76	66	1/8 頭蓋長幅示数	79.4	74.7(推)
51 眼窩幅	42	41	20/1 頭蓋長 耳ブレグマ高示数	66.3	—
52 眼窩高	37	35	20/8 頭蓋幅 耳ブレグマ高示数	83.5	—
54 鼻 幅	26	24	1+8+20/3 頭蓋モドウルス(変)	143.3	—
55 鼻 高	54	47	48/45 上顔示数 (コルマン)	55.5(推)	—
60 上顎歯槽長	56	44	48/46 上顔示数 (ウイルヒョウ)	67.3(推)	71.7(推)
61 上顎歯槽幅	62	56	52/51 眼窩示数	88.1	85.4
62 口蓋長	47	42 (推)	54/55 鼻示数	48.1	51.1
63 口蓋幅	32 (推)	34	61/60 上顎歯槽示数	110.7	127.3
65 ¹⁾ 筋突起幅	94	—	63/62 口蓋示数	68.1(推)	81.0(推)
66 下顎角幅	108 (推)	—	68/66 (大森氏)下顎角に おける幅長示数	67.5(推)	—
68 下顎骨長	71 (推)	—	69 ³⁾ /69 ¹⁾ 下顎体高厚 示数	55.1	44.8
69 オトガイ高	32	29	71/70 下顎枝示数	66.7	54.7(R)

(注) 計測項目の番号はMartin による。左右あるものは左側を計測し、破損しているものは右側 (R) を計測した。(推)は推定値であることを示す。単位は長さがmm、角度が度。

第2表 体肢骨の計測値

	第3号人骨 (男性)	第4号人骨 (女性)
上腕骨		
5 中央最大幅	20	19
6 中央最小幅	16	14
7a 中央周	59	52
6/5 骨幹横断示数	80.0	73.7
橈骨		
1 橈骨最大長	—	189 (推)
尺骨		
1 尺骨最大長	—	198 (推)
11 尺骨前後径	12	10
12 尺骨横径	16	14
11/12 骨幹横断示数	75.0	71.4
大腿骨		(右側)
1 大腿骨最大長	403 (推)	—
6 骨幹中央矢状径	24	21
7 骨幹中央横径	27	22
8 骨幹中央周	80	68
9 骨幹上横径	31	27
10 骨幹上矢状径	23	18
6/7 骨幹中央横断示数	88.9	95.5
10/9 上骨幹横断示数	74.2	66.7
脛骨		(右側)
1a 脛骨最大長	334 (推)	—
8 中央最大径	26	21
8a 栄養孔の高さにおける最大径	31	24
9 中央横径	21	18
9a 栄養孔の高さにおける横径	23	18
10 骨幹周	72	61
9/8 中央横断示数	80.8	85.7
9a/8a 脛示数	74.2	75.0

(注) 計測項目の番号はMarinによる。原則として左側を計測したが、右側の場合は欄上に(右側)と明記した。(推)は推定値であることを示す。計測値の単位はmm。骨端部が破損しているものについては、計測部位を推測により決定した。



第1図 鎖骨の変形治癒骨折
(第3号人骨、男性、熟年)



第2図 同左のキセログラフイー像
明らかな変形治癒骨折が確認できる。



大腿骨(右)



脛骨(左)

第3号人骨(男性)



大腿骨(右)



脛骨(右)

第4号人骨(女性)

- 第3図 第3号、第4号人骨(江戸時代)の大腿骨および脛骨骨幹の中央横断面(実物大)
ともに大腿骨の骨幹中央部は前後に扁平で、脛骨の骨幹は後面に一稜がみられず、中央横断面は鈍円三角形を呈する。
図の上方が前面を示す。



第4図 第3号人骨（江戸時代、男性、熟年）頭蓋の前面観



第5図 第3号人骨頭蓋の左側面観



第6図 第4号人骨（江戸時代、女性、熟年）頭蓋の前面観



第7図 第4号人骨の右側面観 (注) 土圧による頭蓋の一部変形のため本写真では下顎頭が顎関節窩に正しく納まっていない。



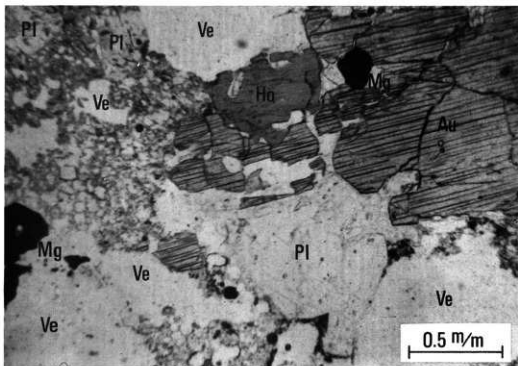
第8図 御手長山古墳1号人骨出土状況



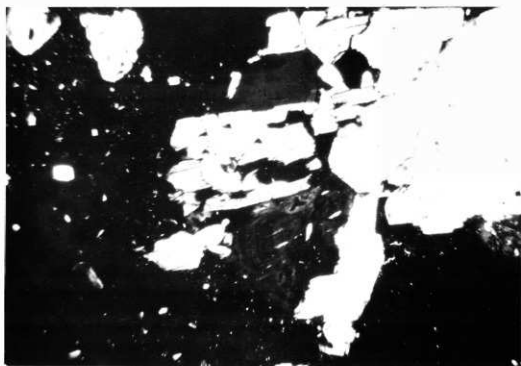
第9図 御手長山古墳2号人骨出土状況



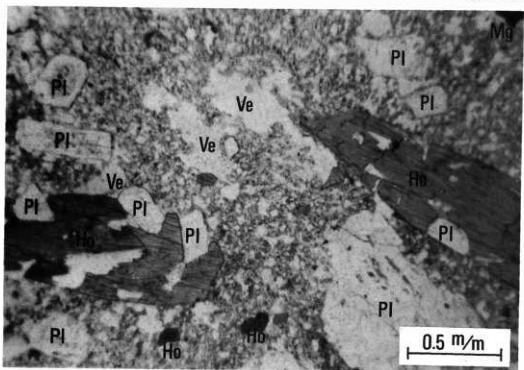
第10図 御手長山古墳3号人骨出土状況



A 平行ニコル



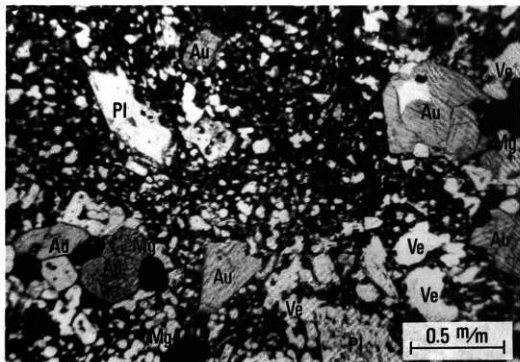
B 十字ニコル



A 平行ニコル



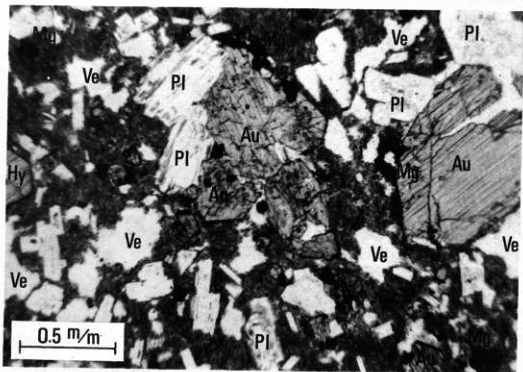
B 十字ニコル



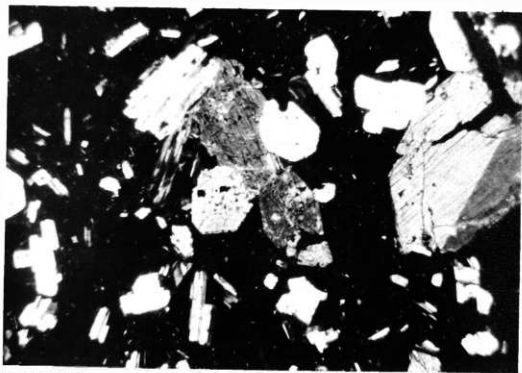
A 平行ニコル



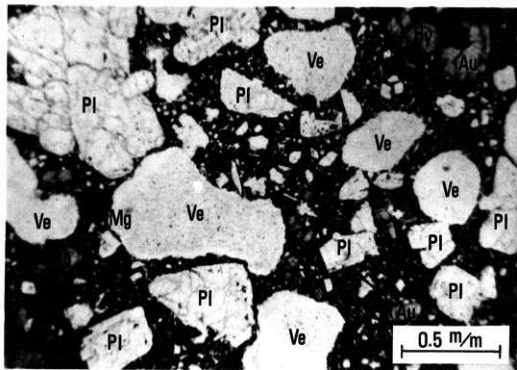
B 十字ニコル



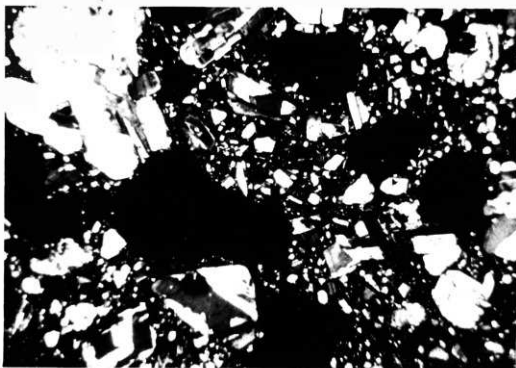
A 平行ニコル



B 十字ニコル



A 平行ニコル



B 十字ニコル

御手長山古墳の石室に
使用されている石材について

埼玉県教育局文化財保護課
本間岳史

御手長山古墳の石室に使用 されている石材について

1. 古墳の立地

御手長山古墳は、国鉄高崎線本庄駅北西2.45km、標高約60mの台地上に位置する。この台地は本庄台地と呼ばれ、地質学的には立川面に対比されている。台地は北東に向かって次第に標高を減じ、元小山川によって北東縁を限られる。元小山川の北東側は、標高45～50mの沖積低地となる。

2. 調査の概要

今回の石材調査では、石室床面より上に積み上げられている奥壁及び側壁を構成する岩石約140個について、現地で肉眼観察を行い、また、このうち代表的と思われる岩石5種(註1)を選んで薄片を作製し、偏光顕微鏡による観察を行った。

奥壁及び側壁を構成する岩石は、直径15～25cm、長さ30～50cm程度の丸味を帯びた安山岩礫である。奥壁上部には特に大きな礫が用いられており、直径50cmに達するものもみられる。いずれも多孔質で軟かい。これらの礫は、石室の内側に面した部分は平面に近く削られており、表面にはノミ状の削り跡が残っている。礫の間隙には、結晶片岩類の岩片等を埋めて補強してあるが、石室の重みにより、垂直方向に引張性の割れ目を生じている礫がいくつか認められる。

これらの岩石は、90%以上(礫の個数比)が淡灰色の角閃石安山岩質の軽石である。この岩石は、角閃石の斑晶が肉眼的に容易に確められるものであり、県下で現在石室を復元作業中の「八幡山古墳」(行田市)の側壁に用いられている安山岩と、同相・同質である。このほか、奥壁西コーナー上部や西壁の一部等に、黒色ないし暗灰色の輝石安山岩質の溶岩礫、赤褐色の輝石安山岩質の岩滓(スコリア)が散見される。側壁上部の持送りの強い部分に使われたと思われる岩石は、河原石と推定される細長い亜円礫(直径10～20cm、長さ30～60cm)を用いている。石質は、閃緑岩・安山岩質溶岩・硬砂岩・砂岩・石英塊等多様であるが、いずれも堅硬な岩石である。

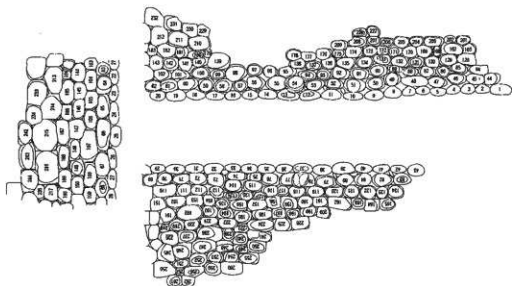
3. 石材の種類と特徴

調査時点で石室床面上に露出していた岩石は、合計141個(No.104～109, 128～262)で、内訳は、黒色複輝石安山岩質溶岩が8個(No.135, 177, 192, 196, 221, 238, 245, 260)、暗灰色複輝石安山岩質溶岩が1個(No.256)、赤褐色普通輝石安山岩質岩滓(スコリア)が1個(No.244)、残りの131個が淡灰色角閃石安山岩質軽石であった。

その後、床面をさらに掘り下げた結果、新たに121個の岩石が露出し、No.46が赤褐色普通輝石安山岩質岩滓(スコリア)であるほかは、すべて淡灰色角閃石安山岩質軽石であることがわかった。したがって、総計262個の岩石のうち、淡灰色角閃石安山岩質軽石が251個で全体の95.8%を占め、黒色複輝石安山岩質溶岩が8個で3.0%、暗灰色複輝石安山岩質溶岩が1個で0.4%、赤褐色普通輝石安山岩質岩滓(スコリア)が2個で0.8%という結果になった。

以下、それぞれの岩石の特徴について述べる。

御手長山古墳石室石組み番号付定図



(1) 淡灰色角閃石安山岩質軽石 (図版1及び2参照)

ア 肉眼的特徴

軽石は、角閃石の斑晶を特徴的に含むもので、発泡が顕著である。気孔は、つぶされてレンズ状を呈するものもある。いずれも軽量で軟かく、加工が容易である。これらの軽石には、発泡が顕著できわめて軽いもの(図版1)と、若干発泡が悪く、やや重いもの(図版2)とがあり、また直径0.5～1cm程度の安山岩の亜角礫をわずかに包含するものも一部みられる。淡緑色を呈し、変質していると思われるものもいくつか認められるが、総じていずれも新鮮で、淡灰色を呈する。角閃石の斑晶は、長径3%前後のものが多く、大きな結晶は長径1cmに達するものも認められる。

イ 顕微鏡的特徴

鏡下では、斑状組織・軽石状組織を呈し、発泡が顕著に認められる。気孔は直径0.05%前後のものが多く、斑晶は、斜長石、角閃石、紫蘇輝石、普通輝石、磁鉄鉱からなる。量比は、およそ次のとおりである。

斜長石>角閃石>紫蘇輝石≒普通輝石>磁鉄鉱

(角閃石:紫蘇輝石:普通輝石≒7:3:2)

斜長石は、自形～半自形の中性長石ないし曹灰長石で、虫喰い状の結晶が多く、穴の部分や結晶の周縁部などが緑泥石によって交代され始めているのがみられる。アルバイト双晶、カールスバード双晶、カルバイト・カールスバード複合双晶、累帯構造が認められる。鏡下で最大の結晶は、径2.1

×1.6%である。角閃石は、自形～半自形で褐色を呈し、内部に斜長石や磁鉄鉱の小結晶を包含するものがある。また、カールスバード双晶、バベノ双晶、弱い累帯構造の認められるものがある。鏡下で最大の結晶は、径5.0×1.6%である。紫蘇輝石は、自形～半自形で、割れ目を生じているものが多い。鏡下で最大の結晶は、径2.2×1.1%である。普通輝石は半自形で、やはり割れ目を生じているものが多く、大きな結晶には内部に斜長石・磁鉄鉱・角閃石の小結晶等を包含するものがある。鏡下で最大の結晶は、径2.4×1.2%である。

石基は多孔質で、火山ガラス>斜長石>磁鉄鉱>紫蘇輝石等からなる。斜長石は、長径0.03%程度の針状結晶が多い。磁鉄鉱は、直径0.01%程度のものが非常に多い。

(2) 黒色複輝石安山岩質溶岩 (図版3参照)

ア 肉眼的特徴

黒色で硬く、有色鉱物は判別しにくい。わずかに、径2×2%程度の輝石の結晶が認められる。斜長石は一面に認められ、径2×2%程度の結晶が多い。発泡孔(気孔)は不規則にあっている。

イ 顕微鏡的特徴

鏡下では、岩質・斑状組織を呈し、一面に小さな発泡孔(気孔)を生じているのが認められる。気孔は直径0.1%前後のものが多い。斑晶は、斜長石が圧倒的に多く、次いで普通輝石、紫蘇輝石、磁鉄鉱からなる。量比は、およそ次のとおりである。

斜長石>普通輝石≒紫蘇輝石>磁鉄鉱

(普通輝石:紫蘇輝石≒4:3)

斜長石は、自形～半自形の曹灰長石で、虫喰い状の結晶が多く、穴の部分には緑泥石ができています。アルバイト双晶、カールスバード双晶、アルバイト・カールスバード複合双晶、累帯構造が認められる。鏡下で最大の結晶は、径1.6×1.2%である。普通輝石は、半自形の短柱状ないし柱状結晶で、チタンを含むと思われるものがわずかにみられる。内部に斜長石の小結晶を包含するものや、周囲に磁鉄鉱を伴っているもの、バベノ双晶を示すもの等が認められる。鏡下で最大の結晶は、径0.6×0.6%である。紫蘇輝石は、自形性が強く、短柱状の結晶が多い。鏡下で最大の結晶は、径1.0×0.4%である。

石基は非常に多孔質で褐色を呈し、火山ガラス>斜長石>紫蘇輝石>普通輝石>磁鉄鉱等からなる。

(3) 暗灰色複輝石安山岩質溶岩 (図版4参照)

ア 肉眼的特徴

暗灰色で硬く、径2×3%程度の輝石の結晶が認められる。斜長石の結晶は一面に認められ、径3×3%に達するものがある。発泡孔(気孔)は、つぶされてレンズ状にのび、配列に方向性がみられる。

イ 顕微鏡的特徴

鏡下では、斑状組織を呈し、不規則な形の発泡孔(気孔)が若干認められる。斑晶は、斜長石が圧倒的に多く、次いで普通輝石、紫蘇輝石、磁鉄鉱からなる。量比は、およそ次のとおりである。

斜長石>普通輝石>紫蘇輝石>磁鉄鉱

(普通輝石:紫蘇輝石≒2:1)

斜長石は、自形性がきわめて強い曹灰長石ないし亞灰長石からなり、虫喰い状のものには緑泥石による交代が認められる。径0.2~0.4%程度の結晶が多く、視野に一面に存在する。鏡下で最大の結晶は、径1.4×1.2%である。アルバイト双晶、カールスバード双晶、アルバイト・カールスバード複合双晶、累帯構造が認められる。普通輝石は、半自形~自形で、割れ目を生じた結晶が多く、斜長石中に一部とりこまれているものもある。チタンを含むと思われるものが、10%強認められる。パペノ双晶、カールスバード貫入双晶を示すものが認められる。鏡下で最大の結晶は、径1.2×0.8%である。紫蘇輝石は、自形で短柱状のものが多く、結晶は、径0.2×0.1%程度で小さい。X字状のカールスバード貫入双晶を示すものが認められる。

石基は、淡褐色~褐色を呈し、火山ガラス>斜長石>磁鉄鉱>普通輝石等からなる。斜長石は、長径0.03%前後の針状結晶がびっしりできていて、磁鉄鉱は、直径0.01%程度の丸味を帯びたものが多い。

(4) 赤褐色普通輝石安山岩質岩澤 (図版5参照)

ア 肉眼的特徴

きわめて多孔質(一面に大きな発泡孔を生じ、カルメ焼き状)で硬く、気孔の内部は赤褐色~黄土色を呈し、全体としては赤味を帯びた雑色を呈する。斑晶は大きく、径4×4%の斜長石の結晶や径5×4%の輝石の結晶が認められる。

イ 顕微鏡的特徴

鏡下では、斑状組織・岩滓状組織を呈し、発泡が顕著に認められる。気孔は丸味を帯びており、直径1%以上のものも多い。斑晶は、斜長石が圧倒的に多く、斑晶の80~90%を占める。次いで、普通輝石・紫蘇輝石がみられる。量比は、およそ次のとおりである。

斜長石>普通輝石>紫蘇輝石

(普通輝石:紫蘇輝石=4:1)

斜長石は、自形~半自形の中性長石で、3~5結晶が十字形ないし放射状に集合し、全体として丸味を帯びた集合結晶をつくっているものが多い。虫喰い状の結晶は少なく、緑泥石による交代もわずかである。カールスバード双晶が多く、アルバイト・カールスバード複合双晶、累帯構造が認められる。アルバイト双晶は、比較的少ない。集合結晶は、径2×2%程度のものがかなりみられる。普通輝石は、半自形~他形で、径0.1×0.05%以下の小さな結晶が多い。パペノ双晶を示すものが認められる。鏡下で最大の結晶は、径1.0×1.0%である。紫蘇輝石は、ごく小さく(最大の結晶で、径1.0×0.3%)、他形を示すものが多い。

石基は、長径0.02~0.05%程度の自形性の強い斜長石(方形ないし短柱状)や、半自形で丸味を帯びた普通輝石等によって、モザイク状に埋められており、結晶質である。量比は、斜長石>普通輝石>磁鉄鉱>紫蘇輝石で、これらの結晶の間隙は変質鉱物によって汚染され、暗色を呈する。発泡はきわめて顕著で、岩滓状を呈する。気孔は円形~不定形で、配列には方向性はみられない。

4. 石材の供給源について

前述したように、御手長山古墳の石室を構成する岩石は、側壁上部に使われたらしい河原石と、間

隙を埋めているごく小さな結晶片岩片を除くと、いずれも安山岩質の火山噴出物（軽石、スコリア、溶岩）からなる。これらの岩石は、ほとんど変質しておらず、新鮮であるので、明らかに第四紀火山の産物であるが、県内に第四紀の火山が存在しないことを考えると、その供給源は、県外に求めなければならない。

近隣県で第四紀に角閃石－輝石安山岩質の活動があった火山は、榛名・赤城・浅間などの諸火山である。これらの火山のうち、角閃石安山岩質軽石の著しい噴出があったものは、榛名山で、6世紀末の二ツ岳の噴火による軽石流と降下軽石の噴出が知られている。この活動は、榛名山の最も新しい活動で、粘りけの強い中性－酸性のマグマは、大爆発をおこすに十分なエネルギーをもっていたに違いない。以下、榛名火山の生立ちを簡単にたどってみよう。

榛名火山の活動は、今から約40万年前に始まり、成層火山の形成期、陥没とカルデラの形成期、中央火口丘・寄生火山の形成期を経て、現在の山体がつくられたと推定されている（註2）。

成層火山の形成期には、多量の火山灰や軽石の噴出と溶岩の流出とがくり返され、高いコニーデ状の山体がつくられた。当時の榛名山は、今は見ることのできない美しい姿を呈していたに違いない。しかし、この優美な姿も長くは続かず、マグマの上昇の際に多数発生した高角の割れ目にそって、たび重なるエネルギーの放出によって圧力が低下した山体の中央部が何度か陥没をおこし、カルデラが形成された。この結果、外輪山として残された成層火山の名残が、三ツ峠、掃部ヶ岳、居懸岳等の山々である。これらの山体を形づくる岩石は、比較的粘性の低い輝石安山岩質の噴出物である。石室の一部にみられる輝石安山岩質のスコリアや溶岩は、おそらく、これらの岩石に由来するものであろう。

その後、噴火の中心が次第に東方へ移動するにしたがい、粘性の高いマグマの活動がとってかわり、相馬山、水沢山といった溶岩円頂丘（寄生火山）が姿を現わし、カルデラ中央部でも、榛名富士や蛇ヶ岳が形成された。この活動は、ひきつづき東方でも、降下軽石→軽石流→溶岩噴出の順序で激しくおこり、その結果、二ツ岳の溶岩円頂丘が形成された。上空に噴き上げられた軽石は、折からの偏西風によって北東方向へ運ばれ、尾瀬や日光にまで達した。一方軽石流は、榛名火山の東斜面を放射状に流れ下り、利根川支流の吾妻川まで達したのである。

御手長山古墳の石室をつくる角閃石安山岩質の軽石は、おそらく、この二ツ岳の軽石流や降下軽石（ごく火口付近の）のものを用いていると思われる（註3）。紡錘状の軽石は、採取・運搬・加工・築造に都合がよかったのであろう。しかし逆に、長い年月の間には、石室自身の重みにより割れ目が次第に発生してきているように、強度の点では、溶岩や花崗岩類、あるいは古生層起源の堆積岩類等より劣るのである。すなわち、遠距離の運搬労力や加工の手間さえいとわなければ、後者の方が石材としてすぐれているといえるのである。この辺の考察になると、筆者の能力及ばない内容となるので立ち入ったことは言えないが、このことは、被葬者の地位を推察するひとつの資料にはなるかもしれない。いずれにしろ、今後の発掘調査等により、本庄、深谷、熊谷、あるいは加須、羽生といった、古利根川流域の古墳の石材の資料が集積されてくれば、この辺の事情は、かなり解明できるに違いない。

5. おわりに

埼玉県下の古墳の石室の石材について論じたものに、柳田（1967）「埼玉における古墳の諸様相」があり、古墳を築成する際、その場所に近いところの材料を利用した場合が多いとの指摘がなされている。これによると、利根川や古利根川流域の古墳は安山岩類、荒川上流や小川町付近の古墳は緑泥片岩類、荒川中～下流域や元荒川流域の古墳は凝灰岩類をそれぞれ用いているとされている。このことは、埼玉県の地質分布と群馬県の地質分布、また河川による侵食・運搬・堆積作用の結果をよく反映したものと見える。

しかし、県下の個々の古墳の石材について論じたものは、これまで例が少ないのである。石材の供給源の追究は、古墳築造の年代や工法、被葬者の地位等の解明につながる重要な問題をかかえているにもかかわらず、考古学と地質学のどちらの分野からもなおざりにされてきた感が強い。科学的究明は、どちらの分野も相当腰をすえてかかる必要があるが、少なくとも、地質学の分野でやらなければならないことは、地質図に基づいて原産地を推定し、現物同志（石室の岩石と露頭）を照合して検証することであるので、データの集積を待って、稿を改めたいと考えている。

最後に、石材鑑定のお便りとお言葉をかけていただいた本庄市教育委員会をはじめ、発掘関係者の方々に深く感謝する。

参 考 文 献

- (1) 木崎喜雄・野村哲・中島啓治編（1977）：群馬のおいたちをたずねて（下）、上毛新聞社出版局、P 1-76。
- (2) 野村哲編（1978）：日曜の地学〔5〕、群馬の地質をめぐって、築地書館、P 43-58。
- (3) 尾崎喜左雄（1966）：横穴式古墳の研究、吉川弘文館
- (4) 柳田敏司（1967）：埼玉における古墳の諸様相、埼玉考古、第5号、埼玉考古学会、P 1-23。

註1 顕微鏡観察の結果、4種類であることがわかった。

註2 木崎ほか「群馬のおいたちをたずねて（下）」より。

註3 赤城火山にも、外輪山に輝石安山岩、中央火口丘に角閃石安山岩が知られているが、軽石流の分布や水系等からみて、石材の採取・運搬には不適當であったと思われる。

石室使用岩石の

偏光顕微鏡写真について

石室の奥壁及び側壁を構成する岩石約 140個（調査時点で石室床面上に露出していた礫）のうちから、代表的と思われる岩石5種を選んで薄片を作製し、偏光顕微鏡による観察を行った。

図版1～5は、これらの岩石の顕微鏡写真である。それぞれ上図が平行ニコル、下図が十字ニコルの状態で撮影したものである。

凡 例	H o —— 角 閃 石
	H y —— 紫 蘇 輝 石
	A u —— 普 通 輝 石
	M g —— 磁 鉄 鉱
	P l —— 斜 長 石
	V e —— 発 泡 孔 (気孔)

図 版 1 淡灰色角閃石安山岩質軽石

斑状組織・軽石状組織を呈する。右上に大きく張り出ている鉱物は、よく劈開の発達した普通輝石で、半自形を呈し、内部に角閃石・斜長石・磁鉄鉱の結晶を包含している。中央部の無色鉱物は斜長石で、自形～半自形を呈し、普通輝石の内部に割り込むように結晶している。小さな暗点は緑泥石である。十字ニコルでは、カールスバード双晶、累帯構造が認められる。角閃石は、同様に普通輝石の内部に割り込むように結晶しており、褐緑色を呈する。内部に斜長石の小結晶を包含している。

石基部分はガラス質で発泡が著しく、いわゆる軽石状組織を呈する。

図 版 2 淡灰色角閃石安山岩質軽石

斑状組織・軽石状組織を呈し、基本的には図版1の岩石と同相・同質である。左右から張り出した劈開の発達した大きな鉱物は角閃石で、褐緑色で自形性が強く、内部に自形の斜長石をいくつか包含している。斜長石は自形性の強いものが多いが、右下のものは他形で、内部に緑泥石の結晶を生じている。十字ニコルでは、アルバイト双晶、累帯構造が認められる。

石基部分はガラス質で発泡が著しいが、図版1の岩石より発泡孔（気孔）が小さい。

図 版 3 黒色複輝石安山岩貫溶岩（岩滓質）

斑状組織を呈する。右上及び左下の劈開のみえる鉱物は普通輝石で、周囲に磁鉄鉱の結晶を伴っている。普通輝石は自形～半自形で、一部内部に斜長石の小結晶を包含している。右下方にみられる斜長石は、緑泥石によって汚濁されている。

石基はガラス質で褐色を呈し、発泡が著しい。発泡孔（気孔）は、直径0.1%前後のものが一面にできており、スコリア状になっている。

図 版 4 暗灰色複輝石安山岩貫溶岩

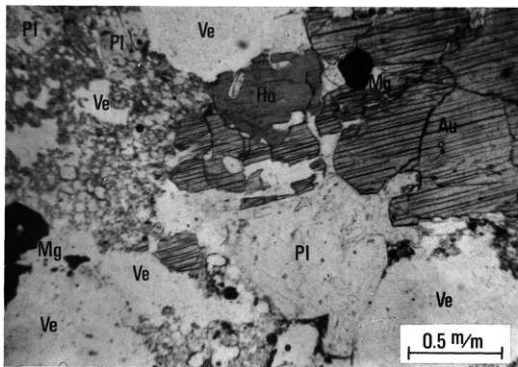
斑状組織を呈する。中央部及び右縁の鉱物は普通輝石で、周縁部に磁鉄鉱の小結晶を伴っている。十字ニコルでは、中央部のものにカールスバード貫入双晶、右縁のものにバベノ双晶が認められる。左縁にみられる鉱物は紫蘇輝石で、自形性が強い。斜長石は内部に緑泥石の結晶を生じているものがあり、十字ニコルでは、右上端のものにカールスバード双晶、中央部のものにアルバイト・カールスバード複合双晶が認められる。

石基は、若干発泡したガラス及び小さな針状の斜長石等からなり、淡褐色～褐色を呈する。

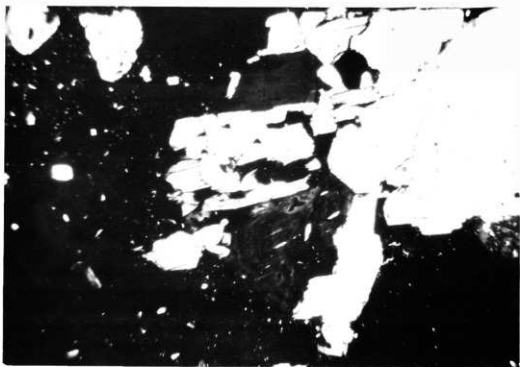
図 版 5 赤褐色普通輝石安山岩貫溶岩（スコリア）

斑状組織・岩滓状組織を呈する。左上の大きな鉱物は斜長石の集合結晶で、十字ニコルでは、カールスバード双晶・同貫入双晶が認められる。斜長石は半自形～自形で、カールスバード双晶を示すものが多い。普通輝石は半自形～他形で、周縁部に磁鉄鉱の結晶を伴っている。

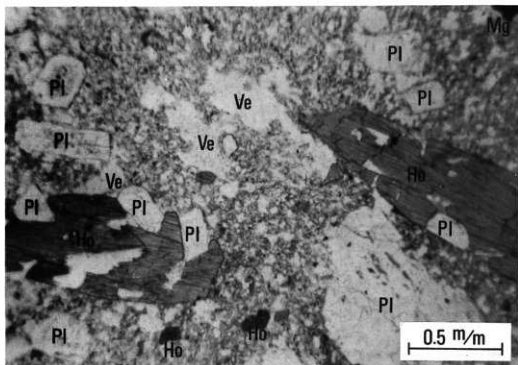
石基は、自形性の強い斜長石や半自形の普通輝石の結晶等でモザイク状に埋められており、結晶質である。これらの結晶のまわりは変質鉱物によって汚染され、全体的に暗褐色を呈する。発泡は顕著で、発泡孔（気孔）も大きく、直径0.5%前後のものが多くみられる。



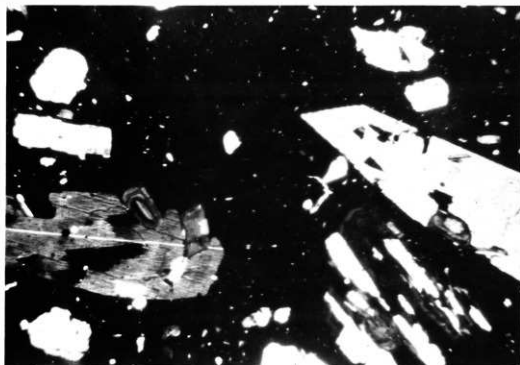
A 平行ニコル



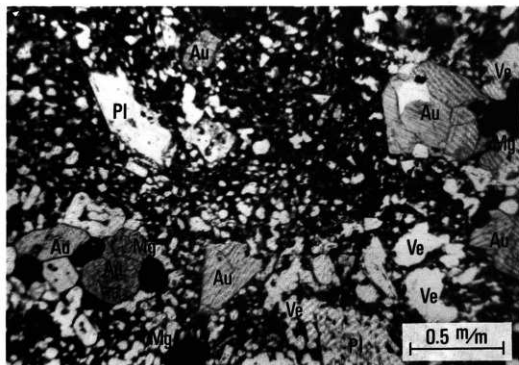
B 十字ニコル



A 平行ニコル



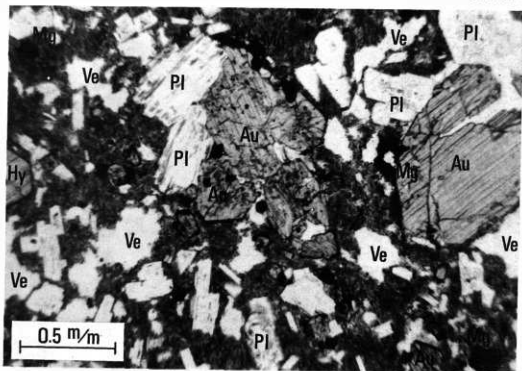
B 十字ニコル



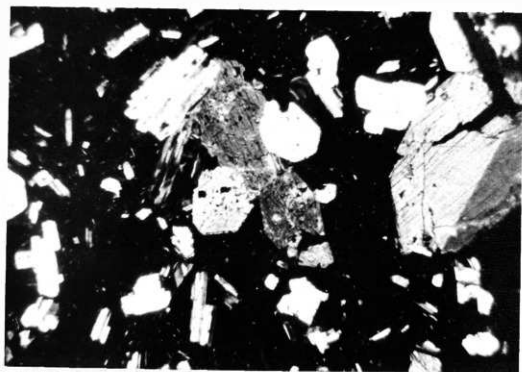
A 平行ニコル



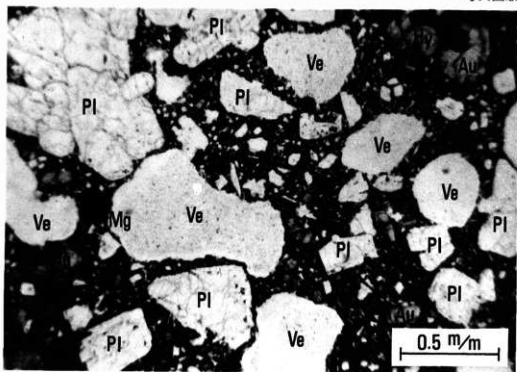
B 十字ニコル



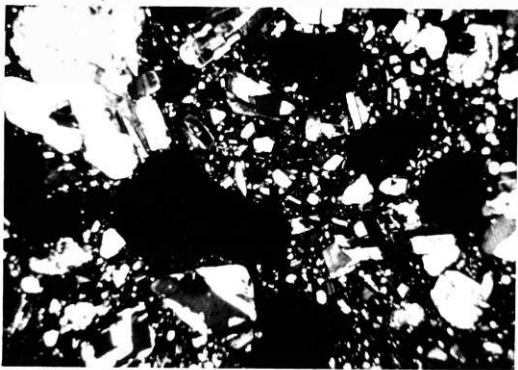
A 平行ニコル



B 十字ニコル



A 平行ニコル



B 十字ニコル

あ と が き

当本庄市では、県下でも早くから學術調査を行なってきたが、その後の乱開発に対応することができず、今回調査した、御手長山古墳の破損につながってしまった。

調査中、近隣住民始め、遊び場として育った老若男女の御手長山を偲ぶ姿を連日、目にした。日に日に掘り返えされてゆく姿に涙をうかべる人さえいた。幾多の成果を納めた反面、心のよりどころでもあった埋蔵文化財の保護、保存の意義を、いやというほど感じさせた調査であった。

破損事故の事後処理、発掘準備、調査、整理、報告書刊行の一連の事業のなかで、県文化財保護課課長はじめ職員一同、県立さきたま資料館長はじめ職員一同、本庄市史編集室一同、その他、ほんとうに多くの方々の大なる御支援をいただいた。

特に、本来なら担当者である小川良祐氏によって報告されるべきところ千載一遇の機会を、未熟な私に与えてくだされ、微に入り細に入る指導助言で、稲荷山古墳出土鉄剣、金石文発見で忙しい公務の間をぬって報告書刊行に、こぎつけてくださった。伏してまだ余りある光栄といわねばならない。

更には新潟大学医学部第一解剖学教室、小片保教授他教室の皆様、県文化財保護課、本間岳史氏には公務多端の折りにもかかわらず、無理な日程で、鑑定と原稿を寄せていただいた。

発掘調査では不休の連続、整理、報告書の刊行では加えて不眠の連続で、未熟なうえ、時間に限られた状況のなかでの調査、報告であり、多くの皆様の御支援に答えられたとは言えない。

不勉強ゆえ、述べ足りなかった分については機会を改めることも考えるが、今回の調査を真剣に受けとめ、今後の糧とすることを誓って、むすびといたします。

最後に、最終原稿引き渡し後、1週間で刊行するという時間単位の厳しい日程のなかで、報告書の印刷にあられた本庄孔版社、野原康正氏に対して深く感謝の意を捧げたいと思います。

(長谷川 勇)

埼玉県本庄市

御手長山古墳発掘調査報告書

昭和53年10月25日印刷

昭和53年10月30日発行

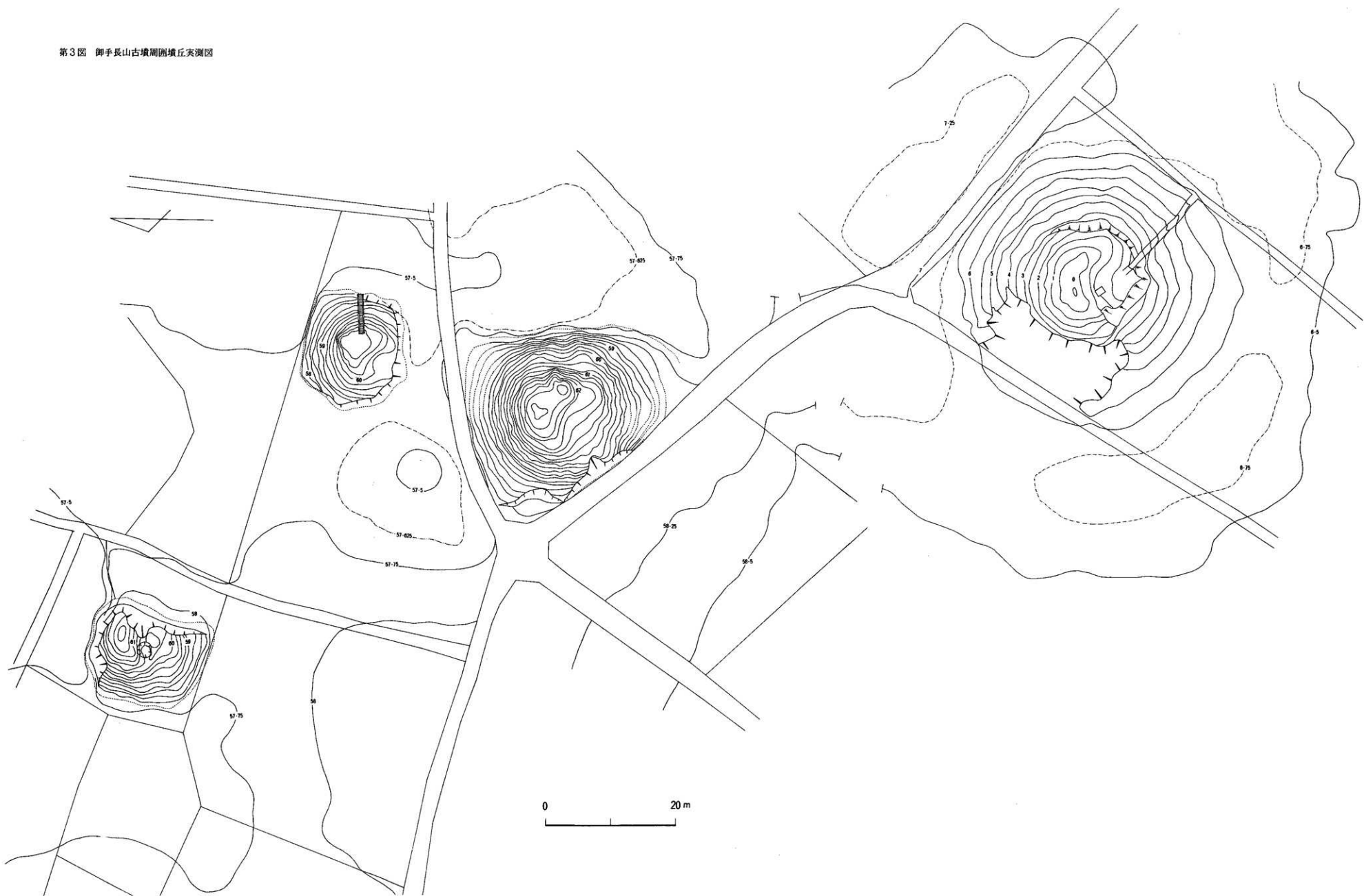
発行 本庄市教育委員会

本庄市銀座1-1-1

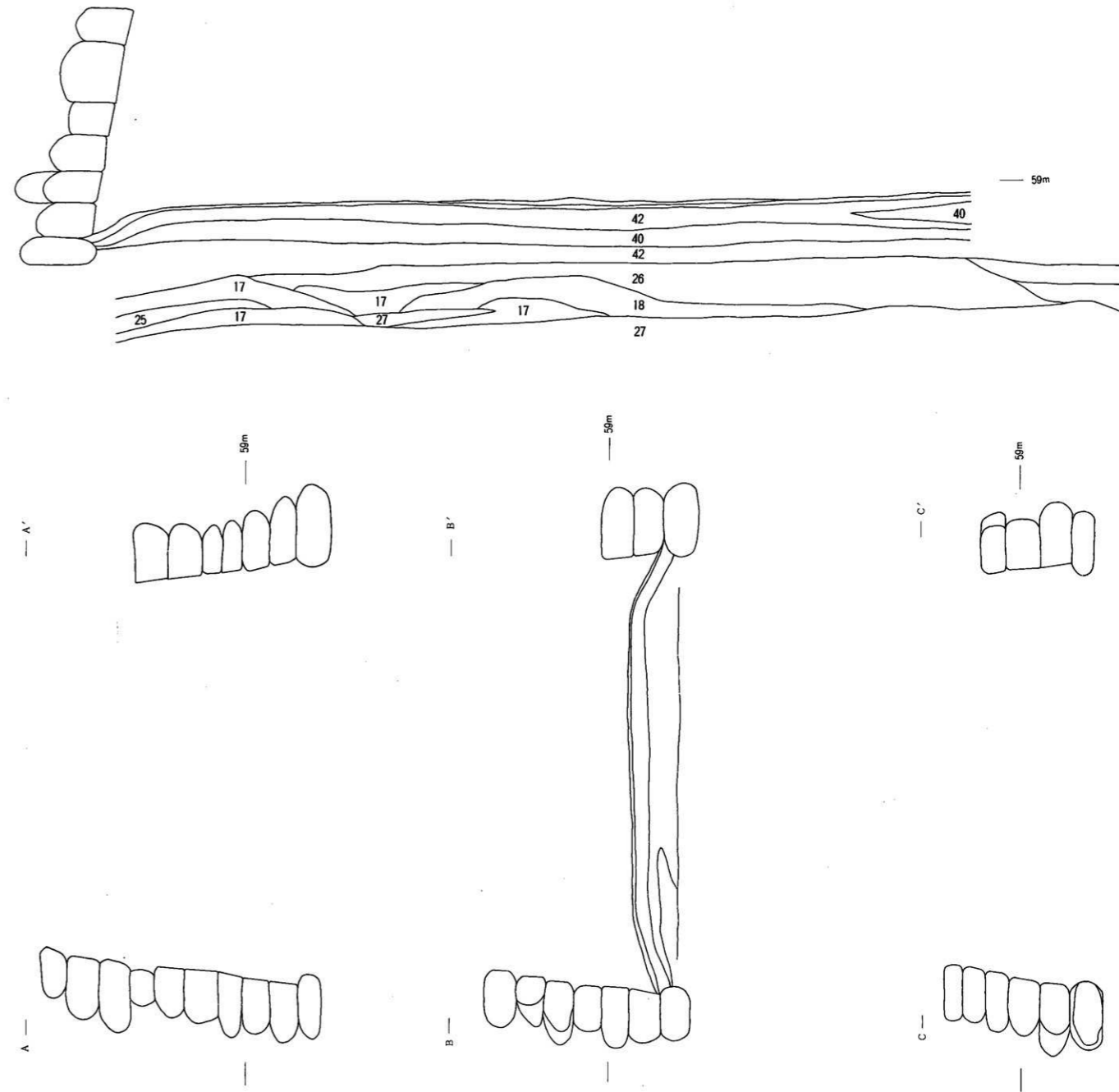
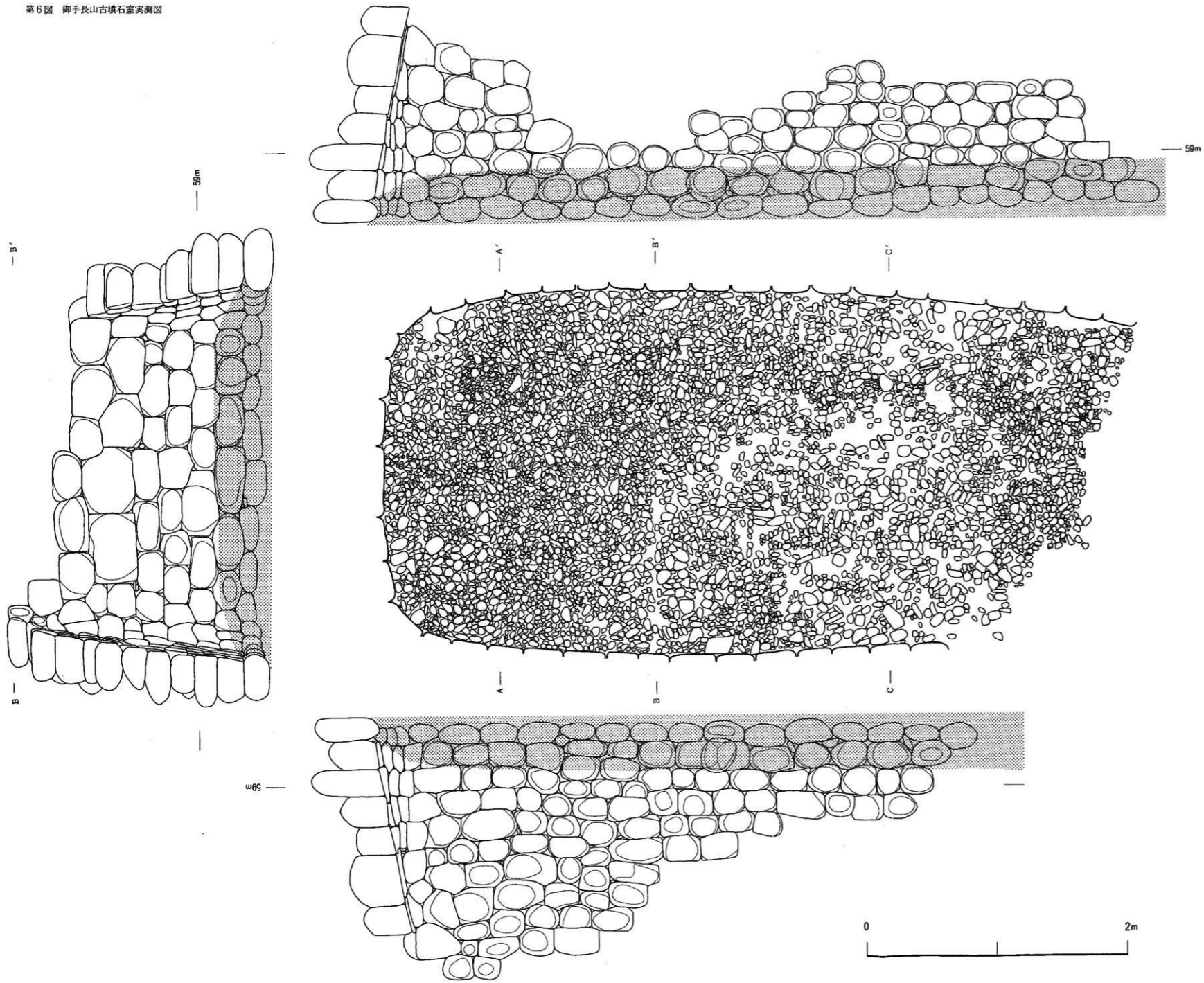
印刷 本庄孔版社

本庄市朝日町3299

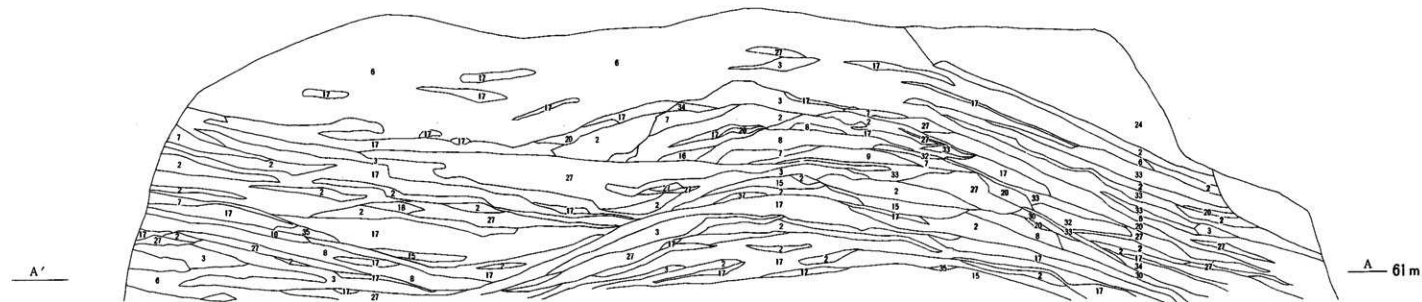
第3図 御手長山古墳周囲墳丘実測図



第6区 御手長山古墳石室実測図

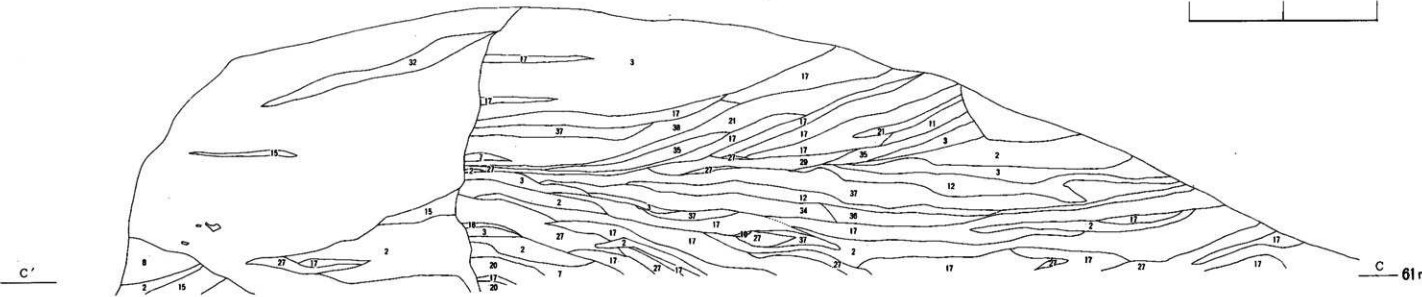


第9図 御手長山古墳墳丘断面実測図(上部)



A'

A 61m



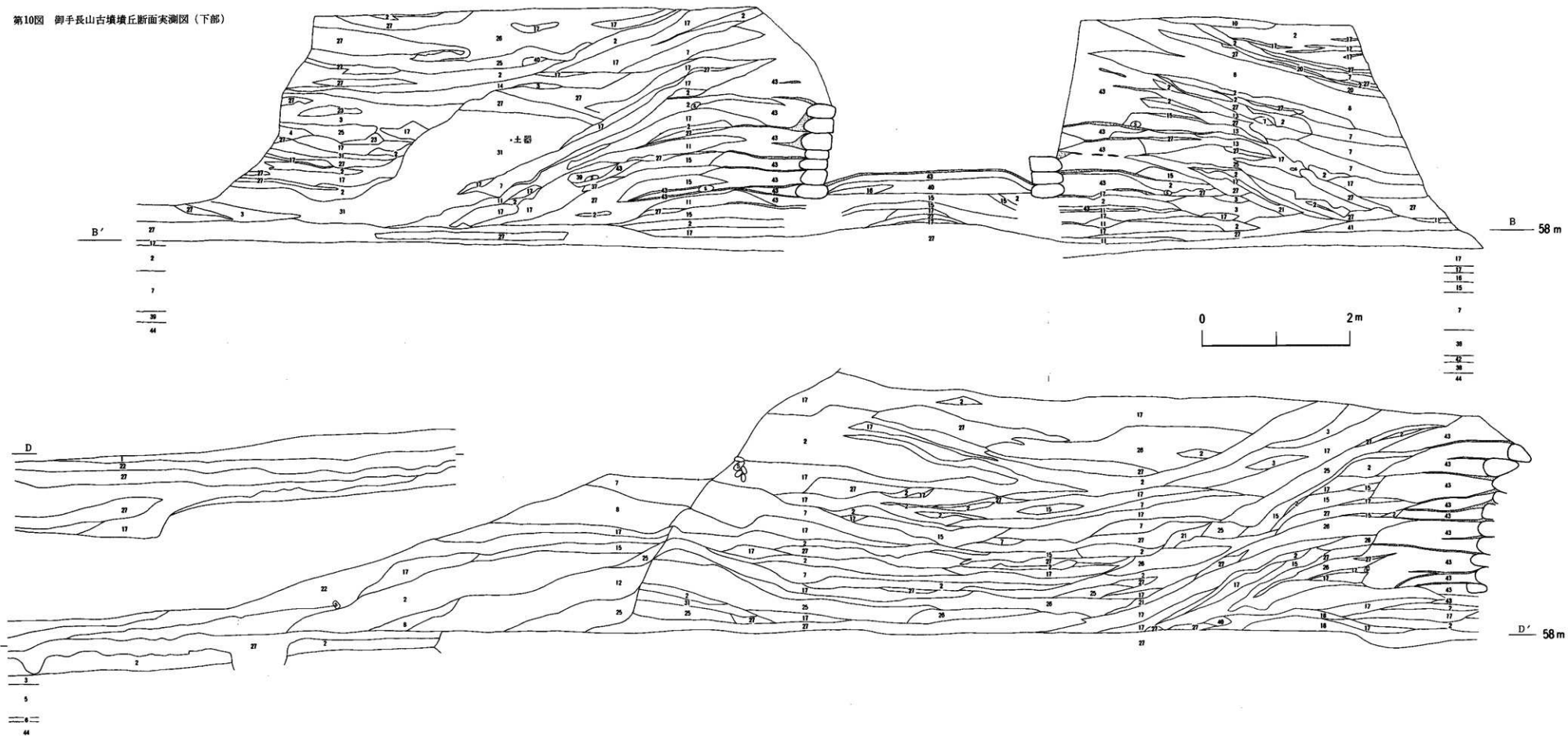
C'

C 61m



- 1 表土
- 2 褐色土
- 3 褐色土 (礫まじる)
- 4 褐色土 (火山灰含む)
- 5 褐色土 (粘質で礫を含む)
- 6 褐色土 (礫多量にまじる)
- 7 褐色土 (粘質強い)
- 8 褐色土 (砂質)
- 9 褐色土 (砂含み粘質強い)
- 10 褐色土 (砂ブロック状に入る)
- 11 褐色土 (ロームブロック含む)
- 12 褐色土 (砂層入る)
- 13 褐色土 (粘土ブロック 礫含む)
- 14 褐色土 (ローム、礫ブロック状に入る)
- 15 暗褐色土
- 16 暗褐色土 (砂を多く含む)
- 17 黒褐色土
- 18 黒褐色土 (砂・礫を含む)
- 19 黒褐色土 (非常にかたくしまっている)
- 20 黒褐色土 (粘質つよい)
- 21 黒褐色土 (ローム小ブロック多量に含む)
- 22 黒褐色土 (火山灰を多く含む)
- 23 黒褐色土 (火山灰を含む)
- 24 黒色上、褐色土 砂礫ブロック状にまじる
- 25 黒色土、褐色土 ブロック状にまじる
- 26 黒色土 褐色土 縞状に入る
- 27 黒色土
- 28 黒色土 (砂粒子を含み固い)
- 29 黒色土 (非常にかたくしまっている)
- 30 黒色土 (粘質)
- 31 黒色土 (ブロック状にローム入る)
- 32 灰褐色土
- 33 灰褐色土 (粘質強い)
- 34 灰褐色土 砂粒子含む
- 35 灰褐色土 (粘土)
- 36 灰褐色土 砂を多く含む
- 37 黄褐色土 (ソフトローム)
- 38 黄褐色土 (ローム・砂含む)
- 39 黄褐色土 (礫を含むローム)
- 40 黄褐色土 ロームブロック
- 41 赤黒褐色土 (黒色土に鉄分を多く含み赤っぽい)
- 42 砂 (青みがかった砂)
- 43 砂礫 (青みがかった砂礫)
- 44 砂礫 (茶褐色がかった砂礫)

第10図 御手長山古墳墳丘断面実測図（下部）



第12図 御手長山古墳周堀トレンチ実測図

